

々、何茂油斷有之間敷候得共、猶更向後之心得方宜可有御申談候事。

九月六日。前田齊廣夫人、齊泰の生母榮操院と共に卯辰山に行歩を行ふ。

〔諸事要用雜記〕

九月五日

一、榮操院様明六日五半時御供揃に而向山御行歩、真龍院様御縮内へ被爲入候旨御案内有之。

一、明日真龍院様御行歩に付、御重詰被進御品物伺申談、榮操院様へも被進候付、御奥示合之上に而、御干菓子被進候筈に付、是又御品付申談る。

同六日

一、今日真龍院様向山邊御行歩に付、御伺御機嫌、奉札を以御重菓子被進、榮操院様へも同様奉札を以御干菓子被進、高田氏より奉札入御覽被指遣事。

九月十五日。前田齊泰、金澤の郊外千日町口に放鷹を行ふ。

〔諸事要用雜記〕

九月十五日

一、今日九時之御供揃に而、千日町町端より御鷹野、泉油屋小路より御上り之儀に昨日被仰

出、御供當席より高田氏被罷出候事。

一、右御出九時前、御戻り七半時過之事。

一、御獲柄鷺一つ有之候由之事。

九月十七日。前田齊泰學校に臨む。

〔諸事要用雜記〕

九月十七日

一、今日兩學校御出、朝之分も繰下げ候儀被仰出候處、明倫堂・經武館度々之御出に相成付如何可有御座哉、猶當席了簡も承り度、其上に而御次第書も可差出旨被申聞付、示談之上相伺候處、入學生會讀は御聽聞被遊間敷、今日當り之講書、夫より經武館へ御出之儀に被仰出之段執筆呼立申達す。

一、八時前御出、明倫堂へ被爲入、組當り講書岡田喜陸相勤、御聽聞被遊、夫より經武館へ被爲入、半井佐太夫方出情人兩人鎗術御覽、相濟御襖建、重而常稽古不指支段申上り、無程御覽、四五組も御覽之上御襖建、夫より保田松之丞・淺川一平方出情人御覽被遊、夫より常稽古御覽、四組御覽之上是切りに而、跡は師範人兩人に内膳殿持馬并大音帶刀持馬被仰付御覽被遊、相濟七半時前御戻り被遊候事。

九月廿二日。前田齊泰石川郡宮腰に行歩を行ふ。

〔諸事要用雜記〕

九月廿二日

一、六半時過御出、宮腰口より御鷹野、所々御放鷹被遊、四時過同所中山主計方に而御小休。右御休前に鷺壹御獲柄有之。板淵御大鷹追川佐太夫捉上る。右御小休中、御召馬を初かもり渡鳥渡、夫より御供廻りに而惣御供被召連被爲入、右渡し御渡被遊、御上り之上暫御跡御見廻、無程御馬上被遊。夫より御早乗。御相乗候次第、御先肴次郎・監物・織人・御番頭權太郎・御帶刀久兵衛・津大夫・三郎左衛門・善右衛門、右之通騎馬御供に而、専光寺濱うつき通り被爲入、八田村より田畦道より松任へ被爲入。八田村迄二里計も有之、八田より松任迄一里計も有之。八田よりは甚道惡敷、御早乗は勿論、御馬上御無理に候へ共、御口付も續不申、騎馬之面々迄に而致方なく、小橋等甚危き所等も有之。御先乗之大村下馬、自分馬は百姓に渡、御口を持、御下馬被遊候ヶ所も有之。其内御中間も續き、八田より御鷹も御供之筈に而、其内御大鷹參り、鶯居申候に付御下馬御放鷹被遊。夫より御歩行に而、御供之騎馬口付も追々參り候付、爲牽、松任入口より又御馬上、同所町端迄御早乗被遊、騎馬御供例之通相勤。御戻り同所御休所被爲入、餘程御休被遊、同所に而於御前御酒等頂戴。畢而八時過御供廻り、

惣御供は町端迄御先へ遣、鳥次第御放鷹之圍りに而被爲入、野町町端より御戻り、七半時過御歸殿被遊候事。

〔上貨屋日家榮帳〕

九月廿二日御殿様御出、中山に御休被遊、其より御船にて向之濱御渡被遊候。目出度。

九月廿四日。前田齊廣夫人、河北郡薬師村附近に行歩を行ふ。

〔諸事要用雜記〕

九月廿四日

- 一、真龍院様薬師村邊御行歩御出被遊候。
- 一、真龍院様夜五時過御歸殿被遊候段、内藤勘兵衛より案内紙面參り候事。

九月廿五日。念佛行者義賢金澤に來る。

〔大鋸文書〕

今年天保とせいとせかのへ子とし、念佛の行者義賢と稱し奉る大徳、春の末つかたより鳥がなく吾妻を立出たまひ、こゞしき三越路なるしらね・たち山へ籠り給はんとて、まづ途すがらなるには善光寺・或は戸隠山に籠り念佛したまひ、さて文月のこゝの日といふ日より彼名に高きたち山へ籠り、念佛供養のため大願を起し、凡四十八日といふ計も籠り給はん御

志にて、此大山の淨土山といふへのぼらせ給ひ、念佛し籠り給ふに、三七日といふにはや其願成就ならせたまひて、富山の巷へをりさせたまひ、此大城の下にて日課念佛の供養授け給ふ。夫より魚津大泉寺において日課供養念佛、又放生津曼陀羅寺において同御供養。かくて金澤表より御門中方爲惣代、まづ淨安寺・誓願寺・壽經寺等の和尚達爲御招待放生津へ御出有て、九月廿五日午の刻計に此大城の御もとへ着せ給ふ。前日より津幡・竹橋邊でも講中など御迎に出たり。其日は曉天より御迎之貴賤群をなせり。以前徳本行者之はた幟などをもたて、驛々宿々よりさゞげしはた幟のるるを先へ立つらね、鉦鼓之音遠近にひゞき、大樋町端茶店に御腰かけさせ給ひ、御十念ありければ、我先と押合けり。こゝを御立出、近々善の綱つぎたしく稱名の聲しばしも絶る事なし。行者之御立出には、先紀州公より手向られたる彌陀尊像之寶堂、又次に行者行中つかせ給ふ錫杖をつき、又次に大香爐を荷はせ香をくゆらせ、行者其かみ徳本行者の安置し給ふ彌陀尊一寸八分之尊像并佛舍利、則此行者讓請給也。此尊像を錦の袋に入、片時も放し給ず、たゞかちはだしにて步行給ふ粧誠に矢をいるが如し。急ぎ光覺寺といふ御寺に御立入給ひ、此御寺に待まうくる人々群集す。直様本尊前へ拜禮有つて、十念授給うて直様たち出給ふ。夫より寺町極樂寺へ着せ給ふ。

扱亦十月朔日より如來寺へ御移り、如來寺方丈并御隱居玄關前まで御出迎、御十念授け給ひ、

御隱居へ仰には、此の世をのぞみ給ふまじ、念佛往生を待たまふべし。命終も遠かるまじと仰有けり。難有とも殊勝とも言盡しがたし。此御隱居は當年七十五の齡を得給なり。老病にて步行不叶。于時行者御立出給ひて三日めと言に大往生を遂げ給ふ。其辭世に曰。

長滞留をいたしました今日こそは御暇申とめてくれるな

一筋に道を往けり冬の月

扱如來寺においても前に言ふ如く、日課參詣入替りく、貴賤群集彌増けり。中には御大身方にも日課授り給ふも有。前田何某様御母堂は日課授り、終日參詣し給ふ。

扱かみな月六日、彼如來寺を御たち、御本尊前にて御名残の御十念御授、方丈の御頭へ彼の寶堂にまします御佛をさゞげ、一蓮たく生の御名残を供養回向したまへば、參詣の人々貴賤袖をしぼりあへり。實ありがたき事ともなりけり。夫より御門前松原町御通にて、御代參の女郎方三人装束にて床几に毛氈を敷座したまひ、今やおそしと待給ふ。やがて行者御弟子隨伴之面々もろとも、前に如言日課念佛戒行之御文常のごとく御授け、日課五千遍御受之由也。其御勸解には朝日の恵といふかな書の御文あり。其趣をさとされけり。こゝをたち出給ひ、やがて御見送りの人々貴賤群集する事御迎のときに彌増ける。六日松任御泊り、七日・八日小松、九日・十日大聖寺。

九月廿七日。前田齊泰の生母榮操院河北郡薬師村に行歩を行ふ。

〔官私隨筆〕

九月廿六日

一、榮操院様明廿七日六半時之御供揃にて、薬師村等へ御行歩被仰出候由。

九月廿七日

一、五時過榮操院様御機嫌能只今御戻之旨、山森九兵衛より紙面來る。

〔諸事要用雜記〕

九月廿七日

一、榮操院様今日御行歩に付左之通奉札指遣返書御近習頭より入御覽。

以手紙致啓達候今日榮操院様薬師村邊御行歩御出被成候處天氣茂宜緩々可被爲入与思召候猶更御見廻被仰進候條此段宜敷御申上候様可相達旨被仰出候、以上。

九月廿七日

大野 織 人

村田豊之助殿

十月五日。前田齊泰、富山侯前田利保が西丸普請助役の功を賞せられたるを謝する爲幕府に書を送る。

出雲守に富山侯前田利保

〔成瀬正敦日記〕

十月五日

一、西丸御普請御用、出雲守様御勤に付、前月廿二日御登城御懇之上意被爲蒙、御時服御拜領に付御禮御書、三御所様附御老中方、井伊殿都合四通御出來、御日附今月七日に而御指出、今日御用人に御渡之事。

十月七日。五ヶ山の鹽硝を買上ぐる爲町藏の借上を命ず。

〔御家老方等諸事留帳〕

十月八日

一、當年より五箇山一山之鹽硝不殘御買上に相成候に付、町藏兩所借上之儀、矢野所左衛門より相達、承届候段昨日申渡。

十月八日。前田齊泰の子利義・利行水痘に罹る。

〔官私隨筆〕

十月八日

一、今夕角尾孫兵衛より以紙面、基五郎殿・豊之丞殿夜前より御熱有之處、御水痘御治定、御順症之旨申越。依之播州方へ以紙面及示談候上、七半時過罷出、加藤新之丞に逢候而御様

子承候處、御兩方様共御順症、基五郎殿は別而御軽く、御平生之通に而、今日御囃子有之、御見物所へも被成御出候。豊之丞殿は先日より之御熱は段々御醒之處、夜前又々少々御熱有之處、今日御發し物見え、御兩方様共御醫者追々伺、晝後御水痘御治定之由也。依而御機嫌相伺候處、御順症に而御悅被思召候。御機嫌伺罷出御大慶之由仰之趣演述。及御請、播州も追付被罷出。

一、御醫者大庭探元・高嶋正頼呼候而相尋候處、右同様之趣申聞、何も奉案事儀無之旨申聞。御藥は荆防敗毒散加葛根被召上候由。

十月十三日。二條齊信の使者金澤城に登り金子調達を求む。

〔成瀬正敦日記〕

十月十三日

一、二條様御使者隠岐播磨守四ツ時過登城、表向時候御見廻之御口上、御奏者番御取次、御近習頭を以申上候付、御答御家老を以被仰上候付、御近習頭を以御家老に被仰出候由。

一、御内用之御口上御取次は、御家老将監罷出承り、袖扣并左府様より御直書も被進候付受取、當席を以被上候付入御覽、御先振相しらべ文政元年也御書御受取被遊候。御答は追而可被仰上旨、當座之御答被申述候様、將監へ被仰出候付、主税將監へ申達。

一、右御内用御願筋御口上書は、御用番内匠に御渡、遂僉議被申上候様被仰出之趣、主税御席へ致持參相達之。

十月廿二日

一、二條様御使者に御内用御答之趣詮議を遂、昨日御用番より被申上候付、今日右御答書下物に而、織人を以八郎右衛門に御渡、但將監見合中に付、右御答御使入耶右衛門發勤候旨に付右之通也。明日旅宿へ罷越被申述候筈。御返翰は明日御渡之旨も織人申述置候事。

右御内用御答之趣は、二千五百兩御頼候へ共、色々之仰立に而、今來年に米千俵御振替可被進旨也。

十月廿七日

一、二條様御使者隠岐播磨守に御内用之御答、此間相濟候所、今一篇御家老中に逢度旨申聞に付、一昨朝八郎右衛門旅宿へ罷越候所、いづれ二千俵無御座而は御指支之旨等申聞、今一返御僉議之様強而相願候旨等、一昨日主税を以八郎右衛門より被申上。右之委曲御用番へ可相達奉存候旨も申上り、昨日御用番より右之趣書取主税御取次を以被申上、御留守中に付今朝申上る。

一、右に付昨日小左衛門を以被申上候は、御使番由比勘兵衛申聞候は、播磨守儀此度八郎右

衛門殿迄申述候御答さへ有之候得ば、歸京仕度躰之旨宿之者申居候由。此儀勘兵衛より御次へも右
職人を以申上り居候事等を以相考候所、此度之儀いづれ最初之僉議之通千俵御振替被進候は、大躰納得可仕躰に相考候へ共、重而申聞之趣故、無味に御僉議無之儀も相成間敷、少し之違に候へ共、今來年に千俵与申所、當暮一時に千俵被進、年賦も來々年より二十ヶ年賦を以御返濟与申所、二十ヶ年とか相成候事に候ば、大躰納得可仕哉与奉存候得共、指付御家老に而申談候而も、又彼是有之候事も如何に候間、先内分町奉行を以爲申入見候ば可宜哉、何れも遂僉議候旨申上候付、伺之通与被仰出候事。

十月晦日

一、二條様御使者の町奉行引合候所、千俵之内七百俵當暮大津御藏米を以被進、殘三百俵は來春大坂に而被進、其外に當暮御返納有之五十兩、去々年歟江戸表に而御振替金
二百兩、當暮御返濟之分。來々年より二十ヶ年賦御返濟之事相成候は、納得可仕旨、御使者申居候段町奉行申聞候旨、此間御用番より申上り、右之趣に昨日御家老前田圖書を以被仰入、御使者御請申聞候由。

〔御家老方諸事留帳〕

十月廿五日

二條様御使者隱岐播磨守、將監宅又は八郎右衛門宅に罷越、此間御内用之御答之趣に付、今

一篇逢候而申聞度儀有之旨、昨日由比勘兵衛を以申聞候處、將監儀は當病、八郎右衛門宅は指支之趣有之に付其段申遣、旅宿の今朝罷越候處、播磨守申聞候は、今度御内用御頼之趣段々各様御心配被下、格別之御逼迫中結構に御贈進被成達、於私茂難有儀奉存候。早速京都に申上候。于時一昨日私御使者相勤退出後、尙更御書取得与拜見仕思慮仕候處、今來年に千俵御贈進に而は、中々御手筈相違仕候。依而今千俵御増被進候儀は相成間敷哉。是非當暮之處千兩無御座而は相成不申候。段々結構に御答被仰進上、私と仕重而ケ様に願候儀奉恐入候儀に御座候得共、兼而被仰付置候儀故不願恐御難題相願申上。御當地之様子承候處、米價次第に下落仕様子、此体に而は京都向も尤同様之譯御座候間、彌當暮之處御差間に相成候間、何れに茂當暮千俵、都合二千俵御贈進之御僉議奉願候。御繰廻方御六ヶ敷儀も御座候は、當年五百俵、來春之處に而千五百俵に而も宜、左候へば先を目當に何とか御手筈も出來可申哉と奉存候旨申聞候に付、於此方様も御逼迫中ながら無味御斷も被成兼、格別に僉議被仰付、漸に千俵御贈進被成達候譯。京都向御無心ケ間敷儀御斷被成置候儀、外々様之差障にも相成候間、此上之僉議は六ヶ敷旨等段々申入、詮議を致候ても餘程日間も懸り可申間、先引取可申、跡より何とか否申進べく旨申入候得共、今一篇之否承知不仕而は、態与被仰付儀ゆゑ難罷歸旨申聞候に付、左候は、夫々相違、及僉議否可申達候。中々被申聞通には相成不申

旨申入置候事。

十月十五日。前田齊泰の子利義、利行の水痘癒え酒湯を浴す。

〔官私隨筆〕

十月十五日

一、二御丸退出、直九時過播磨守一所に御廣式へ罷出、基五郎殿・豊之丞殿御酒湯御祝詞、以丹羽權佐・村田定之助申上候。御肴一折充、目錄右兩人へ相渡候處、追付仰之趣演述。其上に而御吸物・御酒・取肴被下之、畢而以權佐御禮申上候。

十月十八日。幕令により速に文政小判及び壹歩判等の引替を了すべきことを告ぐ。

〔觸留〕

文政小判・壹歩判等引替方之儀に付、水野越前守殿より御勘定所へ被仰渡候御書取寫壹通、相越之候條、被得其意、右金子所持之者は早々引替可申候。若其向より引替方手寄惡敷儀も有之候は、所持之金高等書記、其頭・支配人より御算用場へ相達、受指圖可申事。右之趣被得其意、同役中傳達、組・支配不相洩様可被申渡候。

十月十八日

横山々城守

御書取寫

文政小判・壹歩判引替方之儀、近頃諸向引替差出方抄取不申、右者頓而通用停止可被仰出儀に候間、御領分在・町金銀取引いたし候ものは勿論、其外所持之ものは早々最寄引替所へ差出可引替旨、尤其所に而重立候もの厚世話いたし、右金並古文字金・真字草字貳歩判とも、此上引替差出方抄取候様可被申渡候。

十月十八日。前田齊泰、金澤大豆田口に放鷹を行ふ。

〔諸事要用雜記〕

十月十七日

一、明日六半時不遲之御供揃に而、大豆田口町端より御鷹野、千日町町端より御上り、野間御道程二里半計之旨申上る。右之通被仰出候事。

十月十八日

一、例刻出席之筈候處、今日御供に付六時出宅御殿へ出、御供廻に而御先へ出、大豆田口に而御待合申。夫より御供、所々御放鷹被遊、八時御歸殿被遊候。雁餘程居候得共、兎角都合惡敷御獲柄無之、晝より少しぶき、早々御道に而御戻り被遊候事。

十月廿一日。前田齊泰學校に臨む。

〔諸事要用雜記〕

十月廿一日

一、八時前學校の御出、經武館に被爲入、山森武太夫方劔術稽古御覽被遊、其内會讀不指支段申上、夫より明倫堂に被爲入、御襖明候上相始、御大小將三席、入學生二席相勤め候上、堂之中程に御出被遊、御先立成瀬相勤。其内馬術不差支段申上、夫より重而經武館に被爲入、保田幸藏方馬術御覽被遊、奥村主税持馬并貸馬之内栗毛、幸藏并庄兵衛に被仰付御覽、直に御戻り被遊候事。

一、七半時御戻り之事。

十月廿三日。前田齊泰、陸原大次郎に瀧之間に書を講ぜしむ。

〔諸事要用雜記〕

十月廿三日

一、今日瀧之間講書御聽聞之由、御近習頭より被申聞、無程御出之旨付、御前後御先立自分相勤、五半時過御出、四時過御入之事。

郷黨之篇

講師 陸原大次郎

十月廿七日。前田齊泰、金澤郊外七ツ屋口に放鷹を行ふ。

〔諸事要用雜記〕

十月廿六日

一、明日御鷹野御出被仰出、高田より御近習頭へ申談る。

明廿七日九時之御供揃に而、七つ屋口町端より御鷹野、無量寺村に而御小休、宮腰口より御戻り可被遊旨被仰出。

十月廿七日

一、九時前御出被遊、七つ屋口より所々御放鷹被遊候事。

御拳 小鷺一 雁一

御分鷹に而 雁一

筒に而 菱喰一 鶉一 小原彌五右衛門

十一月二日。前田齊泰、その子利義と共に放鷹を行ふ。

〔諸事要用雜記〕

十一月朔日

一、明日九時之御供揃に而、御鷹野御出可被遊旨被仰出、高田氏より夫々御鷹方へも談有之、

御道書等御近習頭へ指出候事。

一、明日基五郎殿御同道可被遊旨被仰出、御廣式頭呼立其段申談、重而右頭罷出御禮之段申聞、拙者共退出後に付奥御取次を以申上候事。

一、明日御道書上り、大豆田口より宮腰中山主計方御小休、夫より廣岡口御上り之筈に候事。

同二日

一、九時頃御出、大豆田口より御鷹野被遊、暮頃御歸殿被遊候事。

一、右御供高田被罷出。

一、基五郎殿御先へ被爲入、野間之内御同道、御道遅に付被仰進、御駕籠に被爲召候由。

御拳に而 小鷲一 かもめ一

御分鷹に而 小鷲二

雉子突 雉子一

一、右之通御獲柄有之候事。

〔官私隨筆〕

十一月二日

朔日とあるは二日の誤なるべく、本龍寺は宮腰なり

一、基五郎殿今日四半時御供揃、相公様御同道御鷹野御出之由、御廣式頭以紙而斷。

〔上貨屋日家榮帳〕

十一月朔日御殿様御出、本龍寺之前より寺町御出。其より、小問物屋之横より中山へ御出。其より辻御通り被遊。目出度。

十一月八日。御廣式御用本多播磨守・奥村丹後守二人、前田齊廣夫人に財政困難の狀を告ぐ。

〔官私隨筆〕

十一月六日

一、金子五郎太夫罷出候付、御勝手御難澁之御様子共眞龍院様へ申上候様にと之御儀に付、近日御透次第被爲召候様仕度、御日限相極り次第しらせ有之様にと申入之。

一、右之節眞龍院様等へ御圖帳入御覽候節、左之通小紙に調入御覽可然哉と申合候間、御序に可被入御覽哉之旨申入之。

一、御米入方 三十二萬千二百十五石計

同御拂方 三十四萬八千百六十六石計

右指引して 二萬六千九百五十一石計 御不足

加賀藩史料 第十五編 天保十一年

一、御銀入方 一萬千三百八十五貫目計
 但作難御手當米二萬五千石御銀に圖り入
 同御拂方 一萬三千二百四十五貫目計
 但御米渡り之内代銀を以相渡候分共
 右指引して 千八百六十貫目計 御不足
 米に直し三萬七千二百石計に成
 前段御米御不足 二萬六千九百五十一石計共に都合御不足高
 六萬四千百五十一石計
 草高に仕候へば十六萬三百七十石餘に相成申候事。

〔官私隨筆〕

十一月八日

一、八時過退出、直に播磨守と兩人金谷へ罷出、以飯尾吉太夫御機嫌相伺、此間申上置候儀に付罷出候旨申上候。
 一、無程御居間被召、兩人罷出、御圖り帳并書取入御覽、御難澁之御様子等段々申上。畢而復座仕候上、老女中二・三人へ猶又御圖之様子相咄し、追付退去。但段々御懇之仰あり。

十一月九日。御廣式御用等、前田齊泰の生母榮操院に財政困難の狀を告ぐ。

〔官私隨筆〕

十一月九日

一、八時過退出直に御廣式へ罷出御機嫌相伺、此間申上置候儀に付罷出候旨、以角尾孫太夫榮操院様へ申上候處、追付御奥へ通り候様にと之事に而罷越。
 一、追付被召、榮操院様御居間へ罷出、昨日眞龍院様へ申上候通申上之、帳面并覺書共御留也。畢而七時退座、御目通被仰付御懇之仰之御禮以老女申上之。御廣式へ罷出候上重而御禮は不申上候。

十一月十六日。前田齊泰學校に臨む。

〔官私隨筆〕

十一月十六日

一、今日學校へ御出に付自分は八時退出より罷出。

十一月廿二日。町方教導の件に關して議す。

〔官私隨筆〕

十一月廿二日

一、水原清五郎罷出、町方御教導方之儀町儒者に被仰付、二日讀之類も其方に而教示仕可然様に先日寄合之節申候へ共、町方に而二日讀之儀は前々より之仕來に而、本町は毎月二日、地子町は家之賣替有之節々爲讀聞候事に相成居候間、是は其儘相立置、御教導方は別に相成可然旨。且又町儒者宜分も無之躰に候。當時明倫堂に而町・在講釋日も相立居候事に候間、夫を御押弘め有之、先町會所に而教示被仰付候様に有之候而も可宜、其上は塾を被仰付可然哉と重而心付候旨。

十一月廿四日。光格天皇崩御の報京都より金澤に達す。

〔成瀬正敦日記〕

十一月廿四日

一、京都詰人より、當廿日出町飛脚不時立早飛脚に而、當十九日酉刻仙洞様崩御之旨、平田内匠御沙汰書到來。

右に付遠慮之儀御尋に付、年寄中席承合候所、文化十年閏十一月三日か、仙洞様崩御之旨同十日に京都詰人より申上、江戸表より御書付は同十九日到來に付、十九日より五日遠慮之儀

觸出に相成居候旨に付、其段申上置候事。

十二月四日。光格天皇崩御の報江戸より金澤に達す。

〔御郡典〕

仙洞御所前月十九日崩御之由、江戸表より申來候。依之普請・鳴物等、今四日より八日迄日數五日遠慮之筈に候。右之趣被得其意、同役中傳達、組・支配不相洩様可被申渡候、以上。

十二月四日

本多播磨守

石野右近殿

十二月十二日。京都の御用商人大森三郎兵衛に金子貸與を許す。

〔成瀬正敦日記〕

十二月十二日

一、大森三郎兵衛今般出府願之趣は、連年勝手難澁指迫り、御用も勤兼、最早家失之場へ至り候間、銀子百貫目拜借之儀、表向會所奉行・町奉行へ願出、於表方御僉議有之、御次へも願書指出し、表方へ相送り置。然る所御僉議之上、格別之趣を以五百兩御貸渡御聞届之所、右迄に而迎も歸京も仕兼候旨等、重而重々相願候故、打返格別之御僉議に而、御用代之内繰上御貸渡之趣に而、來年より七貫目充十ヶ年御貸渡、十一ヶ年目より御用代銀之内を以返上

之事に御聞届有之候。右之通格別之御取扱も有之所、願通に而無之に付、何分當暮之所指支候間、於御次御取扱之儀相願候へ共、當夏相願候節、御用代繰上十七貫目御貸渡、來年より御用代之内を以五ヶ年賦に返上之事申談置、且先日出府之上相願、當暮浦野向利足金百兩も繰上相渡、且御納戸御用代銀之内も繰上、七貫目於京都相渡候事も聞届置。右之通重々取扱置候上之事故、一圓難取揚旨再三爲申上候得共、いづれにも少々成共御振替無之而は、不罷歸程に重々歎願いたし候付、僉議之内當暮五貫目於京都御貸渡、來年表向に而相渡七貫目之内を以返上之儀、堅き取極に而承届遣候。右に付三郎兵衛儀は、明後十四日此表發足罷歸候由。

十二月十五日。前田齊泰、光格天皇崩御し給ひしを以て使者を發遣す。

〔成瀬正教日記〕

十二月十四日

一、仙洞崩御に付、禁裏御機嫌御伺、京都に之御使御歩頭半田左門に御渡之御書出來。御日付十五日、御所司代牧野備前守殿・禁裏附御連名都合兩通。外に僉議之趣有之、大宮御所に御機嫌御伺、仙洞附に而御書に而御伺之儀に候へば、右御附衆にも御書一通、右御書込に付備前守殿へ之分も一通出來。但此兩通は彼地に而僉議之上御入用之分也。右都合四通出來、

明日御用番へ御渡之筈。

〔溫敬公記史料〕

十一月十九日上皇崩。遣半田景員京師獻賻。

十二月廿二日。前田齊泰能を演ず。

〔官私隨筆〕

十二月廿一日

一、明日御能被遊候付、望次第拜見被仰付旨、御用番迄被仰出演述あり。御禮申述。但服は常服五半揃之由。

十二月廿二日

一、右に付五半頃登城。

一、四時過御能初る。

常陸帶 御 大佛供養 万十郎 定 家 權之進

船辨慶 御 猩々 基五郎殿

十二月。石川郡粟ヶ崎村藤右衛門及び向粟ヶ崎村德兵衛を御扶持人十村列とし御金御用を命ず。

〔御家雜等の抄〕

天保十一年十一月

一、粟、崎村藤右衛門、向粟、崎村徳兵衛儀、格別之者に付、親々病死後間も無之候得共、親共同様御扶持方等被下、御かね御用被仰付、苗字爲相名乗候様可申渡哉之旨伺之通被仰出。

〔御家雜等の抄〕

天保十一年十二月

一、粟、崎村藤右衛門、向粟、崎村徳兵衛、御扶持方等被下、苗字爲名乗候様申渡候處、去年御郡方御仕法復元之節、惣年寄より年寄並之者迄は名字爲名乗、平十村之分は苗字御指省被仰渡候處、藤右衛門等苗字相名乗候様就被仰渡、平十村も名字相名乗候儀相願候得共、去年段々被仰渡候趣も御座候故相願兼候間、藤右衛門等御扶持人十村列に被仰付候様願に付、其通被仰付候儀伺之通被仰出。

天保十一年

正月朔日。前田齊泰金澤城に於いて年頭の賀を受く。

〔御家老方諸事留帳〕

正月元日

一、五時登城、近例之通於御小書院御禮申上、年頭御作法に而近例之通也。四半時此御禮相初候也。

一、御熨斗頂戴、例之通二、間也。御禮列座、御臺所奉行土屋武右衛門を以申上、直に鶴之御吸物頂戴、御吸物一篇、御酒、御取肴巻鯛、近例之通也。御吸物之御禮御膳奉行永原傳七郎を以申上。

〔若年寄方御用留〕

正月元日

一、四つ時過列居可仕旨御用番より演述に付、瀧、御間を罷越御目錄持參、御太刀御進物裁許與力より指越、追付御禮相初候而相濟、御家老は瀧、御間御障子を明、萩之間伺公所へ被出、若年寄御先立、并御襖役は瀧、間に罷在、御横目相圖次第御襖役は大廣間を被出、夫より御先立、御小書院三、間へ罷出御相圖申上、御先立朔望之通御入替儀無之。

一、御膳奉行御奥書院御縁側へ罷出、御意可申述旨申聞。則罷出候處、鶴庖丁御下可被下旨御意申述候に付、難有仕合奉存旨申述、指續御臺所奉行御熨斗可被下旨御意可申述旨に付、

奥書院御縁側象御杉戸邊へ罷出候處、御臺所奉行御意申述候に付、退き席に而頂戴、重而罷出、御例之通御熨斗頂戴、難有仕合奉存候旨申述。二番座御禮人列居宜段申上候旨演述に付、御先立外記殿御居間書院へ被相廻、將監殿・自分御襖間へ罷出候。右相濟、鶴御吸物於席被下候御禮、御膳奉行呼立申述候。最初之通象御杉戸之邊へ罷出候事。但、御熨斗頂戴之儀、二番座前に調置候得共、二番座相濟被下候事。

一、二番座御入之節、御居間書院三ノ間において、御作法書之通御近習之人々御禮被爲請候に付、如每御先達落處よりは少し進、御居間書院二ノ間御式居之際に控、御着座之上退、御居間書院二枚たて之外、御見通に不相成所に暫控罷在、舟之御間御禮人相濟候を見計被引取候事。

正月二日。諸初の儀を行ふ。

〔官私隨筆〕

正月二日

- 一、五時過登城、御作法付之通相濟、歸宅は四半時過也。
- 一、御謠初に付八つ打候而登城。
- 一、七つ頃御規式初り、暮合よりは餘程前に濟。尤途中提灯なしに歸宅。

一、今日御大廣間御座之御間御下段也之御後之方、矢天井之間之内を屏風に而圍、基五郎殿御見物あり。

正月十七日。前田齊泰、その子慶寧に本郷邸の御廣敷より東御居宅に移るべきことを命ず。

〔成瀬正教日記〕

正月十六日

一、左之趣相伺、明日日柄も宜に付被仰出候筈之事。
犬千代丸様御表御住居被成候様被仰進方之儀。文政三年四月六日御前御表御住居被仰進候節、伊藤内膳御廣式に罷出、改田主馬を以申上、追付内膳被爲召御直答被仰出候。今般は江戸表に申上候儀に御座候間、原五郎左衛門呼立、左之通申上候様申述、御請之儀も竹田市三郎を以被仰出、五郎左衛門に申來候上、五郎左衛門より申聞、其段申上候方に而可有御座候哉。

犬千代丸様御儀、是迄御廣式に被成御暮候得共、今度東御居宅御普請出來に付、御住居被成候様に与思召候。此段可申上旨被仰出候。

正月

閏正月十八日

一、犬千代丸様東御居宅御住居被成候様、先達被仰進、原五郎左衛門へ申談置候所、竹田市三郎に申遣候。右御請御禮之御使、今日左之通五郎左衛門相勤、主税へ取次、則申上、御相答申述候事。

相公様

犬千代丸様御儀、是迄御廣式に御暮被成候得共、今度東御居宅御普請出來に付、御住居被成候様に与思召候段被仰進之趣、難有畏思召候。右御禮被仰上候。

閏正月十八日

御使 原五郎左衛門

正月十九日。百歳の老齡者に物を賜ふ。

〔溫敬公記史料〕

正月十九日。賜年百歳者物。

正月廿三日。前田齊泰の子利義の武藝稽古場を定む。

〔官私隨筆〕

正月廿三日

一、以庫太被召候付罷出候。其御序に基五郎殿武藝御稽古御はじめ可被成に付、御稽古所

之儀舊冬榮操院様仰之趣有之、猶又思召伺候處、御樂屋之内を御取込之儀僉議可仕旨御意也。

正月廿四日。前田齊泰如來寺に詣で、歸殿の際十村等の拜禮を受く。

〔官私隨筆〕

正月廿四日

一、當十二日御寺御參詣無之に付、十村等御禮不被仰付候處、今日如來寺へ御參詣、右御禮被仰付。自分はわざと出候には不及候へども、御勝手方等御用に罷出候付、昨日示談之上服紗小袖・上下に而四時前罷出。但四時之御供揃之處、夫以前御出に而途中御出合に可相成に付、河北御門へ廻り罷出。

一、四半時過頃御歸殿、御禮相濟。

正月廿七日。前田齊泰夫人江戸城に登る。

〔溫敬公記史料〕

正月廿七日。夫人氏親將軍。

閏正月七日。前田齊泰の生母榮操院の治療を大庭探元の外加藤邦安に命

す。

〔官私隨筆〕

閏正月六日

一、榮操院様前月廿二日頃より御風氣に付、小青龍湯指上候處、御痰喘強御難儀に付、其後竹筍温膽湯指上。御外邪は爲指御様子に而も無之候へども、從來御衰弱之御氣味有之故、其所を恐れ候由御醫者申上候由、昨日土肥權六郎播磨守へ申聞候由。今日播磨守より演述。
一、右之後村田定之助罷出、今日御七大庭探元診之上、先御同様に被爲在候へども、とかく右御衰弱之所を恐れ候由。乍去只今御醫者御僉議杯之儀を申上候程之御事とも不奉存由申聞。

閏正月七日

一、以庫太被召候付、播磨守と兩人罷出、榮操院様御様子に付思召之趣相伺候處、御意共有之。今日加藤邦安御七扣被仰付、診被仰付答之由御意也。且猶又御醫者にも直に承り、主税等へも示合候様御意。森快安江戸詰に付可被召寄哉之旨等も申上之。

閏正月十五日。表小將等に帶佩の練習を努むべきことを命ず。

〔成瀬正敦日記〕

閏正月十五日

一、表小將たいはい稽古方不進勝に相成候付、僉議之趣申上、左之通被仰出、夫々申談候事。

荒木津太夫

和田源左衛門

庄田牛之助

右人々たいはい稽古方之儀、以後尙更格別出情候様可申渡旨被仰出候。只今迄之姿にては一通り稽古に成行候而、畢竟右三人指引方も出来候程に執行有之様、心得方之儀も可有御申渡候事。

閏正月

御番頭杉浦に相渡す。

閏正月十八日。前田齊泰能を演ず。

〔官私隨筆〕

閏正月十八日

一、今日御能有之、山城守等拜見を被願候由に付、自分も同事相願、少々風氣に付山姥濟退

出仕度旨申上候處、勝手次第拜見之儀被仰出候由、御用番演述。御能御番組左之通。

白 罷 御 七騎落 二人静 山 姥 御
放下僧 御 谷 行 祝言右近 御

閏正月。御扶持人等、村萬雜の賦課方法に關して協議し御算用場の承認を受く。

〔杉木氏御用方雜錄〕

近年村々萬雜等諸費次第增長仕居候に付、以來精誠に相成候様詮議可仕儀に付、ヶ條大綱左之通。

一、村々用水井道橋普請入用材木等買入方之儀、前廉長百姓等立會取調理、其時々通帳等々以調理付置、重而割符之刻紛敷儀無之様入念談置可申事。
一、春秋夫銀并打銀等、百姓中割符取立物之儀、是迄指合等中には煩敷儀も有之躰。以來は早春より壹ヶ年分通帳に仕立置、組裁許等何時引揚致披見候而も、能相分り候様爲調置可申事。

一、肝煎等は迄御用に罷出候砌、或は年暮皆濟算用之刻、所々飯代中には酒等雜費書出候様之向も有之躰。甚だ不埒之儀に付、以來右様飯代等自分拂に爲致可申候。併御用指合に而、

代り組合頭之内相勤、宿料有之候はゞ、成限詮議爲致可申候。

一、御郡所・御改作所其外加州改方・魚津御役所等、御召人有之刻は、役人宿料迄村方より爲償候与歟、村々出來之儀も可有之候間、得与村役人方致詮議、難決品有之候はゞ、組裁許に相達、請指圖候様可申談事。

一、肝煎扶持米増方之儀、諸郡御扶持人示談之趣相達申上、尤先振を以三ヶ一面割に爲致可申儀に候へども、是迄村に寄、居百姓迄之面に上中下三段に割候様之分も有之、中には面平均に割、小前名高之者共及難儀候村方も有之躰。以來懸作面打込三ヶ一に當る内、頭振一軒に二升宛取立、此分引去、殘米之内乃至持高一石以下は二升何合与歟、五石以下は三升与歟、其餘五石以上之者面平均割に爲致可申与歟、釣合程能様示談之上取極可申事。

但、百姓數繼に而三ヶ一面割出來兼候様之分は、組裁許中手前において得与しらべ付詮議之趣、一郡切御扶持人示談之上取極可申事。

一、村々用水江筋取合候普請之刻、井肝煎を初燒飯料与名付、二升宛与歟相見料取請居候様之分も有之躰。右等不相當儀に付、以來は相見料爲指止可申事。

但、御普請用水にも寄、六ヶ敷所柄有之候はゞ、井下等役人示談之上、何与歟取究可申儀に候間、組裁許手前に而しらべ、御扶持人も相談可有之候。

- 一、川筋等、定檢地御手合等御請有之村々、右同様之事。
- 一、村に寄領内普請ヶ所割合、組合頭之内主附を立、人足遣之名目に而、乃至一人に付五斗、或は一石宛与歟相立、肝煎人足遣も不致候様之村方も有之。是等不相當儀に付、以來は爲指止可申候。併大村等肝煎一人に而手も廻兼候様之村方は、精誠詮議仕、人足米相極、右様之分は肝煎扶持米之内何程加入爲致候与歟、組裁許方に而得与加詮議、其上廻口に相談可有之候事。
- 一、村に寄領内普請ヶ所入用米、所々に而取極、百姓持高に應相勤居候村方も有之。中には入用米何十石与歟以前より取究、株持にいたし居候村方も有之。甚だ不埒至極之儀に付、以來は惣高割を以爲相勤可申事。
- 一、懸作多之村方扱は、一村に人足米先年より何十石与歟取極、年々取請來り候村方も有之。是等甚だ不正之至に付、以來相改候様急度詮議可仕事。
- 一、御藏入御收納米并諸返上等餘荷、區々相成居申候。今般納方嚴重相改候上は、繩皮等餘荷御藏所遠近を見計、百姓并小前者共迷惑無之様、村役人長立候百姓得与及示談取極可申事。

一、走給米、村に寄不同有之、往還筋あるひは御用村送狀等烈敷ヶ所は、大躰指定居り候へども、其餘近來無謂、増方に相成候分も有之躰に候間、以來相増候儀不相成。併増方不致而難成村方は、肝煎・組合頭等示談之上、隣村多少之振も取しらべ、村役人より組裁許に申達、請指圖可申事。

- 一、村々算用帳調方、區々相成居候に付、案文之通、以來諸郡一樣に相成候様可仕候事。
- 一、村々米錢萬雜割符帳、去年算用帳に相添指出候上は、村々萬雜定書与引競、猶更村役人手前定書に無ヶ條は、組裁許致詮議、明白にいたし可申。併不行届儀有之候とも、算用帳に申分無之上は、何分以來之所急度相改候様取極可申事。
- 一、御作事所御普請方有之節、棟梁等に而も仕手方に罷越申分は、御用宿に仕間敷、相對自分拂に爲致可申事。

村々高懸・家懸・而懸諸萬雜定書

- 一、肝煎扶持米何程之内三之二高方、三之一面當り。
- 一、走給米同斷。
- 一、用水番料何程。
- 一、宮番料同斷。
- 一、御普請番同斷。

- 一、乞食等宿餘荷。
- 一、用水江筋等他村より請地定江代等何程。
- 一、諸役人宿雜費之儀は、兼而取極之通卦に書記置可申事。
- 一、諸役所御呼出出人身當の雜費は、其人々より爲出可申、指添役人宿料迄高面より餘荷方記可申事。
- 一、村方諸普請人足之儀は、一日一人二升与歟。
- 一、藤内給米何程。

但、相定候外若無據萬雜の打申臨時之品出來之時分は、組裁許の相達請指圖打可申。其外村々より定式取極居候ヶ所は、右に準爲書加置、以來違亂不致様可申渡与奉存候事。右諸郡相談之品々、以來違失不仕様相心得可申、指當候品迄覺書仕御内分奉窺申候。

丑 閏 正 月

- 石 黒 源 丞
- 北 村 與 十 郎
- 廣 瀬 又 八 郎
- 田 邊 次 郎 吉
- 瀬 尾 吉 郎 兵 衛

- 朽 木 兵 左 衛 門
- 林 孫 右 衛 門
- 伊 藤 源 次
- 西 田 藤 右 衛 門
- 三 輪 宇 八 郎
- 當 摩 太 間
- 北 村 惣 助
- 狩 野 恒 方
- 伊 藤 八 郎
- 得 能 覺 兵 衛
- 荒 木 平 助
- 石 崎 市 右 衛 門
- 長 田 金 右 衛 門
- 安 藤 次 左 衛 門
- 折 橋 善 兵 衛

- 寺林瀬一郎
- 齋藤庄五郎
- 金山十次郎
- 寶田宗兵衛
- 杉木彌助
- 金山伊右衛門
- 伊藤次郎左衛門
- 結城七郎右衛門

御改作御奉行所

右見届置候、以上。

御算用場

二月六日。前將軍德川家齊薨去の報金澤に達す。

〔成瀬正敦日記〕

二月六日

一、暫有之當席四人御居間に被爲召候付、居臺・缺持罷出候所、宿繼御奉書御認之儘御波に

付、如例上認等夫々取拂、配符等入御覽、御奉書御拜戴被遊。御上下御着用御奉書御日附前月晦日、大御所様御不例被爲在候所、御養生不被成御叶、晦日辰之下一刻薨御之旨、御老中方脇坂殿御連名之御奉書也。外御別紙に、半切御連名御無判也公方様・右大將様御愁傷被爲在候へ共、御指障も不被爲在候旨也。

〔御郡典〕

大御所様御不例之處、御養生不被爲叶、前月晦日薨御に付、前々之通普請・鳴物等遠慮之筈に候條、早速夫々可被申渡候。且亦追而申渡候迄之内、浦方獵業指止候様、先例之通可被申渡候、以上。

丑二月六日

前田内匠

有賀寛兵衛殿

〔諸事要用雜記〕

二月六日

一、今日九つ三步御奉書到來、奥御取次を以上り候。御奉書左之通。

一筆致啓達候。大御所様御不例被成御座候處、御養生不被爲叶、今辰下一刻被遊薨御、絶言語

御事候。右之趣爲可申達如此候、恐々謹言。

閏正月晦日

土井大炊頭利從 判

太田備後守資始 判

水野越前守忠邦 判

松平加賀守殿

別紙

公方様、右大將様御愁傷之御事候得共、御機嫌被爲替御儀無之候間、可御心易候、以上。

閏正月晦日

土井大炊頭

太田備後守

水野越前守

松平加賀守殿

〔溫敬公記史料〕

閏正月晦。前將軍家齊薨。老中奉書報之。二月六日。達于金澤。遣小將頭梅杉松弔之。

二月六日。前田齊泰學校に臨む。

〔溫敬公記史料〕

二月六日。臨學校。

二月九日。前將軍德川家齊薨じたるを以て普請・鳴物等を遠慮すべき日
數を定む。

〔御郡典〕

覺

一、御當地并遠所川除・川掘等御普請方御作事方之儀、當六日より同十二日迄七日過候はゞ
初め可申事。

附り、石・大材木等を釣、虹梁上、地形石搗等、大勢懸り目立申様之儀は、御法事相濟候
迄可有遠慮候。其外御城御普請方、并所々御旅屋修覆輕き儀、右日限之通人少に懸り候而
初め申様可申渡候事。

一、當六日より七日過候はゞ、浦方獵業仕候様可被申渡候。其外諸殺生獵業之者は尤可爲同
事。

一、鐵炮并鳴物之儀、御法事相濟候迄は遠慮可仕事。

一、鷹拵候儀并自分諸殺生は、五十日より内は無用可仕事。

一、魚鳥之儀、當六日より七日過候はゞ商賣可爲仕事。

加賀藩史料 第十五編

天保十二年

以上

二月

先達而相觸候遠慮日數等之儀、別紙之通に候條、被得其意、組・支配不相洩様可被申渡候、以上。

二月九日

前田内匠

津田昇殿

槻尾甚七郎殿

神保舍人殿

〔御郡典〕

大御所様薨御に付、押立候普請・鳴物等遠慮之儀、先達而相觸候通に候處、普請は當月廿日より御免之段、江戸表より申來候。仍而普請之儀は不及遠慮候條、被得其意、組・支配不相洩様可被申渡候、以上。

二月廿三日

前田内匠

槻尾甚七郎殿

〔御郡典〕

大御所様薨御に付、鳴物等遠慮之儀、先達而相觸候通に候處、今般於東叡山御法事、前月廿二日より初、今月八日御結願之由に候間、鳴物等明九日より不及遠慮候。尤諸殺生は當月廿日迄遠慮之筈に候條、被得其意、組・支配不相洩様可被申渡候、以上。

三月八日

長又三郎

槻尾甚七郎殿

二月十日。昨年の令により御供道中をなす者の携ふる武器の數を復舊するも、會所銀の貸與を増額せざることを議す。

〔毎日帳書抜〕

二月十日

一、格外御省略に付、文政十一年御歸國之節より、御供道中等武器御減少之儀被仰渡、其後天保六年より御供人等へ御貸渡之會所銀も、夫々御減少之儀被仰渡候。然處去年御歸國之節より、武器は格別之儀に付文政十一年以前之通爲持候様被仰出候。依之道中入用も相増申儀に候間、會所銀も天保六年以前之通御貸渡御座候様、御道中奉行より相達候付、僉議之上紙面之趣難承届段申渡、しかし勝手難溢に而躰等相減度人々は、御供道中を初常旅行之人々も、勝手次第之處可申渡哉与相窺候處、常旅行之人々之儀は何之通、御供道中之儀は去年格別に

文政十一年以前之通と被仰出置候儀に候間、御供之節は相減不申趣を以宜僉議有之様仰出候付、常交代等に而罷越候者に而も、御歸國に供に加り候者も有之儀故、是もやはり去年被仰出候通に仕置可然と分而不申渡候。會所銀増之儀は難承届段申渡候様、御道中方へ申達候旨申上候事。

二月十一日。前田齊廣夫人の父鷹司政熙薨去の報金澤に達す。

〔成瀬正敦日記〕

二月十一日

一、八ツ時過京都詰人より、當八日不時立早飛脚日圓歩に而到來、鷹司准后様七日申下刻薨去之旨、爲御知有之旨言上。

二月十二日

一、眞龍院様之御膝中爲御伺、御近習頭御使を以て、御重詰一組今日被上候事。

二月十二日

一、准后様薨去に付、今十三日九時過、頭分以上登城伺御機嫌可申、幼少・病氣等之人々は、御用番宅之使者可指出、且普請は十一日より十五日まで五日遠慮、其他は此間觸付之通り普請方等相心得、鳴物等も遠慮之筈に候得共、遠慮中之趣に、譯而日數等不申渡旨、夜前御用

本文は前田齊泰の事に係る

番内匠殿より御廻文有之候事。

〔御郡典〕

鷹司入道准后様、去七日薨去之段申來候。依之頭分以上之面々爲伺御機嫌、明十三日九時過可有登城候。幼少・病氣之人々は御用番宅迄以使者可被申越候。

一、右に付、普請は昨十一日より當十五日迄五日遠慮之筈に候。其以後御城御普請方等之儀は、此間申渡候通可被相心得候。且鳴物等も遠慮之筈に候得共、此節之儀故譯而不申渡候條、此段組・支配不相洩様可被申渡候。右之趣可被得其意候、以上。

二月十二日

前田内匠

槻尾甚七郎殿

二月十四日。光格天皇の御諡號治定したりとの報金澤に達す。

〔成瀬正敦日記〕

二月十四日

一、京都當五日立町飛脚到來。平田内匠より指出候御沙汰書到來、去月二十七日御諡號御治定。

天保十二年なり

光格天皇

二月十五日。前田齊泰、鷹司家に金子を贈るべきことを命ず。

〔成瀬正敦日記〕

二月十五日

一、鷹司様々例年春御内々被進候金子二百五十兩、今度之御様子に付、兼而御勝手御難澁御指支之儀は御察被遊候間、此節右二百五十兩被進候様被成度、且以來も二百兩五十兩は御減宛に而宜候旨被進候様被成度、御指止に相成候而は、却而此末御難澁筋等御頼有之而は、却而御心配被遊候間、何分宜取計之様當席へ申聞候様、眞龍院様被仰出候旨、此間飯尾吉太夫小左衛門へ申聞に付、猶更申合、後々之二百兩之儀は、先當分与申事に而可御宜哉之旨申上候所、至極尤之儀、左様御座候而一段可御宜旨に付、其段委曲申上候。兩條共御許容被成進候旨被仰出、其段田邊左兵衛を以坂井申上候所、早速御許容被進御悅被成候旨、重而左兵衛罷出申聞候。且右只今被進候二百五十兩之分は、金子五郎大夫上京之節被進度旨に付、京都渡り之事に遂會議、今日京都詰人へ入申遣置候事。

〔官私隨筆〕

二月十六日

一、小左衛門罷越、鷹司様へ御助力金之儀、眞龍院様より御願之趣御許容被進候由等演述。
二月十九日。御勝手方御用を奥村丹後守一人に命ず。

〔官私隨筆〕

二月十九日

一、城州別席に而演述候は、先刻御前へ被爲召、御勝手方御用之儀丹後守一人主付被仰付候間、山城守より可申談旨御意之由演述に付、奉畏候。此間も申上候通、一人に而は中々行届申間敷、恐入候へども、被仰出之上は何分にも相勤可申、乍然其内奉願儀も可有御座候間、宜御申上候様致度旨申述之。

二月廿一日。幕府、前田齊泰にその外祖父鷹司政熙の薨去を弔す。

〔諸事要用雜記〕

一、今度鷹司准后様薨去に付、御膝中御尋御奉書、去廿一日聞番被呼立、御用番より御渡。右大將様より之御分も一集に御箱入御渡に付、不時立早飛脚を以、萬之助等より御差上御座候由。御用番内匠殿より被差上候事。
御奉書左之通

鷹司准后殿薨去之段、達高聞候處、可爲愁傷と被思召候。此由可相達旨、依上意如此候、恐

天保十一年
五月十六日
の條參照

前田萬之助
は家老にて
在江戸に
前田内匠は
年寄

々謹言。

二月廿一日

土井大炊頭利從 判

太田備後守資始 判

水野越前守忠邦 判

松平加賀守殿

鷹司准后殿薨去之段及言上候處、可爲愁傷と被思召候。此由可相達旨、依御誼如此候、恐々謹言。

二月廿一日

堀田備中守正篤 判

松平加賀守殿

二月廿六日。森快安、前田齊泰の生母榮操院の病を診す。

〔官私隨筆〕

二月廿六日

一、森快安江戸より昨夕罷歸り、榮操院様御様子昨今相伺候由に付而、幸今夕御廣式に居候様子に付呼出、播磨守相同じ相尋候處、餘程御六ヶ敷御事之由等段々申聞也。御藥は先只今之御藥に而可御宜旨。

本年四月廿一日の條參照

二月廿七日。文政金銀引替方の手續を告ぐ。

〔觸留〕

古金銀並文政金銀引替方等之儀に付、去年以來從公儀相渡候御書附等、其節々一統相觸置候通に候。依之猶又今般遂僉議候條、右古金銀並文政金銀所持之者は、當三月朔日より金澤町兩銀座方へ、目錄相添可指出、其節當座爲代通用手形相渡置、夫より日數八十日過候者相渡置候銀手形と、新金銀引替可相渡候事。

但、金壹兩六拾四匁圖を以銀手形可相渡置候。且江戸表へ往返之駄賃等之儀者、彼地に而御手當御渡有之内を以相辨、過金者引替人可相渡事。

右之趣被得其意、同役中傳達、組支配不相洩様可被申渡候、以上。

二月廿七日

前田内匠

三月朔日。前田齊泰の生母榮操院を診する爲京師より醫師を招かしむ。

〔官私隨筆〕

二月廿七日

一、榮操院様御様子に付京都抔より醫者被召候儀、并御發駕御延引御願之儀に付、善右衛門

加賀藩史料 第十五編 天保十二年

播磨守迄申聞之趣あり。重而兩人善右衛門に逢、存寄之趣申入。

〔官私隨筆〕

二月廿八日

一、京都へ可被仰遣醫師之儀、福井近江守・高科安藝守・大田□□、是等は天脈之診等有之に付、餘國へは難罷出舩に候。其餘三角典藥少允・山本安房介・森田周一、是等可宜旨御醫者申上候由、善右衛門申聞候也。

右三角又は山本又は森田被召候儀、三月朔日御用番へ被仰出被申遣。

三月四日。前田齊泰の生母榮操院の病むを以て參觀の期を延ぶることを幕府に届出しむ。

〔官私隨筆〕

二月廿九日

一、榮操院様夜前より又々御下り有之、御醫者伺候處、先御替被成候儀も無之候へども、如此度々御下り有之候而は不宜御儀故、今日より錢氏白朮散に御轉方指上候旨。

一、右御様子に付、御用部屋より示談之上、御發駕御延引之儀思召之程相伺候處、此御様子之處御發駕は難被遊被思召候旨御意之由。且又京都より醫者被爲召候儀も相伺候處、右兩條

共示談之趣可申上旨御意之由、小左衛門申聞也。仍而何も示談可仕哉と之趣、播州より以小左衛門被相伺候處、示談仕候様御意之由故、出席切示談之上、御發駕御延引御願之儀別存無御座、醫者之儀も被爲召候方可然と申合候由、兩人一所に小左衛門迄御請申入候。

〔成瀬正敦日記〕

三月四日

一、榮操院様御滯に付、御發駕御延引之御届書下物、今便早飛脚步を以、不破紋左衛門等被仰出之趣申遣。尤右御届方之儀荒井殿等へ及御内談之上、水野越前守殿へ罷越、御挨拶次第御用番へ御届に相成候様。且右は御願立に而無之而は不相成譯に候へば、御承知之御日間無之候間、先御當病之事に取計、御届仕候様被仰出候旨等も申遣候事。

三月六日。絹・紬の入質禁止の令を解かんことを議す。

〔官私隨筆〕

三月六日

一、町奉行兩人罷出、質商賣近年絹・紬受候儀御指留に候へども、御解之儀願出居候。此儀追而可相達候へども先物語いたし候。いづれ御指解無之而は却而宜かる間敷旨申聞候也。

但、當時布・木綿之卷添杯と號し候而、大方質屋毎に受居候舩。連々檢斷も不仕事故、今

更軒別に改候儀も難仕、當時は絹・袖相成不申候故、輕きもの杯後用之絹・袖を致着用、布木綿を質に置候もの杯も有之躰之由等申聞也。

三月六日。老牛馬を他國に賣出すことを禁ず。

〔郡方御觸〕

老牛馬他國に賣出候儀不相成段、先年被仰渡も在之に付、每度申渡置、既に文政三年も一統申渡置候所、近年博勞共猥に他國に賣出候躰粗相聞に、右様猥に賣出候而者、御縮方相立不申、其上斃牛馬致減少候者、御用皮上納方も指聞申儀に候條、右様之儀無之様、博勞共者不及申、一統不相洩様、夫々嚴重可申渡候、以上。

丑三月六日

吉田藤馬

加州三郡十村中

松任町方地方役人中

尙以早々相廻、從落着可相返候、以上。

三月十四日。他國御使人たる者に貸與する金高を改定す。

〔毎日帳書拔〕

三月十四日

一、左之覺書御勝手方より被出之。

定番頭

他國御使人へ御貸渡金高、天保四年相改申渡置候通に候處、今般僉議之趣有之、左之通御貸渡被仰付候。

人持

三千石以上 四百兩

二千石以上 三百兩

千石以上 二百兩

組頭知行高無構 百兩

物頭知行高無構 七十兩

諸番頭知行高無構 六十兩

平士八百石以上 六十兩

同八百石以下 五十兩

右之通被仰付候條、是迄不時願方も有之候得共、如此御引直之上は萬事格別遂省略、何分不時拜借不仕様相心得可相動候。此外文政三年申渡通相心得可申候。

右之趣被得其意、夫々可被申談候事。

辛丑三月

三月十四日。石川郡本吉に鰯の大漁あり。

〔官私隨筆〕

四月十七日

一、奥村梶之助罷出候付、支配所之様子承之。

春來不獵之處、先月十四日之頃三四年來無之程鰯取上候由。一艘之舟に網十七束計積候儀に候處、鰯多くさし、五・六束ならではのせ得不申。夫故餘は沖におろし置、三度程に漸引寄候舟二・三艘も有之由。一網に歟二萬程さし候處、七萬に及候旨。

三月十八日。小松御馬廻に使用せしむる賃馬の件を議す。

〔官私隨筆〕

三月十八日

一、岡田勝左衛門呼出、小松賃馬之儀僉議之趣尋候處、御馬廻中小身に而割符杯之儀出來不申、是迄四百目御渡之分に而年々馬を求させ候へども、拂底にて彼是遅々に相成、漸相求候ても宜敷馬としては無之、初心之人々揚渡しさへ成兼候族故、一兩度位は乘候へども其後乘不

奥村梶之助
は本吉奉行

申様に成候故、彌賃馬持難立様に相成、すべて無實成事に相成候故、夫よりは隔年にいたし候へば、稽古は間遠に成候へども、八百目にも及候事故、其内六百目を以馬を爲持、二百目計は町奉行へ預置、少々充に而も利足を取立、小身之人々馬札之代に相渡候様にも仕候はゞ可然と先達相達候所、申渡之趣に付重而此度之通致僉議候譯に而、此間絹川久左衛門及示談候處、六百目計も有之候はゞ、大方馬も可有之様に申候。右等之譯故いまだ仕法書等は不仕由申聞候に付、右兩様之僉議各手前に而はいづれ可宜被存候哉と尋候處、稽古數は當分試し候様之ものに候へども、隔年にいたし、右之通少々に而も餘分を預置候方可宜哉と存候儀之旨申聞也。

三月十九日。京醫山本安房介、前田齊泰の生母榮操院の病を診す。

〔官私隨筆〕

三月十三日

一、山本安房介近日下向之筈に付、御廣式へ出方之儀、先年竹中文輔召下り候節、當御前診被仰付、御廣式へも罷出候處、御鈴通り罷越候。依而先日御意も有之、其趣に心得居候處、先年荻野左馬允被召候節は、御廣式へ直に罷出候由に候。左候へば其通に而も可宜哉とも存候へども、餘りに見苦敷如何可有之哉。されども又此度御廣式御用に而被召候處、御表へ罷

出候段も如何敷、且御鈴口通り候儀も他國者ながら如何にも被存、此所存寄承度旨大野申聞候也。然處今日播州不參に付、以服部信藏及示談候上、兩例有之儀候はゞ、同敷は御廣式へ直に罷出候様有之可然、されども御鈴口より通り候儀も強而存寄は無之旨申入候。

〔官私隨筆〕

三月十九日

一、京都官醫山本安房介被召、昨日到着、今日罷出、榮操院様御様子相診、相公様も御逢被遊候。最初御用番瀧之間に而逢被申、其後御鈴口通御奥へ被召、御表へ罷出、矢天井之間へ着座之上、御醫者森快安・江間篁齋罷出、其上自分罷出及挨拶退候事。

三月廿日

一、坂井罷越、安房介へ暫たりとも御療養御頼被成度旨御願之趣、榮操院様より被仰進、相公様にも其思召に付、安房介へ申入候様被仰付、則申談候處御請申上候由。依而今日より御頼之旨申聞也。

三月十九日。御勝手方の難澁を救濟すべき諸士の意見は直に御次に上申することを得しむ。

〔若年寄方御用寫〕

三月十九日

御勝手方御難澁に付、人々重而心付之趣、若御勝手方へ難相達儀は、御次へ直に可申上、諸役等其外他役等之儀不關品に而も、御省略に相成品、御格をも相改り候儀も不苦候間、人々存付可相達旨、御勝手方より書取被相越候事。

三月二十日。徳川家慶、前將軍の遺物を前田齊泰等に贈る。

〔溫敬公記史料〕

三月廿日。將軍遣若年寄堀大和守。賜前將軍遺物小刀信國價金三拾枚於公。備前國光忠價金拾五枚於犬千代丸君、備前國宗光價金拾五枚於喬松丸君、又遣老中土井大炊頭賜夫人料紙硯箱。

三月廿三日。大聖寺侯前田利平參觀の途金澤城に登る。

〔成瀬正教日記〕

三月廿日

一、大藏少輔様當廿二日御在所御發途、廿三日金澤御止宿、御對顔御願に付、此間御用番より被相伺、御許容被進候。右に付御登城之節、御近習頭主付被仰付候振に付、書出申談候所、有澤澤右衛門・山森權太郎之由に付、其段相伺、右主付被仰付候旨、右兩人は今日申談候事。

大藏少輔は
大聖寺侯前
田利平

一、三月廿三日

一、八ツ時前大藏少輔様御登城、御口上御家老承之、申上り、追付御對顔可被遊旨被仰遣、御居間書院に御通被成候上、御出御對顔、御料理之御挨拶有之御入、暫御出口御屏風際に御待被爲入、追々御料理二汁上之、御引菜御持參被進、一と先被爲入、重而御出御盃事被遊、又被爲入、御料理相濟申上、重而御出御挨拶被遊、無程御退出に付、如例農人之御杉戸迄御送被遊、被爲入候事。御料理之節御相伴美作守之由。

〔官私隨筆〕

三月廿三日

一、九半時過頃大藏少輔様御旅宿御出之付人來り候付、何も御玄關へ罷出。但今日のしめ、上下御領分虫付に而、御暇御願御在所へ被爲入、今年御出府、御先例御入部に而初而御登城とは替り候付、あなた御服之儀町奉行より承合候處、御長上下之由故一統のしめ也。且又御式盡邊へ參り居候内、尾坂下之付人來り、橋爪御門下座之聲に而御式盡階を下り候也。

一、追付御出、芙蓉之間へ御溜り、御口上被仰述等濟、丹後守一切、美作守・内匠・内膳・靱負一切、御家老一切、若年寄一切罷出。

一、追付御居間書院へ御通り、御料理出、御相伴美作守也。御前御出、御盃事あり。

一、御居間書院へ御通り之上八つ打。

一、後御菓子之頃各瀧之間伺公所へ參る。

是は芙蓉之間へ重而暫御溜り、高田善右衛門・内藤勘兵衛罷出候由故一先如此。

一、勘兵衛罷出候節各は御玄關へ參る。追付御退出。

三月廿七日。京醫山本安房介金澤を發して歸洛す。

〔官私隨筆〕

三月廿七日

一、山本安房介今朝此表發足之筈也。

三月。在江戸の諸士に不時拜借を容易に許さるべきを告ぐ。

〔雜事日記〕

定番頭

江戸表役向等入用多、難澁之人々不時拜借相願候之儀、近年次第に致増長、當時不一形御指支之節に候處、右之通不時御貸渡打重り、彼是仕送り之圖致相違候。其上返上方は御申渡次第可相心得旨申聞相願、返上之節に至り年賦上納等之儀再三強而願出候族茂有之、不實之次第に候。今般會所銀御貸渡茂、以前之通に候儀候間、以後何分不時拜借不申様可相心得候。右に付已來指定御貸渡金等之外、詰人無據儀に而不時拜借相願候共、江戸表切に而者不承

届、此表往返之上申渡候筈に候。依而一通り之願に而、彼地指懸り拜借之儀者出来不申候條、其心得可有之事。

御勝手方

辛丑三月

奥村丹後守

三月。諸郡村々組合頭出張の際支給すべき料米の額等を定む。

〔郡方御觸〕

諸郡村々組合頭共之儀者、其村長百姓之内より相勤候役前故、無給銀に而相勤可申所、いとなく諸御用に罷出候砌、村方より一日米二升宛相渡候村茂有之、小村等不相渡所有之、或者年中料米何程与相極候ヶ所も有之由に而、自然与村方雜費相懸り、且又宿立・町立并に湊ヶ所者、右に准じ雜費相増居候躰に候。依之定式奉行出役并に組裁許・新田裁許・山廻等村廻之外、肝煎外御用に罷出指合申時分、御藏方并に用水方御用等に組合頭罷出候砌、一日二升宛料米可相渡候。前段宿立等之ヶ所料米員數之儀者、追而遂詮議可申聞、其上に而取極可申渡候。

一、組裁許并新田裁許・山廻り、村廻り之砌、以來上下二人に而晝飯代三百文、泊り五百文与相極有之、内宿料二分四分并米代相拂候分引去り、殘村餘荷可致、手代共賄之儀も、晝百文、

組裁許は十
村なり

四分は新か

泊り二百文之内、宿料二分并米代主人より相渡、右同様取極候。且又山方等無之組々裁許廻村之儀者、成限り其日毎歸宅可致事。

右之趣得其意、村々々も一統不相洩様、夫々可申渡候、以上。

丑三月

三州御郡奉行

諸郡十村中・新田裁許中・山廻中

尙以早々先々相廻し、從落着可相返候、以上。

四月四日。寶圓寺の山門再建を命ず。

〔官私隨筆〕

四月四日

一、寶圓寺山門御再建之儀申渡之下物、以林武左衛門上之候處、追付被返下、伺之通被仰出。

四月五日。三味線彈の婦人を招きて遊興したる諸士に譴責を命ず。

〔成瀬正敦日記〕

四月五日

一、目明之三味線彈之女呼寄及遊興候人々、御聽に立居候分、於御次頭々を以御叱被仰出、夫々頭々呼立今日申談候。奥書院於御縁側、當席兩人充罷出申談。委曲は御内用之儀故、態与相記不申候事。

〔官私隨筆〕

四月六日

一、御意被成候は、今度御家中藝者杯呼候儀に付被仰出候趣有之候處、年寄共之内にも右に似寄候儀有之様に沙汰被聞召候。先達而山城守等へ心得方申聞候事も有之候間、其振に丹後守より可申聞旨御意に付、應じ及御請。

四月十一日。年寄中等の今年の借知はその出願を待つべきこととす。

〔官私隨筆〕

四月十一日

一、年寄中等御借知高之儀、去年は願にて年寄中御家老中は百石に付二十石充御借上に相成候。今年之儀右之通にも示談可仕筈に候へども、深く難澁之人々も有之躰。御家老中杯は別而難儀之様子に付而、同席共等へいまだ示談は不仕、先彼方より願出次第之心得に罷在、御算用場奉行へは内々了簡承候處、是も願次第可致哉と申居候。此儀此間中可申上處洩置、今日に相成申候。御序に被申上、被仰出も候は、可有御申聞旨主税へ申入。申上候所思召も不被爲在御様子之旨即日演述。

四月十一日。前田齊泰、金澤を發して參觀の途に就く。

〔成瀬正教日記〕

四月十一日

一、今日御發駕に付、御殿揃刻限四ツ時過之由に候得共、當席は例刻より罷出候。尤上下着用罷出候事。

一、八ツ時前御供人相揃候旨、御横目より申上り、御供相廻候様被仰出。

一、八ツ時過御旅裝束被召替、御居間書院へ御出、御先立主税真龍院様御附使者林武左衛門被爲召、御直答被仰上相濟、左之通三切に被爲召御意有之。

右相濟被爲入、御居間に御着被爲召候付、主税・善右衛門罷出、益御機嫌克御發駕被遊奉存恐悅候旨申上候所、無事に与御意に付、蒙御意難有仕合奉存候旨御請申上退候。續而大村肴次郎・中村五兵衛・山森權太郎・古屋喜市郎被爲召、御意有之、相濟、河村晚鷗被爲召御意有之、相濟、御奥へ被爲入候事。

一、右御附使者御返答之節、御居間書院二之間御敷居より二疊目へ御進被遊候故、御先立も相進可申所、主税心得違、每歳之如く上之御間に落し候。以來心得之爲記置候事。

一、無程御供宜旨申上り、八ツ半鎌に而御出、御居間書院迄御先立善右衛門、夫より式部、葛之間御縁側之内真龍院様・姫君様御附使者罷出居候所、御近習頭に而奏者御供也。御中座被遊、夫より鷲之御杉戸邊、將監罷出居候所に而御中座、御意有之、御式臺階下御左右へ、年寄中御家老中、

左之通は記載なし

若年寄中罷出居候所に而御中座御意有之、夫より御馬上出人へ御意、如每御作法書之通に而、益御機嫌克御發駕被遊候。

〔諸事要用雜記〕

四月十一日

一、八半時前益御機嫌能御馬に而御發駕、御城中御作法夫々毎々之通。小降に付御供人雨具に而も無之、次第に強降、大橋邊より御駕籠に被爲召候。

一、森下御小休に而罷出奉伺御機嫌候筈に而罷出。暫休息之内御發駕被遊候付不奉伺御機嫌、津幡に而其段申上奉伺候事。

一、七半時過津幡御着被遊候事。

四月十二日

一、今朝六半時津幡驛御發駕被遊、俱利伽羅御小休被遊、今石動御中休、福岡御小休、九半時過高岡驛御着被遊候事。

一、高岡御着之上追付瑞龍寺御參詣被遊、八半時御戻被遊候事。

四月十三日

一、七半時過高岡御發駕被遊、所々御休被遊、夕□半時過魚津御着被遊候事。

一、魚津に而、引網は當時御殺生扣中に付不被仰付候儀に被仰出置候得共、獵師共下し置候網有之旨に付、則御覽被遊候。

四月十四日

一、夜明發足御本陣へ出る。無程御發駕、所々被仰出通り御休被遊、八時前泊驛御着被遊候事。

四月十五日

一、六半時御供揃に而、しらく過泊驛御發駕被遊、所々御小休等被遊、難所々々無御滯御越被遊、八時過糸魚川御泊に御着之事。

一、親不知少々快晴に比し候へば波高也。駒返今年御普請格別に出來也。

四月十六日

一、今曉七半時過糸魚川驛御發駕被遊、所々御休被遊、有馬川に而雨具被召る。夕七半時前高田驛御着被遊候事。

四月十七日

一、今朝七半時御供揃に而、同刻過高田御發駕被遊、所々御休被遊、七時前柏原へ御着被遊候事。

四月十八日

一、今朝七半時之御供揃に而、同刻過柏原驛御發駕被遊、所々御休被遊、夕七時前矢代御着被遊候事。

一、今日兩川追々減水、何茂御滯なく御通行被遊候事。

一、筑摩川舟渡場相損に付、餘程上に而越候。

四月十九日

一、今朝七半時御供揃に而、同刻過矢代御發駕被遊、所々御休被遊、七時前小諸驛御着被遊候事。

一、上田御中休より御馬被爲召、滋野より御駕籠之事。

四月廿日

一、今朝六半時小諸驛御發駕被遊、所々御休被遊、夕七時前坂本御着被遊候事。

一、今日輕井澤沓懸之間より降出、雨具に成御道甚之泥道に而各難儀也。

四月廿一日

一、今朝夜明御發駕被遊、所々御小休等被遊、落合新町より雨天に成、七半時過本庄驛御着被遊候事。

四月廿二日

一、今朝夜明早々本庄驛御發駕被遊、所々御小休被遊、七時前鴻巣驛御泊に御着被遊候事。

四月廿三日

一、今朝五時過御供揃、鴻巣驛御發駕被遊、所々御休被遊、八時過浦和御泊に御着被遊候事。

四月廿四日

一、今朝六時御供揃に付七時浦和發足、戸田渡場より□飛坂寄に而夜明る。板橋に而支度五半時過江戸へ致到着候事。

〔溫敬公記史料〕

四月十一日。駕發金澤。廿四日。到于江戸。青山將監扈從。

四月十一日。銀子預手形の一部を小割札と引替ふることを決す。

〔官私隨筆〕

四月十一日

一、去亥年相達候通用手形百目札之内三百八十貫目相減、小割札相増、都合五千貫目に成居候へ共、去暮も小割拂底に而指支候付、今五百貫目百目札之内小割札に切替候由、御算用場奉行・引替奉行・町奉行覺書出之。

四月十五日。當年の借知高は昨年の通りたるべきを告ぐ。

〔毎日帳書抜〕

四月十五日

一、當年御借知高去年之通被仰付候旨等、頭分以上御用番又は筆頭之面々、出仕後一人充松之間二之間において年寄中等列座御用番申渡之。

〔觸留〕

御勝手向御難澁之上、近年不作等打續、去年茂一入御指支に候得共、御家中之人々も難澁之事故、御借知高一作御引直等之儀去夏申渡候通に候。右に就而は、御不足高色々御無理成御用達等を以御辨之處、追々無御據不時御入用も打重り、過分之御不足高に而、御家中増御借知を以不被仰付而は難相成御圖り方に候處、御家中之人々も殊之外難澁之躰に付、御運方之儀指當候處幾重共御手繰を以相辨候様に被仰付、御借知之儀は今年茂去年之通御借上可被仰付旨被仰出候。乍去御圖り方右之通に而御辨用甚無覺束、誠御急迫至極之御時節に候條、此段一統相心得、萬端遂節儉取續可申候。

右之趣被得其意、組・支配不相洩様可被申渡候、以上。

四月

村井 叔 負

今般御借知之儀、別紙に申渡候通に候。近年過分之御借知被仰付候得共、いまだ御不足高御埋合等も全出來不申内、去年御借知被成御改候付ては、御上御勝手御運方彌増御指支、過分之御不足相立、誠に被成方も無之御次第に候得共、御家中之人々も甚指支候躰に付、今年も又々格別之思召を以、去年之通被仰付候儀に候。箇様之御時節に候處、人々心得方相弛み候而者如何に付、此段分而申談候條、一統質素に相暮、御奉公取續御難題之儀等相願不申様、嚴重相心得可申候事。

四月十六日。強烈の雷鳴あり。

〔官私隨筆〕

四月十六日

一、今夕強き雷鳴有之に付八半頃歟出宅、先二御丸御廣式へ罷出、横地治兵衛に逢候而御機嫌相伺候處、追付以同人御懇之仰有之旨演述、及御請。但御子様方は其節御宮へ御遊に御出、夫より神護寺へ御出之處、同寺に被成御座候内強き分有之、暫御見合追付御歸、何之御替も不被成御座候由。

四月十八日。東本願寺新門跡遷化の報金澤に達す。

〔御郡典〕

東本願寺新門跡遷化之段申來候。依之普請は今日一日、諸殺生・鳴物等は明後廿日迄三日遠慮之筈に候。

右之趣被得其意、同役中傳達、組・支配相洩様可被申渡候、以上。

四月十八日

村井靱負

石野右近殿

四月十九日。武田秀平をして製せしめたるぞんがらすを江戸邸に送る。

〔成瀬正敦日記〕

四月十九日

一、武田秀平被仰付置候ぞんがらす出來指出候付、今便指上候事。

四月廿一日。文政金銀等引替手續に關する前令を改む。

〔觸留〕

古金銀並文政金銀所持之者は、金澤町西銀座方々目錄相添可指出、其節當座爲代通用手形相渡置、夫より日數八十日過候者、相渡置候銀手形と新金銀引替可相渡段、先達而一統申渡置候處、重而詮議之趣有之、右當座爲代通用之手形相渡儀指止、銀座役人請取手形に御算用場等加印之分相渡置、前段之通八十日過新金銀と引替可相渡候事。

本年二月廿七日の條參照

右之趣被得其意、同役中傳達、組・支配不相洩様可被申渡候、以上。

四月廿一日

村井靱負

四月廿四日。前田齊泰江戸に着す。

〔諸事要用雜記〕

四月廿四日

一、今朝六時御供揃に而、藏に而夜明候由。四半時過益々御機嫌能御馬に而御着被遊、追々御付人に而奥之口御式臺へ罷出。中之口内々頭分罷出候處に而御意、山城守・萬之助罷出候處に御馬被爲留意被遊、夫千代丸様・喬松丸殿階上々御出被爲入、御入被御見懸階下々御下り被遊御挨拶。夫より自分御先立相勤、席之前通御居間書院四之間・三之間、同所に姫君様御附使者横田小一郎殿被罷出。其節、只今到着、大儀と被仰述、御稽古所通り御居間々被爲入候事。

〔成瀬正敦日記〕

五月二日

一、前月廿四日出足足輕早飛脚へ傳封坂井氏等より之狀一封、割場奉行より今朝送越候。右は同日益御機嫌克御着被遊候旨折紙狀也。高田氏へ披見として相送る。

加賀藩史料 第十五編

天保十二年

四月廿六日。徳川家慶使者を遣はして前田齊泰の参観を勞せしむ。

〔諸事要用雜記〕

四月廿六日

- 一、今日上使御沙汰に付四時前出席、相揃候上被爲召候事。
- 一、九半時過爲上使御老中堀田備中守殿御出、御城下御付人に而御出向、大書院二之間に御見合、昌平橋御付人に而御廣間御縁類へ御出、三丁目に而御式臺へ御出、無程堀田殿御出に付御門外迄御出向、御誘引に而御大書院に御通上意。

松平加賀守

參府之段達上聞、大儀被思召上使被成下候。追而御目見可被仰付候。

御拜聽。夫より御小書院に御出、御誘引御料理出、御盃事も有之。夫々御例之通被爲濟、御都合能相濟、八つ一分御退出被成候事。

四月廿八日。前田齊泰登營して参観の禮を行ふ。

〔成瀬正敦日記〕

五月七日

- 一、前月廿六日上使以堀田備中守殿如御例御拜領物有之、翌廿七日御老中方御連名御奉書に

よつて、翌廿八日御登城被遊、御參勤之御禮被仰上、御家來兩人御目見被仰付候旨等、折紙に而申來る。

〔諸事要用雜記〕

四月廿八日

- 一、今朝懸流五ツ九分御登城被遊、於御座間御參府之御禮御首尾被仰上、御手自御熨斗匏御頂戴、御懇之被爲蒙上意、畢而御禮御謁に而被仰上、御下り井伊掃部頭殿御老中方御勤被遊、九ツ九分御歸殿被遊候事。

〔溫敬公記史料〕

四月廿八日。登城謝之。前田萬之助・青山將監亦謁將軍。

四月。御廣式女中の服装は佳節以外紬・木綿に限るべきことを令す。

〔故紙雜鈔〕

天保九年御廣式着服之儀に付、本藩に被仰出候左之通。

御廣式女中着服之儀、今般被爲在思召候間、以後佳節等禮服之外、都而紬・木綿之類着用可致候。此段可申渡旨被仰出候條、夫々致會得、被仰出候趣無違失様可被申談候事。

四月

右之通被仰出、尤夏向之儀も右に準じ、禮服之外者成限り鹿服致着用可申候事。
右之通りに候得共、只今指懸り相改候而者指支候趣有之、人々迷惑仕候族も有之儀に付、絹・八丈杯は當分御免被成候。追々今般被仰出候通り相改候様被仰出候。且拜領物、緬縮之外は着用可仕旨被仰出、申談候事。

四月。一季奉公人の故なく退き又は給銀を貪ることを禁す。

〔雜事日記〕

御家中等に召仕候一季居男女奉公人、當春季取持人共より所々懸渡候處、奉公人拂底至極に相成、主人々々用缺に相成候様子候。右様拂底に相成候故に茂候哉、奉公人共給銀を貪り、不埒之躰茂相聞ひ候。元來一季居奉公人共、無故引込申儀御停止之旨、先年被仰出置候之條、公事場より申付置候取持人共に而、奉公人之數等嚴重相しらせ、無故引込候者は各方可申付候。其外給銀を貪り候者有之においては、是又急度申付候條、男女奉公人共作法方嚴重致指引候様、今般改而取持人共爲申渡候旨、主人々々其心得有之、家來末々迄茂心得方可申渡候事。

丑 五月

四月。石川・河北二郡山々の落葉搔は定日の外之を爲さざるべきことを

稟申す。

〔雜事日記〕

石川・河北兩郡於山々、足輕・小者および侍中之家來、並金澤等之者松之落葉かき取儀、毎月朔日・五日・十一日・十五日・廿一日・廿五日、右六ヶ日之儀者指支不申事に相成居、右之外入込不申定に候處、近年甚猥に相成、右定日外勝手次第人多に入込、村々及迷惑、其上御縮方に指障り候族茂有之躰に御座候間、以來定日之外は堅入込不申様、尤定日落葉かき參り候共、御縮方急度相心得候様、御家中初一統嚴重御觸渡御座候様仕度候、以上。

丑 四月

林 源 太郎

御 算 用 場

吉 田 藤 馬

五月朔日。新堂形の清水にて染物を爲し又は療用に供する件に關して議す。

〔官私隨筆〕

五月朔日

一、頃日内膳横堂形際に而布・木綿杯染候躰之處、色々に申ふらし、人多に集り候躰。夫に

加賀藩史料 第十五編 天保十二年

付左之通覺書調、今日御用番へ達之。

近頃金澤等所々汚泥之内に而、綿布之類を染候儀はやり出、其水を以肢躰を洗候へば、病氣も平癒いたし候杯と申ふらし、人多に相集り候躰ども有之候。右染物之儀は、輕きもの共便利に成、惡敷も無之儀に候所、夫に付而何廉色々申ふらし人多に相集り候儀は如何敷、夫のみならず其餘にも頃日何歟色々怪敷儀をも申ふらし候躰、畢竟不宜儀と被存候。近年京都に而躍流行之聞え有之候。もし左様之所へ至り候而は、奉行之制止も行届申間敷、微なる内早く防ぎ可然。乍去人々悦居候筋之儀に候間、一往組頭存寄をも御尋、町奉行へも被仰聞、御内評之上町方・御郡方支配人へ被仰渡、粗被加制止可然歟と心付候付、御はなし申候事。

〔本多政和覺書〕

五月朔日

一、先頃より泥之内に而染物いたし候儀流行いたし、内膳屋敷向堂形御圍入角水溜にも染物いたし候處、此頃は右之水に而手足等を洗候得ば、諸病を治し候と申ならし、大勢群集いたし候。其外御門前町邊日之中坊主出石を打候杯、且竹澤御屋敷之内穴明き候杯と色々怪敷儀申觸候。只今之處何も差障候儀は無之候へ共、近年京都をどり之様に成たらば制方も六ヶ敷者に付、只今之内何と歟鎮め方も有之間敷哉。組頭町奉行杯了簡承候而も可然哉、猶更僉議

有之可然旨、丹州心付之趣今朝被申聞、井口良左衛門・多賀建物外御用に而越後屋敷に罷出居候に付、別席に而逢、右之趣申聞、三頭に演述いたし、了簡も有之候ば承度旨申入置候事。

五月三日

一、新堂形御圍外清水之儀、今日町奉行坂井忠左衛門改方茨木主殿呼出、了簡も有之候者承度旨申入候處、忠左衛門は同役申合候上可申聞旨申聞、主殿は右水を諸病をも治、輕き者便利之品に付、隨分只今之様に人々手足等を爲洗候儀に仕度。併這儘仕置候而は、夏に成候へば彼所に而淨瑠璃・チョンガリ等仕様に相成、人々も群集いたし申分も出來候様之處に至候而は、不得止事右水汲候儀も被禁候様之處に可至儀に付、賽錢杯も何方之寺受納仕候様と歟被仰渡、其餘無賴之僧俗立入怪談躰之儀申觸候儀杯被禁、淨瑠璃等之類をも相禁、實に病用等而已之事に成候は、可然哉之旨等、段々申聞候事。

〔御家老方等〕

五月五日

一、三月廿日頃より金氣之水に而染物大流行、前月中頃より内膳殿馬場御藏土堀下より涌水有之、靈水に而諸病に宜旨に而大に騒も有之、殊之外信仰に而諸人群集をなし候。同頃より

越中又宮、腰御船小屋邊清水有之、同様流行之由。右御城下之邊餘り群集も致し候得共、申分と云ふ事なく候間、先此儘になし置候而宜かるべく、各申合候事。

五月七日。先に水戸侯徳川齊昭その女を前田慶寧に嫁せしむるを約したるも變改の狀あるを以て議す。

〔諸事要用雜記〕

五月七日

一、犬千代様御縁組、豫而水戸様御姫様之内庸姫様被進候儀御内約御治定に而、今年あなた御出府之上、御國より御同道、無程被進、此程御奥御養育之儀に御直約相整居候。然處當時御願に而水戸様御國に被爲入、兼而之御模様にも參り兼候に付、聞番參上、運阿彌迄如何之御模様候哉、御手前様迄相伺候様被申付候由、書取を以申達可然哉に不破相伺、委曲坂井氏より相伺被申談候由之事。

五月七日。小松城の濠埋没したる件に就き議す。

〔官私隨筆〕

五月七日

天保十一年
二月五日、
本年八月廿
五日の條參
照

一、前田外記罷出、小松御城御堀之儀、前田監物等より相達候筈に候、追々埋り舟も通り不申程に成居候躰候間、何卒宜僉議有之様仕度、此儀相達候様にと申越候由に付、此間御用番へ達し有之、いづれ御勝手方へ僉議可有之候條、其節可達僉議旨申入之。

五月十五日。金澤に於いて前田齊泰着府後の狀を披露す。

〔官私隨筆〕

五月十五日

一、今日御機嫌能御着府、上使御禮等之御弘有之に付、退出直に金谷へ罷出、以金子五郎太夫御祝詞申上、直に二御丸御廣式へ罷出、以山森九兵衛申上之。

五月廿四日。江間篁齋等、醫學集會の指引を命ぜらる。

〔成瀬正敦日記〕

五月廿四日

一、別紙之通先便江戸表より申來候付、今日兩人呼立申談候事。

江間 篁齋
小川 玄澤

右醫學集會指引被仰付候條、兩人宅においても致御用會、去六月被仰出候御趣意篤与奉心

加賀藩史料 第十五編 天保十二年

得、聊無違失相勤可申候。大庭探元等にも指引被仰付置候條可申談候。
右之通可申渡旨被仰出候。

五月廿五日

五月廿六日。前田齊泰、その夫人等を招請す。

〔諸事要用雜記〕

五月廿五日

一、明日彌御招請に付、姫君様を彌御出被成候様御使者御近習を以被仰進、御使書相伺渡す。

同廿六日

一、今日御招請に付、揃刻限五時に付同刻過出席、相揃候上被爲召。

一、四時過和田倉様御入之旨追々御付人來り、昌平橋御付人に而御廣式を相廻り、被爲入候に而敷付内より右之方御白洲へ罷出蹲踞、御用達より姓名申上る。自分出る。

一、無程池之端様御供廻り之旨に而坂井氏被罷出。

一、御二方様とも御入之上、御廣式を罷越、御附頭々を以相伺御機嫌。

但、申上候處御喜悅之旨御附頭席前へ罷越申聞、御禮申上候。

和田倉様は
會津侯松平
容敬夫人
池之端様は
前大聖寺侯
前田利極夫
人

大藏少輔は
大聖寺侯前
田利平

一、四半時過御締夫々出來に付、引渡候様被仰出、當席之人々立會、奥取次御招請方之主付同じ、年寄女中を引渡候事。

但、右之序被進候御品、御用之御間を飾置、前に御小屏風立置、其儘に而委曲申入引渡候事。

一、今日御囃子有之、彌五郎御樂屋詰御願罷出居候付、俄に彌五郎へ二番、御前一番被遊候。新之丞も相願御樂屋詰罷出候。是又被仰付相勤候事。

一、御囃子等夜六時過相濟候事。

一、右相濟、御小漬等指上、夫々相濟候事。

一、和田倉御前様等夜八時御戻り被遊候。其節御出之節之通御白洲を罷出る。

一、大藏少輔様今日御定日に付御出之上、御囃御拜見御願可有之由御意之處、何等も御願無之、其段申上候處、只今御對顔は不被遊、今日御囃子被遊候間御見物被成候様被仰進候處、御禮被仰上、御召替に而御見物所を被爲入候事。

一、右に付御料理并御小漬御定席に而指上、且御見物所に而御くわし、御硯蓋指上候儀相伺、被仰出、其段御客方頭を申談候。尤爲心得御臺所奉行へも申談候。

一、御見物所を御出、御對顔有之候事。

加賀藩史料 第十五編 天保十二年

一、方々様御戻り之上、御居間を御出に付今日之恐悦申上る。御招請方御恐悦奥取次を以申上候由也。
右相濟、八時過引取候事。

六月二日。前田慶寧本郷邸内東居室に移る。

〔諸事要用雜記〕

五月廿七日

一、左之通申談る。

御膳奉行

來月二日犬千代丸様東御居室を御移徙に付、御當日御附山城守初御歩並迄、姫君様御兼合に而、御酒・御吸物・御取肴被下、御附女中一統も同様被下候條、御用先可被申談候。但山城守は於席頂戴、竹田市三郎等初御附頭已下御臺所に而被下、御側小將・御近習之人々御居間方迄は於御膳所頂戴之筈に候。女中向之分は御廣式を可被相廻候。
右之通可被相心得候事。

五月

御近習頭

來月二日犬千代丸様東御居室へ御移徙に付、山城守を御吸物・御酒・取肴、姫君様御兼合に而於席被下候間、右之趣并御酒之内御意之趣、各より可被申述候事。

五月

〔諸事要用雜記〕

六月二日

一、今日犬千代丸様御引移之時分、爲御見立當席より罷出候筈。其段申上、御引移御供廻り之時分、織人數付内より右之方二枚目へ罷出候處、御先立より姓名相唱候事。

一、犬千代丸様四半時頃、益御機嫌能御本宅御式臺より御駕籠に而、御居室へ御引移被遊候事。且其節番松丸殿、御式臺階上迄御見送り被遊候事。

〔御家老方等〕

六月十五日

一、當二日犬千代丸様東御居室を御引移首尾好被爲濟候。四日出之御使有之旨、月番より紙而來。晝後也。追付兩御廣式を爲恐悦罷出、金谷内藤勘兵衛二之丸丹羽權佐也。江戸表は今日之日附に而十九日出御祝詞差出仕筈之旨。

六月十二日。前田齊泰の子利惣金澤に生まる。

〔官私隨筆〕

六月十二日

一、九時餘程過只今御出產御男子様御誕生、御丈夫に被成御座候由案内紙面、加藤・横地より來る。

一、右に付上下に改、九半前頃御廣式に罷出、横地に逢候而御様子相尋候處、午上刻御平産、御丈夫に被成御座、御産婦も達者之由也。

〔成瀬正敦日記〕

六月十二日

一、九ツ時過加藤新之丞御次へ罷出、午の上刻御男子様御出生被遊、早速加藤邦安相伺候所、御丈夫に被爲在候旨申聞候段相逢候事。

六月十八日。前田齊泰の子利鬯の七夜の祝儀を行ふ。

六月十八日

一、御出生様御名土肥權六郎より指上候様被仰付置、御名文字陸原大次郎に考被仰付、御發駕前御治定被成置候付、御祐筆に申談爲調置、權六郎今朝罷出候付相渡遣候。暫有之、御名指上候旨御廣式頭より申聞候付、左之通越後邸へ主税罷出、御用番美作守殿へ於御座相逢

之。

今般御出生之御男子様、御名桃之助殿与被稱、殿付に唱可申候。右之趣何茂に可被申聞候。此段可相達旨被仰出置候。

六月十八日

〔官私隨筆〕

六月十八日

一、今度御出生之御男子様、今日御七夜に付御祝有之。御名も桃之助殿と御定り被成候付、各兩御廣式へ被罷出、江戸表へは相公様へ迄御祝詞被申上。依之自分等兩人は、今日八時後罷出候様にと、昨日定之助演述に付、自分は越後やしきに而八つ承り供申付罷出、播州も一先歸宅、八つ途中に而承候程に可罷出心得之由之處、未被罷出候付、先加藤新之丞迄御祝詞申述、播州と一集に被申上候様にと申入置。

一、右之通之處、八半餘程過に成候へども、いまだ不被罷出候付而、御廣式より尋に參り候處、俄に腹合惡敷不能出由也。此儀知れ候以前七つ鐘承之。

一、追付御奥へ通り候様にと之儀に付罷通る。

一、御吸物・御酒・御取肴、其外御さしみにしめ^{黙くる}み^{みきす}且又鮑煮付頂戴之。頂戴中、桃之助殿

自分は奥村丹後守

御居間へ罷出候様にと之事に付罷出、初而御目見仕る。御色合もよく、御丈夫に被爲見候也。
六月十八日。從來布及び木綿以外の入質を禁じたる令を解除す。

〔郡方御觸〕

卷目、御算用場奉行の

質物之儀、布・木綿之外者質に置候儀仕間敷旨、天保八年申渡候趣有之候得共、是以後絹類暨道具類に而も質置候儀不苦候間、以前之通可相心得旨、一統申渡候條、質屋共にも猶又前々より之資格不致相違様、嚴重可相心得候。

右之趣被得其意、夫々可申渡旨、所々町奉行并御郡奉行等可被申談候事。

六月

別紙寫之通御算用場より申來候に付、相越之候條、得其意、町・在役人どもは夫々不相洩可申渡候。右に付僉議之趣有之、追而申渡儀有之候條、此段も夫々可申渡置候。先々早速相廻、落着より可相返候、以上。

丑六月十八日

林 源太郎

吉田 藤馬

能美・石川・河北三御郡十村中

六月十九日。前田齊泰その子利鬯を家臣前田圖書の養子とすべきことを告ぐ。

〔成瀬正敦日記〕

六月廿六日

一、今度御男子様御誕生之旨御承知被成、兼而御内慮被爲在候付、前田圖書は爲養子可被遣旨、別紙寫之通十九日山城守に被仰出候。右之趣眞龍院様に被仰上候條、御口上書一通入御覽指進申候間、御日柄宜時分御使御申談可被成候。榮操院様には以奉札被仰進候付、別封一緘進申候間、右御使同日村田宅之助へ御指遣可被成候。右に付今日出町飛脚早飛脚步申渡候旨申來る。

〔成瀬正敦日記〕

七月廿七日

一、當月十九日出拔出早飛脚、三日逗留、今日着左之趣共申來る。
桃之助殿事、當十一月前田圖書方は爲御引移可被成旨、御内意之趣等山城守迄被仰出候間、右御用御廣式向しらべ方等、御事輕之御趣意を以、猶更御用番被示合、僉議有之候様可相達之旨被仰出候段、丹後守・播磨守に可申聞旨被仰出候條、此段御申達可被成候。前段之趣

各々も可申聞旨被仰出候之條被得其意、いかにも事輕被仰付候筈候之間、年寄女中々も右御主意奉心得候様申渡、御持込品、且御附可被成女中等之儀も、精誠事輕遂僉議、相伺候様被仰出候段、御廣式頭々も御申談、夫々御僉議可被成候。年寄中々仰出候趣、爲御承知別紙寫二通差進申候。大凡之處は御僉議之趣直々可被仰出筈に候得共、的例も無御座、延享之度留帳も此表には不全、御引當之品も無御座に付、詮議方被仰出之儀に御座候間、御用番且丹後守等々も御示合被成候而、夫々御しらべ被成、御僉議之趣御申越可被成候。此段相伺申進候。依之今日出町飛脚早飛脚步申渡候、以上。

七月十九日

大野

成瀬・高田様

桃之助殿事、當十一月中前田圖書方爲御引移可被成御内意候。右は的例も無之儀、取しらべ方等手數にも可相成候得共、御時節柄之儀に候間、如何にも事輕く、御附人等其外御持込之品等も、可成丈御省略之心得を以御引移不指支様、丹後守・播磨守々も示合遂僉議可被相伺候。尤女中向等之儀は成瀬主税等於手前、前文之趣を以しらべ方被仰付候間、被存其趣、金澤年寄中々右趣可被申遣旨被仰出候。

七月十九日

山城守へ

桃之助殿事、當十一月中前田圖書方爲御引移可被成候。居住所等心得も有之間敷候得共、諸事至而手輕可被仰付思召に候間、居住向等都而修理等にも不及、在來之儘に而萬端事輕相心得可申候。尤日限之儀は追而可被仰出候。先此段御内意之趣圖書爲可被申渡旨、金澤表年寄中々可被申遣段被仰出候。

七月

山城守へ

六月二十日。大聖寺侯前田利平の家老山崎權丞金澤に來りてその借用したる米銀返濟の件を交渉す。

〔官私隨筆〕

六月廿日

一、山崎權丞より以手紙、大藏少輔様御勝手方御用に付、御用人東野千助同道只今此表へ到着之由等申越、宅々罷越候様申遣候處、七半頃罷越、左之ニヶ條之趣申聞。
一、先年御振替之三千兩、利足打込三千七百八十八兩二分一朱餘之處、當暮より無利足十ヶ年賦之儀當二月御願之處、半利七ヶ年賦御許容候へども、當七月より無利足十ヶ年賦御願被

成候旨。

一、去々年虫付之節、御用米御不足に付二千五百石御振替米、當秋全御返上可被成處、御支に付五百石御返上被成、殘二千石當年御淀被成度旨。
但、右五百石代金を以御返上被成度旨。

六月廿二日。無高所の百姓が取高をなすには入百姓の名目を以てすべきことを告ぐ。

〔舊記等〕

無高所之者取高、御仕法以來不相成事に相心得候御郡々も有之に付、當春御奉行所相伺置候儀も有之處、此度出府之上相伺之處、無高處之者取高不相成与申被仰渡は無之、元來享和之度被仰渡置候通り、入百姓之名目を以爲致取高候事に被仰渡候。併入百姓之名目之所に而も、居村百姓取返高相願候節は懸作之類に候間、何時に而も爲致切高可申旨。此儀は先達而被仰渡置候通之旨、今日安田様より被仰渡候間、左様御承知可被成候。此狀先々御廻達、落着より御返可被成候、以上。

丑六月廿二日

得能覺兵衛

仲間宛所

六月廿三日。藤井方亭、前田齊泰の生母榮操院の病を診す。

〔官私隨筆〕

六月廿二日

一、藤井方亭儀只今到着に付、明廿三日五半時過榮操院様診被仰付由、暮前定之助より申來。

〔官私隨筆〕

六月廿三日

一、藤井方亭診被仰付候に付、播州も被出、診濟候上承之。只今之所御邪氣等も無之、いまだ御快と申所へも不被爲至、醫者之方に而何と可仕様も無之、只惡敷方へ不被爲至様に相守り、あなたより御復し候所を相待候より外有之間敷。依而キナと桂枝二味を漬し、御用有之可然旨也。初診之儀故いづれ猶又診可然旨申談す。

六月廿六日。幕府、前田齊泰の江戸城門内にて挾箱を伴ふの方式を改むべきことを命ず。

〔成瀬正敦日記〕

七月廿七日

二八六

一、御登城之節御挾箱片々御玄關前へ爲御持之儀、先御詰被仰出、左之通御届に相成居、當御參府之上、右御挾箱中之御門外迄爲御持之、御先箱直に御先へ爲御持來之所、左之御書取前月廿七・八日頃御目付衆より御達有之、段々御僉議之上、左之覺書之通、已後之心得方も有之儀に付、聞番へ山城守殿被仰渡候旨等申來る。

今般思召を以挾箱片々御玄關前迄爲持候様被仰出候。依之是迄中之御門外迄爲持候先箱片々共儘御玄關前迄持通り之心得に罷在候。此段御届申上置候、以上。

御名内

不破紋左衛門

四月

六月二日大澤主馬殿御付札

書面之趣承置候

前月廿七・八日頃御目付衆御達之書取

口達之覺

一、御玄關前迄持入候挾箱一つ、以來中御門外迄は是迄之通、先箱に而被相越、同所よりは御三家方にも跡を爲御持之儀に付、右御振合に准じ、跡より引續持入候様可被致旨、大炊頭

殿被仰渡候事。

六月

初鹿野美濃守

池田修理

聞番へ被仰出覺書左之通

不破紋左衛門

本保平太夫

御登城之節御挾箱片々御玄關迄爲御持之儀、去年四月被仰渡候に付、是迄中御門外迄爲御持之御先箱片々、其儘御玄關迄爲御持之儀、御目付衆に御届方、各より被相伺、其通り被仰出、則御届有之處、御聞置之由御挨拶有之に付、當御參府以來右之通爲御持之處、中御門よりは御三家様にも跡を爲御持之儀に付、右御振合に准じ、御跡より引續爲御持之儀、前月被仰渡候。右之趣に候得ば、先以去年之御届方御三家様にも准じ不申、御不都合之爲御持方に御届被成候譯に相當り、御心外之御儀。參府後度々御先を爲御持も有之處、此節相違之儀は、外見にも預り如何に思召候。此方様には前々より之御家風も有之處、前段之次第御不都合成儀。假令御前より被仰出候共、各儀は御三家様方御振合等も存知之儀に候得ば、心得も可有之處、其儀無之、御規模之様にも被心得候哉、思召与は致相違候條、以後之儀入念可被相心得候。

此段可申渡旨被仰出候事。

七月

七月五日。百歳の老齡者に物を賜ふ。

〔溫敬公記史料〕

七月五日。賜年百歳者物。

七月六日。御郡方より葉藍を他國に販賣すべからざることを告げしむ。

〔官私隨筆〕

七月六日

一、有賀寛兵衛呼出、葉藍拂底に付御郡方より他國へ賣出し指留之儀、紺屋共願之趣紙而等渡之、可有僉議旨申談候。

七月十七日。前田齊泰、慶寧の東御居宅に臨み囃子を見る。

〔諸事要用雜記〕

七月十七日

一、明日於御居宅御囃子被仰付候付、見物方之儀此間高田より示談に而、則伺くれ候様申聞

候に付、伺之通申談候。

七月十八日

一、四時過御上下被爲召、東御居宅に被爲入、夜六時過御歸殿被遊候事。

但、御都合方都而此間中示合、伺之通夫々相濟候事。

一、御囃子被仰付、見物被仰付、八時過相廻り、御到來之御肴・御吸物に被仰付、拜見罷出候人々頂戴、御禮御膳方御抱守申述。

七月二十日。前田齊泰、會津侯松平容敬の新錢座の邸に臨む。

〔諸事要用雜記〕

七月十九日

明廿日五半時之御供揃に而、肥後守様新錢座御中屋敷に、緩々御出可遊旨被仰出候。和田倉御前様にも御出付、御締内に被爲入候事。

七月十九日

一、明日新錢座に而揚火も有之事。御近習之人々御召連被遊候而も宜段被仰進候間、望次第可被召連旨被仰出、奥御取次・御近習之人々配膳役に被申談候様、山崎小右衛門へ申談る。

七月廿日

一、五半時過御出、新錢座御屋敷へ被爲入、夜四つ八分御歸殿被遊候事。
 但、彼於御奥、御役人被仰述候御口上之儀、御意に付則御手扣認上候事。
 一、犬千代丸様にも指續御出被成候事。
 一、今日被召連候人々左之通。

加藤三郎左衛門 金谷多門 和田源左衛門 梅源五左衛門
 沖野長藏 堀斧三郎 原文平 清水貞右衛門
 三田村新平 山室全左衛門

一、拙者儀今日新錢座御奥に而御目見、且夕御膳御餽被下、御吸物・御酒等は加藤等一集に被下候。見物は御引續之御物見に而見物いたし候事。

一、御庭御兩殿様御供人と一集に拜見被仰付、尤御供頭・御表小將・御抱守・御次番・三十人頭・御大小將等は無之候事。

一、小原を以段々之御禮申上、御戻り前退出、天神下に而四ッ聞歸る。翌日御前々罷出候上御禮申上る。

七月廿一日。百姓等の遊藝を習ふことを禁す。

〔御郡典〕

御郡方之者共常々心得方之儀、前度より嚴重申渡置候處、頃年心得違之者多、就中宿所等身元相應之者、或者輕き商人等之内にも、淨瑠璃・三味線等之遊藝を好、中には他支配より右指南之者杯を呼寄置、稽古等いたし候者も有之、右等之風俗末々小前之者迄も押移り、本意を失ひ、農業剛仕事を厭候族有之躰相聞、耕作龜略之基。右様奢侈之風俗に流候故、農業出精之時節も不顧、村々祭禮等に事寄、若き者共手踊りをも致興行、見物人等及群集に候様之儀も粗相聞。其上近年恭・將基等流行いたし、身元之百姓暨小前之者迄も、家業を忘れ、農業之手後れも不存付族。且賭之諸勝負者御停止之品に付嚴重申渡置候處、心得違之者不少、甚以御縮方に指障り、不得止事重き各方等申付候場に至り候而者、耕作稼之手支に相成、不容易儀に候。右様之風俗別而近年増長、奢侈之姿に成行、加之村々嫁聲取迎候節杯、若き者多寄集り、石礮等を打、或者無謂大勢立入、酒杯押乞いたし、狼藉之族も有之躰、沙汰之限に候。惣而右様之所業者、村方衰微之根元に候處、役人共等常々申諭方不行届、御縮方等閑之躰相聞候。且亦其方中においては、御郡方之者共都而目當に致候儀に候得ば、身分之儀者勿論、末々迄も實躰に相心得、農業等相勵候様、常々無油斷可相諭之處、右等風聞に預り候儀者、示し方等閑にも相聞え、於拙者共にも心配不少、尤春秋廻村之節、末々迄心得方之儀ケ條書を以入念申渡候處、其所詮も無之儀に候條、向後右等之族無之、御縮方弛み不申様嚴

重可申渡候。斯申渡候上、自然心得違之者於有之には、夫々相糺、品に寄急度可申付候。尤村役人共、且其許中においても、猶更心得も可有之儀に候間、前條之趣得其意、入念可申渡候。依而以來之爲心得方与、村役人共より請書取立候條、奥書を以急速可相違候、以上。

辛丑七月廿一日巳刻

大嶋五郎右衛門

神保舍人不在合

羽喰・鹿嶋兩御郡御扶持人・十村中

八月四日。郡方の者に役儀を命ずる際知音により周旋を求むる等のことを戒む。

〔御郡典〕

御郡方之者共役儀申付、或は取引等有之節、手筋を求め申込等致候者不少候。右様有之候而は、假令人撰を以可申付候者有之候共、詮議方之手障に相成候條、右等之儀以來心得違無之様、急度可申渡候、以上。

丑八月四日

諸郡御奉行

諸郡十村中

八月十五日。明倫堂に釋菜の禮を行ふ。

〔官私隨筆〕

八月十五日

一、當春丁祭御延引に付、今日有之、五時前上下着用明倫堂に罷出、播州も追付被罷出。
一、五つ餘程過初る。御作法去年八月十五日之通也。少々違候事。

八月廿一日。前田齊廣夫人野田山の廟所に參詣す。

〔官私隨筆〕

八月廿日

一、眞龍院様當廿一日天氣次第五時之御供揃、略御行列に而桃雲寺へ御立寄、野田御廟所へ御參詣、夫より山通り大乘寺へ御立寄可被遊旨被仰出候由。

八月廿二日

一、今朝出前金谷へ罷出、昨日遠方へ御參詣に付、相窺御機嫌候趣、内藤勘兵衛へ申入、御様子相尋候處、益御機嫌能、昨日五時過とやらん之御出に而、桃雲寺へ被爲入候處、寺へ御入之御時分より雨降出し候へども、野田へも御參詣、御廟々々不殘御參詣、金龍院様御廟之前之山通り御乗物に而、大乘寺へ御參詣。兼而天氣次第夫より山へ御廻り御歩行も有之筈之所、天氣惡敷七時過とやらん御歸殿之由。

八月廿二日。蓄米を行ふを以て藩の米廩を増置せんとす。

〔官私隨筆〕

七月廿四日

一、石野右近罷出、所々御藏詰り候付、松任・水橋・小松に新御藏相建候儀に付、先達而紙面指出、右入用は糞物代上納之内に而可辨由之處、右は上納とかく滞候躰に付、其儀尋置候處、其内諸郡より願出候付、是迄御藏所有之所々へ増藏被仰付事に可仕と、改作奉行より紙面調替指出候由に而、添紙面とも出之、先達而之儀と取替度旨也。先達而之分も持參、兩様共先受取置。

一、前段に記候扱納并増御物成別除米年々相増、御藏々積入差支候付、増御藏出來之儀其所々左之通。

御入用は先達而屎物御仕入用貸渡置候御かね之内を以、今來年に追々出來申付度旨也。

- 一、長三十五間幅四間 新堂形園内増御藏
- 一、長十間幅四間 能美郡寺井中出藏園内
- 一、長十間幅四間 同郡今江
- 一、長十間幅四間 礪波郡津澤

- 一、長二十五間幅四間 上新川水橋
 - 一、長十五間幅四間 羽咋郡塵濱
 - 一、長十間幅四間 同郡川尻
 - 一、長十間幅四間 鹿島郡野崎
 - 一、長七間幅四間 鳳至郡中居
 - 一、長七間幅四間 同郡輪島
 - 一、長七間幅四間 同郡時國
 - 一、長七間幅四間 珠洲郡蛸島
- 十二ヶ所 此分當秋中新出來之儀願聞候由。
- 一、長十間幅四間 鹿島郡大町
 - 一、長五間幅四間 同郡金丸
 - 一、長十間幅四間 同郡田鶴濱
 - 一、長十間幅四間 同郡熊木
 - 一、長五間幅四間 羽咋郡富木
 - 一、長七間幅四間 珠洲郡飯田

- 一、長七間幅四間 同郡松波
- 一、長七間幅四間 同郡宇出津
- 一、長七間幅四間 同郡道下

ハ十ヶ所 此分來寅年新出來之儀願聞候由。

〔御家老方等諸事留帳〕

八月廿二日

一、元祿之比御米藏所々に有之分三百三十計、當時二百四十一有之。此度七萬石計御蓄米有之、指支候に付二十二出來之圖り也。

八月廿五日。前田慶寧と水戸侯徳川齊昭の女との婚約に關して聞番より齊泰に報告す。

〔諸事要用雜記〕

八月廿五日

一、水戸様御縁組御内約之庸姫様御引移、當年此表被爲入上、無程被進、御養育之儀に御直約有之候處、あなた御在國相延、其後何等之儀も不申來に付、御比合如何有之哉相伺候様聞番被仰出、則書取を以先日聞番、山方迄御使相勤候處、早速水府表被可相達旨に候處、

本年五月七日の條參照

山方運阿彌亦山形に作る

寅之助は虎之助

其後五・六箇年も御在國之儀被蒙仰、右御答も何等も不申來に付、此間外御用にて山方御參り候に付、不破紋左衛門心得に而相尋候處、於運阿彌未御答も無之に付懸念に罷在、幸頃日初め手懸罷在候御側御用人藤田寅之助と申入出府相尋候處、彼是御用繁に而御答も出來不申、其上五・六箇年御在國も被蒙仰に付而も、指當御答も有之間敷、山方心得に而は只今に而者來年は此方様御歸國、來々年にも及可申哉に申聞候付、此方に而者御引移御比合次第、御願書等も御進達可有之御振之旨も申入候處、尤あなたにも御同様に候間、何れ先づ御頃合相極、其上取しらべ候筈と山方申聞候旨、紋左衛門咄有之に付、其段御序申上置候事。

九月朔日。東御居宅成就せしを以て關係者に賞賜す。

〔諸事要用雜記〕

九月朔日

- 一、御住居御普請御成就に付、左之通拜領物被仰付伺之上申談、御禮申聞申上る。
- 白銀二枚・生絹二疋 御住居御用人最初より相勤候 津田判太夫
- 白銀二枚 同 當五月より相勤候 村源五左衛門
- 生絹二疋 御作事御用初め御繪圖等手先 戸田清太夫
- 白銀一枚 江戸御作事奉行 中藤左衛門

加賀藩史料 第十五編

天保十二年

小判一兩・染物二反 御大工 松波源七郎
三百疋・染物二反 御壁方 堀内三郎左衛門

九月十三日。東本願寺末寺再建の手斧初を行ふ。

〔上質屋日家榮帳〕

丑九月十三日御末寺御手斧初、朝六つ時に御初り、かざり物多く御座候。誠にくんじゆ之參詣。跡に御能御座候。

九月十九日。前田齊泰能を催し、大聖寺侯前田利平之に臨む。

〔諸事要用雜記〕

九月十九日

一、今日御能に付、大藏少輔様御出御願被成候筈之旨、夜前奥御取次を以仰出に付、御料理、等之儀先達而之振に相心得候儀、夫々被申談候様返書に申遣、御客方へ申談有之筈之事。
一、今日四時過大藏少輔様御出被成、御口上被仰上候上、拙者共被爲召、則罷出候處、今日御能御拜見之儀御願被仰上、則申上候處御許容、御見物所御通り之儀被仰進、於御定席御料理出、於御見物所御菓子・御吸物・御硯蓋出候事。
但、御見物所に而御硯蓋、先達而之節御臺所奉行心得に而申付、其段申聞候。此度も先日

本文は幕令なり

之通と申談候付、右之通出候得共、重而右様之節は御菓子・御吸物迄に而可然哉之事。

一、今日御能六時前相濟、詰合拜見被仰付、御客も有之付一人は濟候迄居候。

九月二十日。今後献上の鮮鯛に代ふるに金子を以てすべき幕令を受く。

〔諸事要用雜記〕

九月廿五日

一、左之通御傳達、當廿日に到來致候事。

大目付

此度嚴敷御儉約被仰出候上は、公儀而已に而も無之、諸大名とても萬端入用少、各安心いたし相勤候様有之度候。勤向とは乍申、御武事に付候儀は、たとへ存外散財有之候とも、元來銘々覺悟之儀に付、別段可達品も無之候得共、平常之勤向并献上物等無益之費用は、成丈相省候様に有之度候。献上物之儀に付而は、享保・寛政之度々追々手輕之方に被仰出候得共、古今同種之價も時勢によつては高下有之事に候得ば、仕來候献上物之内にも、江戸表に而調進候品を在産に引替、又は在産之品も江戸表之調達に替候方勝手之向も候はゞ、聊無斟酌可被相伺候。御用向無御差支分は申立候通にも可相成候。且又年中定式臨時御祝儀事に付鮮鯛献上之節、暑中或は連日風雨等之砌、品物調兼心配、其上不相當之入用有之趣に相聞、且は

炎暑之時分杯は猶更厚心配可有之候得共、指上候以後時刻も移り候儀に付、御用に相立兼候儀も有之。旁諸家無益之費に候間、御樽代・肴代等之准例を以、向後鮮鯛献上之節拾萬石以上は金貳千疋、五萬石以上は同千疋、五萬石以下は同五百疋、代金を以相納候様可被致候。右之趣可相觸候。

九月

九月廿二日。能美郡に降雹あり。

〔官私隨筆〕

九月廿八日

一、安田新兵衛罷出、廿二日能美郡雹之降候様子共申聞有之。着用いたし居候笠を破り、人々頭に疵付候由。すゝめ・あとり等多く打れ候而落、中には十餘羽も拾上候ものも有之由也。扱も悉く落候躰。御高に而九千五百餘石計之由。御取箇之所にては二千石餘之御取不足にも可相成哉与被存候由等申聞也。

十月四日。石川郡宮腰錢屋五兵衛の下役をして領内の船數調査の爲出張せしむべきことを告ぐ。

〔御郡典〕

權役調理役錢屋五兵衛下役

吉久村 喜 六

木吉町 又 次

右同人手代

茂 助

右加越能三州船數爲調理方、錢屋五兵衛可致出役處、當病に付右喜六等當月十日頃より發足、加州大野浦始、能州筋・越中筋、夫より加州筋相廻候條、船數・名前等調理置、廻先々不相洩指出候様、諸浦等肝煎共可被申渡候。尤臨時相尋候品も可有之、此外天保五年相觸候通、夫々不指支様心得方、是亦可被申渡候。尤廻村中自分止宿之筈に候條、此段も可被申渡候、以上。

十月四日

御算用場

神保舍 入殿

大嶋五郎右衛門殿

津田 昇殿

十月十六日。分限高一萬石に對し粃百石の割合を以て圍穀を行ふべき幕令を受く。

〔諸事要用雜記〕

十月十六日

當十四日御傳達之寫越前守殿御渡。

近年凶作打續候處、兩三年以來作方茂多分宜に付、凶年非常之備自然与等閑に可相成哉に候。於御料所茂圍穀被仰付候間、私領之分も分限高一萬石に付粃百石之割合を以、當丑年より巳年迄五ヶ年之間、面々領邑に圍置候様被仰出候。一統節儉相用、其領邑に有用之備等有之候得ば、天下之御備に相當、御安心之儀に思召候。寛政度厚御趣意を以被仰出候圍穀之分、不得止用途に遣拂、詰戻未相濟向は、可成丈當丑年詰戻、來寅年より前書割合之通年々圍増候様可被致候。委曲之儀は御勘定奉行に可被承候。

十月

十月十六日。收納米の品質を精良ならしむべきことを令す。

〔司農典〕

代官は收納
吟味の代官
を以て十村等
をいふ

三州御收納米納方之儀に付、別紙之通御算用場より申談に付、相越之候條、可得其意候。先以急度察當之趣者、於代官々に申譯も無之筋に候。去年杯之年柄、大坂御廻米彼地に而受取方等指支候向有之、既に俵拵も甚龜抹与申儀坏者、全く代官々々等閑之心得方に相聞候。大切之御收納米に候得者、無申迄於百姓精誠を盡し、上米指出可申儀に候條、此段村々々入念可申渡候。先以代官も天保八年如元被仰付、無間ヶ様之察當に預り候儀、於拙者共も申渡方不行届哉に御聞、心外之至に候。以來之儀無違失相心得可申候。一郡切代官々々請書可指出候、以上。

丑 十月

改作奉行

諸郡御扶持人・十村中

新田裁許・山廻り中等

三州御收納米等納方之儀、其年豊凶に隨ひ、精誠を盡し上米を以可相納儀者申迄も無之處、近年不熟之年柄相續候仕辦押移り居候哉、去年杯は上之作柄に不似合惡米多、當年大坂御廻米に相成候而も、彼地に而受取方指支、船手之者共及迷惑に候ヶ所も有之。是等は納方に寄申儀与相聞候に付、穿而可及詮議に答に候得共、今度之儀者令用捨候。且亦俵拵も甚龜抹に相成、古菰を用ひ候分も多有之、大切之御收納米を龜略至極之致方不行届之儀、畢竟納人共心

得方不宜故にも相聞え、沙汰之限に候條、以後諸代官納方急度相心得可申候。勿論如此申渡候迎、不實之撰方致、百姓爲及迷惑に候様之仕方有之間敷、何分實意を以、手前々々精誠之上米指出候様に可取計、當年杯實入者宜敷候得共、干方不宜分も可有之候。是等者人力を盡し候得者、品柄宜敷可相成儀に候條、納方之節も其心得可有之候。萬一不埒之百姓有之、申諭方をも不聞入者有之候は、其段役人於廻先に可申出候。

一、町藏納方之儀も同様之儀に而、次第に内實も減少致し、既に同ヶ所に而悪敷藏宿之分者、並より直段相劣り候儀顯然に候條、品に寄藏宿取揚候儀も可有之候。

一、八月より越藏敷相廻り候に付、七月下旬に相向候切手有之候得者、兎角申立、米渡方相廻し、月越に致候様之仕方有之躰相聞得候條、以後者給人米たりとも、七月相向候切手之分、藏宿手前之指支に而、米渡方八月に相成候分、越藏敷相懸り申間敷候事。

但、船手等米請人之手前指支に而月越之分者、尤越藏敷取可申事。

一、藏拂に至り候而者、鼠喰等之損俵多有之候得共、拂方之節色々と押隠し相渡、船手等米請人甚及迷惑に候躰に候條、御藏・町藏共右様之儀無之様可相改候。

右之趣被得其意、三州代官急度可被申渡候。且御米仕立方等之儀は、百姓手前に有之儀。元來御收納之儀者不輕品に候故、大切に相心得候儀者、申迄も無之候得共、中に者心得違之

者も有之躰粗相聞え、不埒之至に候。尤各手前油斷も無之儀者顯然に候得共、尙更裁許々々手前において、一統誠實に相心得、厚致世話候様得与可被申渡候、以上。

十月十六日

御算用場

改作御奉行中

十月十八日。石川郡宮腰錢屋五兵衛の子喜太郎に扶持を給せんことを議す。

〔官私隨筆〕

十月十八日

一、湯原平馬罷出、錢屋五兵衛せがれ喜太郎御扶持之儀先達而願置候。喜太郎人品も宜候間何卒相願候由。其儀難成候は、五兵衛も御算用場向御用入情に勤候由候間、五兵衛へに而も奉願旨也。五兵衛は當時役儀無之、喜太郎は勘定方相勤候由。

十月十八日。鷺羽・鶉羽等を拾ひたる者は御郡所等へ差出すべきことを令す。

〔御郡典〕

鷲羽等拾取候者有之候は、御弓奉行の相違候様、先年被仰渡も有之處、近年一圓不指出、御用支に相成候之旨等、別紙之通石川與右衛門等より申越候に付、相渡候條可得其意。右鷲羽等取扱候者、御郡方に有之、中には心得違之者他國等の相洩候儀も無之哉。是等は不埒之至に候。依而前々申渡置候通、少に而も拾取候は、早速及斷候様可申渡、尤以後之縮方嚴重可申渡候、以上。

十月十八日

大嶋五郎右衛門

羽喰・鹿嶋兩御郡十村中

御弓土藏御用之鷲羽・鴉羽等、先年より御郡所の縮方被仰渡、是迄新川郡より拾ひ羽少々宛指出候得共、御領國外よりは指出不申候に付、文政五年改而縮方等之儀被仰渡候様、御家老衆方の御達申候得共、年々鷲羽等拂底に而、一圓指出不申、御用支に相成候に付、天保二年十月又候縮方等之儀委曲御達申、其御役所等へ夫々縮方被仰渡候様御達申候間、御承知之儀与存候。且同年鳥屋與兵衛・村屋金平兩人の矢之羽買入方御用申付置候得共、金平儀は病身に而難相動及斷候に付、與兵衛是迄御用相動候得共、近年全く不得指出、御用支に相成候而は、不行届躰にも相聞候候に付、與兵衛今般矢羽買入方御用指省申候。仍而御領國之内鷲羽等致取扱候者、ヶ所々々に縮方御申渡御座候而、肉附拾ひ羽たりとも、都而其ヶ所より役所

外にほかに
御領國
内の他所の
意なるべし

の直に指出候歟、又は其御役所の御取立御指出御座候而も宜敷御座候。近年拂底に相成候儀も、中には心得違之者も有之、他國の相洩候躰に相聞候候間、嚴重縮方等御申渡被成候様致度御座候、以上。

辛丑十月

石川 與右衛門

木村 九郎

大久保 六平

八嶋 貞右衛門

由比 作左衛門

能州御郡奉行中様

十一月二日。前田齊泰の子利鬯の色直の祝儀を行ふ。

〔官私隨筆〕

十一月二日

一、今日桃之助殿御色直之處、圖書今日初而承知有之、いかゞいたし可申哉と之事に而、御用番より相談有之。献上物に而も可有之様にも被存候へども、今日に成可仕様も無之と之事也。然處一統には、今日御當人様迄御祝詞申上り、服も服紗に候。御廣式向・御次向は頭分

以上のしめ故、圖書は服はのしめに而可有之哉。左候へば御のし頂戴有之候而宜敷歟之段申入候處、其趣可然候條、御廣式示合候様にと之儀に付、横地治兵衛・加藤新之丞内申遣候處、新之丞罷出候付、彼方之手續相尋候處、御引移迄はいづれ替る御取扱も無之筈故、わけて頂戴物等も無之、御のしは先達而より出候事に成居、今日も被下候筈之由也。左候へば此方に而申合候と不計打合候段、其趣御用番へも申入、御用番より圖書へ被申聞、各より一足跡に退出あり。自分は又其跡に罷越也。

一、右御祝に付、播州と自分は八時過に可罷出、頂戴物も有之由内々此間頭より執筆迄申聞有之に付而、のしめ・上下に而八半時過罷出。

但、播州は今日疝邪に而斷也。

一、以治兵衛御祝申上、方々候へも申上候。

但、方々様へ申上候儀、先刻新之丞越後やしきへ罷出候節、新之丞仲間申上方承候處、眞龍院様初方々様へも申上候由也。其儀先刻播州より聞合に付、成瀬主税等之様子以紙面爲承合候處、是も方々様へも申上候由主税より返事有之。依而本文之通也。

一、只今御祝御規式中に候間、暫相待候様にと頭中追々申聞あり、七時過歟に御奥へ通る。

一、御吸物・御酒・御取肴、其外御 [] もの等頂戴。且又寒く候付被仰付候由に而、しつば

く頂戴。又從眞龍院様被進候由に而、御菓子・御にしめ頂戴。

一、榮操院様より吉尾を以御懇之仰あり。

一、頂戴中基五郎殿・豊之丞殿御出。

一、頂戴濟、今日從方々様桃之助殿へ被進候品々拜見仕候様仰之由に而、御對面所御縁類に飾有之を拜見、同所において段々之御禮菊井迄申述、御廣式へ出候上、以定之助猶又御禮申上、直に金谷へ罷出、以金子五郎太夫御祝詞申上候處、以同人御懇之仰あり。六時過歸宅。

十一月九日。昨今兩日前田治脩の三十三回忌法會を寶圓寺に執行す。

〔官私隨筆〕

十一月九日

一、昨日・今日太梁院様三十三回御忌御法事御取越御執行之所、自分は今日詰日に付、六時過提灯なしに裏門より出。但長上下着用。

一、今日御法事如例上堂也。昨日は兩御寺・勝興寺諷經有之鉢。今日は諷經もなし。

一、御法事五前頃初り、濟候は八時前にも可有之歟。御名代之御焼香内匠殿被相勤。夫より御代香都合十人、直に御施物之御作法如例候。

〔溫敬公記史料〕

兩御寺は天
德院及び如
來寺なるべ

十一月八日・九日。修太梁公三十三年忌於寶圓寺。

〔溫敬公記史料〕

十一月九日赦。

十一月十六日。御側衆等出會の際に於ける酒食に付き申合せをなす。

〔雜記〕

親類又は仲間出會之節

一、祝儀に而出會之節は

吸物 一 肴 一 取肴 一

料理は平生之通に可仕候。平常出會料理

一汁三菜

此内一菜は魚類にて茂、平生より心を付候儀勝手次第に候。外に

香物 吸物 一 肴 一・二種

料理數は堅右より過不申候様に相心得、其内可成程は輕仕候様に可仕候。且又後段無之、濃茶出候儀勿論無之筈事候。

但、有合時分、菓子一色などは時により出可申候。

一、麵類出候節は料理相止可申、所望之爲計、有合香物一出し可申候。
一、親類等茂右之段兼而申聞置、先様に而茂急度右之通相心得、先様へ參候節萬一右定を背申儀有之候は、料理給候儀茂不仕様に相心得可申候。
右御側衆より被仰聞候趣に付、仲間申合候、以上。

丑十一月十六日

十一月廿四日。前田齊泰の子利鬯、家臣前田圖書の養子としてその邸に移る。

〔成瀬正敦日記〕

十一月廿四日

一、今日御引移、御供揃五ツ時に付、五ツ半頃より熨斗目上下に而致出席候事。
一、今日御引移之上、圖書夫婦へ御上使被下候物有之。右御意書暨御品物御目錄等も於御次御用意、御用人に引渡候様表方示合也。尤御使之儀は御用番より被仰出之筈之事。御使人は由比勘兵衛之由。右に付御用人鈴木清左衛門呼立、右御意書等夫々相渡候事。
一、四ツ半時頃御供廻り之旨御廣式頭より爲知有之に付、兩人共御廣式に相廻り、御出之節御式臺階上方々様御附使者之次へ罷出、御見立申候。相濟、御奥へ相廻り候様にと申事に而、

相廻り候所、於御奥御赤飯・御吸物・御酒、御取肴頂戴被仰付。

〔官私隨筆〕

十一月廿四日

一、七半時頃加藤新之丞より以紙面、桃之助殿御廣式御出、御途中御都合能、益御機嫌能圖書方へ九半時前御入被成候由案内あり。

十一月廿五日。前田齊泰登營して能を觀る。

〔諸事要用雜記〕

十一月廿五日

一、今朝七半時之御供揃に而、鐘之六つ打そろく御供廻り、大方御城迄御提灯之由。御本丸御登城被遊、御能御見物被遊、夫々前々之通り之御次第に而、御料理等も御頂戴、夜六半時前御歸殿被遊候事。

一、今日御城之御様子、左之通書取を以山城守へ被仰出、恐悅被申上。

今日御登城被遊候所、御能御見物、上覽之御間出御、御能始り、公方様、右大將様御同座に而御目見、御懇之被爲蒙上意、御見物之内御老中を以上意有之。御中入御料理御頂戴中茂、御老中を以上意有之。御能相濟、最前之通御目見被仰上、惣而御三家様御同様之御會釋に而、

御格別之儀思召候事。

〔見聞袋群斗記〕

十一月廿五日

大將軍御三家と同じく公に、御能拜見御饗膳被下。御格別之御取扱なり。

十二月朔日。前田慶寧、通稱を又左衛門諱を利住と稱す。

〔諸事要用雜記〕

十二月朔日

一、四時前犬千代丸様御上り、御口上被仰上候上、織人御溜へ罷出、今日御名御改被進候付、於御居間書院被進候段申上、退出其段申上。追付御居間書院に御出、御床前に御着座、御名書御小蓋居に而小左衛門持出、御前へ指上、御次に扣犬千代丸様御出被成候様織人申上、直に御先立仕、上之間御敷居之外一疊目に御出、是へと御意、御近へ被爲入候處に而御名書被進、御成長に付御先例之通御改名被進候段御意。御同所様御名書御披御頂戴、御小蓋共小左衛門に御渡、直に御縁頬之方に御着座。此時新御廊下之方より御熨斗三方御表小將持出、御前へ指上、御手熨斗御取上之處に而、犬千代丸様御側へ御進み、御熨斗御頂戴御復座。御三方引之候上、御敷居之外に御出、段々難有思召旨被仰上御退去。如元御溜に御先立御立戻り、

御禮被仰上、夫より御居間へも御通被遊候事。

一、右相濟、御名書籍に入、於席市三郎等と相渡。又左衛門様と

一、御硯箱 一箱

御文晝 一箱

御 肴

御目六

〔成瀬正教日記〕

十二月十五日

一、如例出仕、御近習頭相伺中御座へ罷出候所、御用番美作守殿左之通御演述に付、一と先退き、重而御座へ罷出、恐悦申上候事。

犬千代丸様御名、當朔日又左衛門様与御改被遊候。此段何茂と申聞候様被仰出候。且又御實名利住様与奉稱候。

右之趣同役中傳達、組・支配之人々にも相達候様可被申談候事。

但、今日登城無之面々には、向寄より相達可申候。

十二月

十二月三日。先に降雪により損耗を生じたる能美郡諸村に償米を與ふることを決定す。

〔官私隨筆〕

十二月三日

一、能美郡徳橋組一針村等都合五十六ヶ村、當九月廿二日大霰に而晩稻等打こぼし、不容易損毛に付、御償米等願書付承届、今日裏書印章仕る。御米高如左。

一、千二百八十四石五斗三升

能美郡徳橋組一針村等廿ヶ村、輕海組下麥口村等九ヶ村、粟津組三日市村等八ヶ村、板津組梯村等八ヶ村御

償米高

一、百五十石

粟津組小寺村等十一ヶ村御取扱米高

但、厚難所に准村

千四百三十四石五斗三升

十二月六日。鹿島郡大津村の入海を開發する爲土砂を白濱村に取るべき

ことを許す。

〔郡方御觸〕

鹿嶋熊木組大津村領入海水淺之場所、凡七萬步餘御仕立間に申付候處、右ヶ所開發方土取場所指支、隣村白濱村等御林山立替之儀願出、右替り地野毛山に付、松苗植付方出來候得者、指支之筋無之旨に而、御林立替之儀願之通承届候得者、松木之内御作事所御用立候分相渡、其餘入札拂に申渡、枝葉・末木等開發人の相渡、龜袋等に爲用候は、可然旨等、委曲紙面繪圖面等相添被出之、承届候條、右紙面之通可被相心得候。尤御林山立替之儀、能州山奉行の茂申渡候條、可被得其意候事。

丑 十二月

右寫之通、御用番年寄中被申聞候條、被得其意、夫々可被申渡候、以上。

十二月六日

御算用場

改作御奉行中

十二月十五日。前田齊泰の生母榮操院の病癒え床拂を行ふ。

〔官私隨筆〕

十二月十五日

一、村田定之助罷出、榮操院様御調子御宜由に而、御食附等出之。今日は御内々御床拂之御祝有之候へども、今日は御取込に付、十八日夕八時過より播磨守申談罷出候様にと思召候。此由可申聞旨仰之旨。且其節御逢も被成候御様子之旨演述。
一、退出直二御丸御廣式へ參上、以定之助榮操院様へ御床拂之御歡申上、方々様へも申上之、十八日罷出候様仰之御禮も申上之。

十二月十六日。天保通寶錢の流通を圓滑にすべきことを告ぐ。

〔御郡典〕

百文判之儀、於江戸表新錢百文之極之品に付、於御當地も其通可取扱之處、いまだ手馴不申に付、通用方相泥候様も有之様子。畢竟入錢少き故と相聞え候。當時錢相場も高貴之儀に候處、右取寄方も辨利之品に付、當年より來年中追々多取寄、御拂錢可申付候條、聊無泥、小錢入交一統取扱可申候。此段夫々御申渡可有之候、以上。

十二月十六日

御算用場

水原清五郎殿

坂井忠左衛門殿

〔三州治農錄〕

一、百文錢一つを以、新錢百文之代通用方之儀、天保六年後公儀相渡候御書附之趣、一統相觸置候通に候處、今以取扱不申躰相聞、如何之事に候條、以來無泥可致通用候。右之趣被得其意、同役中傳達、組・支配不相洩様可被申渡候、以上。

天保十二年十二月二十八日

本多播磨守

十二月廿七日。高直の菓子・料理等を禁ずる幕府の令を傳ふ。

〔觸留拔萃〕

- 一、不益に手間懸り候高直之菓子類・料理等、向後無用に候。是迄拵來候共相止可申事。
- 一、能裝束甚結構成も相見候間、向後手輕之品相用可申事。
- 一、はま弓・菖蒲甲・刀・はこ板之類、金銀かな物并箔用申間敷事。
- 一、雛并もてあそび人形之類、八寸以上可爲無用候。右以下之分は、龔末之金入とんす類は裝束不苦候事。
- 一、雛道具梨子地者勿論、蒔繪候とも、役所之外無用之事。
- 一、高直之植もの賣買停止せしめ候事。
- 一、させる其外もてあそび之品々、金銀遣候儀者勿論、彫物・象眼之類并蒔繪等結構に致間敷事。

本文は幕令なり

一、女之衣類大造之織物無用に可致候。縫金絲等入候而も、小袖表一つに付代銀三百目、模様小袖表一つに付代銀百五拾目を限り、夫より高直之品賣買致間敷候。尤帷子も右に准可申事。

一、町人共一統に華美之儀無之様致し、自今町人男女ともに分限不相應結構之品着用致し、又は髪のかざり等迄も大造成品相用候もの候は、組之者見懸り次第、右居所名前等相糺し、町役人指添させ、直に奉行所へ召連れ吟味いたし候間、左様に可相心得候之事。

一、くし・かうがい・髪さしの類、金は勿論不相成、籠甲茂細工入組高直之品相止様、代銀百目を限り、かうがい・かみさし右に准じ、下直に仕込可申事。

但、鬘結に縮緬之立切をこしらへ、又は女子用候はきもの鼻緒等、高直之品賣買致間敷事。右之趣、享保・寛政之度并其後も相觸候趣茂有之所、累年世上華美に相成、銘々身分をも不辨立派を競ひ、且又外見を不目立様に而も、内實高金なる品々猥に賣買いたし候もの共も有之由に候。たとへもてあそびの品に無之候とても、度々觸示置候儀を當座之事之様に相心得候より、畢竟等閑に成行、法度を背候段不届之至に候。併是迄之儀は格別之御宥免を以、先御咎之不被及御沙汰候之條、難有奉存、今般厚き御主意を以、風俗改り候様被仰出候儀に付、不輕相心得可申候。尤是迄仕込置候品も可有之候に付、來寅年より急度停止たるべく候條、

觸面之趣相背候もの有之においては、役人相廻し遂穿鑿、無用捨嚴數咎可申付候。尤紛敷改方いたし候もの、或は途中に而往來之ものを捕改候儀等、決而無之事に候。若右躰之者有之候は、其者を留置、早々可訴出候。自今奢侈高價の品、武家方に候ともあつらへ候もの有之候は、奉行所へ相伺可任指圖候。

右之通町々相觸候條、被得其意、惣而花美高價之品誂申問敷、此度之御注意彌厚相心得、諸事奢ケ間數儀無之様可被致候。

右之趣可被相觸候。

十月

不益に手間懸り候高直之菓子・料理等、向後無用之旨等從公儀之御書付寫、奥村丹後守等より相觸候通に候。儉約之儀は於御當家茂前々より之御定、其後時々被仰出、近年金龍院様御代以來嚴重被仰出、別而去戌年御親翰段々被仰出候趣も有之所、兎角華奢之風俗相改り兼候躰相聞え候。今度從公儀被仰渡候趣も有之事、猶來春御歸城之上被仰出品も可有之候條、何茂儉約之儀嚴重相慎、今度被仰渡之趣、暨於御當家は迄被仰出來候條々、無違失急度相守可申候。此段可申渡旨被仰出候。

右之趣被得其意、同役中傳達、組・支配不相洩様可被申渡候、以上。

十二月廿七日

前田美作守

十二月。御郡方算用聞役の勤方を告ぐ。

〔上田舊記〕

御郡方算用聞役の申渡三ヶ條

算用聞役就申付候、肝煎裁許を離候條、身當之儀都而拙者共の直に相達、諸事肝煎之上に付可申候。但身分持高并に家に付候品者、肝煎之裁許に預り可申事。

村中諸納所之外、惣而懸り物米錢、肝煎より割符方之人別手前算用合之儀委曲承届、其筋不違様令裁許、其内難心得品者拙者共の可申斷事。平生書付紙面等、惣而役人連判之節不及加判に、但品に寄可致加判候。且又村中諸事之儀者、勿論是迄之通肝煎取捌候得共、其内肝煎・組合頭了簡難決儀者、宜及示談候上、難辨儀は拙者共の可相達事。

村々之儀に付、可然存寄之品有之節者、不何寄肝煎の致助言、一村中末々之者迄、随分無滯爲致渡世候様心懸可申事。

臨時御用向拙者共より直に申付候品可有之候條、不依何事役所の罷出、勤方直に可承候事。右之通可相心得、取洩候品有之候は、追而可申渡候、以上。

丑十二月

御郡奉行

今濱村 惣 助

貝田村 喜左衛門

天保十三年

正月朔日。前田齊泰、江戸城に登り新正を賀す。

〔諸事要用雜記〕

正月朔日

一、今朝御目覺之上御例之通御祝方有之、御提灯に而御供廻り、御提灯引之頃御出、御直垂被爲召、兩御丸御登城被遊候事。

正月十六日。前田慶寧、齊泰に伴はれて閣老を訪ふ。

〔諸事要用雜記〕

正月十六日

一、今朝初而御同道に而御廻勤に付、又左衛門様三つ鐘前比御殿に御出、御居間に御通り無程御前御出、又左衛門様には中之口より御出被遊、御行列御建込に而堀田殿御勤被遊、初而御逢、御都合能被爲濟、五つ七分五厘過御歸殿被遊候事。

〔見聞袋群斗記〕

正月十六日初て御老中方に犬千代丸様爲御逢御出。公同道なり。

正月廿三日。前田齊泰夫人江戸城に登る。

〔諸事要用雜記〕

正月廿三日

一、姫君様今日御本丸御登城被遊候事。

正月晦日。徳川家齊の一周忌法會を神護寺に執行す。

〔大鋸文書〕

文恭院様御一周忌御法事、當月晦日於神護寺御執行有之候事。

一、御法事中御作事御普請方、其外三御丸御射手・御異風稽古并諸組弓・鐵炮稽古之儀茂相止不申候事。

但、神護寺に程近き所々稽古場有之候は、指扣可申事。

一、御家中普請・鳴物等不及遠慮候。能囃子押立候振舞等之儀は御法事中自分に遠慮可然事。但、能囃子之儀も役者杯稽古仕候分は不苦候。乍然神護寺近所に罷在候者は遠慮可仕候事。

是月は大盡
なり

右之通被得其意一統可被申談候、以上。

正月十六日

長 又三郎

御 横 目 中

〔官私隨筆〕

正月廿九日

一、明日文恭院様御一周忌御法事に付、今日神護寺惣見分有之。

正月晦日

一、今朝朝詰に付六半時前出宅、神護寺へ罷越。

一、御法事五時始り、二座目之間に四つ承之。其頃晝詰之人々追々被罷出、二座目濟交代、四半頃退出歸宅。

正月。羽咋郡上田村に住する舞々三郎太夫の身分に關して議す。

〔杉木氏御用方雜錄〕

羽喰郡押水組上田村に往古より舞々三郎太夫罷在、同村領高之内一石七斗五升拜領、御印も所持罷在于今居住罷在、御城下に而者舞々三太夫与相名乗、常々も罷越、鶯舞・蟹舞杯致し、吉事等之節も祝取に罷越候に付、非人乞食類与相心得居申候。右押水組上田村に居候舞々三

郎太夫儀、今度高方御仕法に付、致取高度旨願出候に付、難相成段申渡候所、重而裁許十村庄助へ願出候は、是迄村方に而耕作而已相稼來り、當時家内も人多に而、右屋敷高而已に而は渡世之いとなみ一圓無之、十五石計不致手作而は外手段無之、畢竟御先代様より舞々三郎太夫与申御宛之御印頂戴仕居申故、取高等一圓不相成譯に候得者、右御印奉指上度旨申聞御印持參、此段達而奉願旨申聞候。依而先年其御役所へ藤内頭より書出候物、穢多等由來書手扣相しらべ候之處、右三太夫事も書記在之、以前は金澤町内に而は生洲之小路に居、武家等へ參り舞を舞、手之内勸進仕候由。當時子孫何方へ參り候哉不相知旨。石川郡藤江村百姓中之内、同姓之ものも居申由。三太夫儀は藤内頭支配に而は無之故、其實否難相知与書記在之候。且又河北郡森村にも一人罷在、是迄平人与縁組茂いたし候由に御座候。右は各様に而は平人同様之御取扱に候哉承度存候。右三郎太夫所持罷在候御印、前々所持罷在候由緒書寫取、入御披見候事。

寅 正 月

改 作 所

諸郡御奉行中様

於能州羽喰郡押水庄上田村居屋敷三百五十步之所、任天正年中先判之旨宛行畢。諸役等無相違令免除者也。仍如件。

承應二年三月廿二日

御 印

舞々三郎太夫

以上

我等十七歳に成り申時、其方に領地之内を以百石之所、役無之可令扶持候。依而後日之約狀如件。

元和四年卯月十八日

大 德 判

舞々長三郎へ

乍恐就御尋、羽喰郡上田村舞々三郎太夫居屋敷被下候由緒

一、私先祖三宅三郎太夫与申者、末森三宅備後守殿家來に而御座候得共浪人仕、其後奥村助右衛門殿に少扶持に而罷在申候。然處佐々内藏助殿御取合之刻致籠城申候に付、高德院様相立御聞申候哉、御印被爲成下候所、其以後御印御改之刻横山山城守殿迄指上申候得者、津田和泉殿・郡平八殿・馬場忠兵衛殿・豊島八兵衛殿御書替被下所持仕候所、承應二年に長九郎左衛門殿御取次を以右書替被召上、則微妙院様御印御成替被爲下所持仕候。右之通相違無御座候、以上。

貞享三年八月

羽喰郡上田村 舞々三郎太夫

正月。百歳の老齡者に物を賜ふ。

〔温敬公記史料〕

正月。賜年百歳者物。

二月十四日。薪材の價格を公定す。

御城下を初入用之薪、前々相對を以取極、直段少々宛高下茂有之候處、近年山方之者風儀惡敷相成躰も有之、次第に高直にいたし候に付、遂詮議候所、以前に遠山々伐荒候儀、且諸雜費多相掛り候躰。乍去此儘に而は高直而已ならず、第一手支におよび候故、不得止事直上聞届候處にも押移、際限無之儀に付、當年之處は先一作別紙直段より高直に賣不申様、村々へ申渡候條、御家中之人々を初其心得可有之候。

二月十四日

御 算 用 場

藤田八郎兵衛殿

脇田彌三左衛門殿

覺

一、錢百文に付 目形六貫目 牧木

加賀藩史料 第十五編 天保十三年

但、小割に而取寄候分は、村方相對を以少々高直之儀聞届可申事。

一、同斷 目形七貫目 抄

右之通、當二月より可相改、且兩様共當時右より下直に致來候分は、尤可爲是迄之通旨も申渡置候事。

二月十五日。前田慶寧初めて徳川家慶に謁す。

〔見聞袋群斗記〕

二月十二日、初而御目見被仰付候又左衛門様登城之節、下乗所相進候儀、并挾箱片々御玄關前迄爲持候儀は、父加賀守下乗所并挾箱入之儀茂唯今迄之通に相心得、嫡子又左衛門同様に相心得、御玄關前迄長柄傘爲持候儀、晴天之節は無用に可仕旨被仰渡候。

〔成瀬正教日記〕

二月廿四日

一、又左衛門様御儀、御登城被成候様、十四日御奉書到來に付、則十五日御同道に而御登城被遊候所、於御白書院又左衛門様初而御目見、御首尾能被仰上、御懇之上意被爲蒙、相公様にも右御禮被仰上、御懇之上意被爲蒙候旨等申來。

〔諸事要用雜記〕

二月十四日

一、八時頃左之通御奉書御到來之事。
同氏又左衛門事御目見被仰付候間、明十五日五時同道可有登城候。且又其方儀茂御禮可被申上候、以上。

二月十四日

- 眞田 信濃 守
- 堀田 備中 守
- 土井 大炊 頭
- 水野 越前 守

松平加賀守殿

同 十五日

一、又左衛門様六時過御出、御長袴御くゝり之儘、御口上被仰上候上御居間に御通、御のし三方配膳役上之、御供廻前御溜に被爲入候。

一、しらく前御供廻り、六半時前御時計は六つ七分八分の御出也。御出、又左衛門様に者中之口より御出、御同道に而兩御丸へ御登城被遊候事。御前御服御裝斗目御半上下又左衛門様御長袴之事。

一、今朝御目見等首尾能被仰上、四時過之由夫より黒鷲御杉戸際に而、御兩殿様御一集に御老中御

和田倉は會津侯邸

御半は半上下

謁、相濟、公方様今日西丸御成に付、御締解御見合に而西丸の御上り、御前に者苑之御杉戸際、又左衛門様には大廣間に而御奏者番御謁に相成、直に西下三軒御勤、夫より和田倉御立寄、御膳等相濟、重而御老中・若年寄御勤被遊、八つ八分位御歸殿被遊候事。但、又左衛門様和田倉に而御半に御召替之事。

〔續徳川實紀〕

二月十五日、月次の賀例のごとし。松平加賀守嫡子又左衛門馬たてまつりて初見したてまつる。加賀守にも謝して見えたてまつる。

二月十八日。明倫堂に釋菜の禮を行ふ。

〔官私隨筆〕

二月十八日

一、今日中丁に付聖前御飾之御規式有之。如例五つ前のしめ・上下に而學校へ出座。
一、五つ餘程過初り、四つ餘程前濟。都而去年之通也。

二月廿二日。前田慶寧江戸城に登り、正四位下左近衛權少將に任じ、偏諱を賜ひ、筑前守と稱す。

〔諸事要用雜記〕

二月廿二日

一、今日御登城、又左衛門様御元服に付、六時過出席、御出前被爲召候事。
一、三つ鐘に而御供廻り、五つに御城の之御都合にて御登城被遊、西丸にも御登城。夫より被仰出候通、御老中・若年寄衆、御同道に而御廻勤被遊、且諏訪部殿御立寄、御焼飯被遊、九つ九歩御歸殿被遊候事。
一、四半時前御元服御首尾能御例通り被爲濟候段、御表小將早乘御使罷歸申聞候。

〔成瀬正敦日記〕

三月朔日

一、去廿一日御老中方御連名之依御奉書、翌廿二日御登城被成候處、又左衛門様於御黒書院御目見被仰上、御元服被蒙仰、御一字御拜領、被任叙正四位下少將、御名筑前守様与御改、御懇之被蒙上意、御盃・御肴御頂戴、御腰物御拜領、相公様に茂御登城御禮被仰上、御懇之被爲蒙上意候付、眞龍院様の御普爲聽當席以御使被仰上、榮操院様の御近習頭御使を以て被仰進候條、御日柄宜時分御使相勤可申旨等。基五郎殿御初は奉札を以被仰進候旨に而、御口上兩通、奉札一封到來候事。

一、筑前守様御實名別紙之通方々様可申上旨申來。

上包筑前守様御實名

慶寧公

筑前守様御一字御拜領、御實名右之通被稱候事。

〔續徳川實紀〕

二月廿二日、黒木書院へ兩御所出たまひ、松平又左衛門見えたまつり、首服をくはへられ、御一字を下され、正四位下少將に叙任し、筑前守慶寧と改め、豊後守實行の刀・馬・金・巻物をたてまり、謝したてまつる。御盃下され、筑前國盛重の御刀をへて下さる。父加賀守は、子の首服を謝して、おなじく物たてまつり謁見す。

〔恭敏公記史料〕

二月廿二日、同温敬公登城。於將軍座前加首服。受偏諱。任正四位下少將。賜刀筑前國盛重代金二十兩杯酒。改稱筑前守。名慶寧。有懇旨。公献飾刀一口・黄金五枚・巻物十・馬一匹。刀銘豊後國實行代金十。是時温敬公献裝刀一口・白銀二十枚・綿三十把。又爲謝加冠之命。温敬公献巻物十・干鯛一箱。公献白銀二十枚・干鯛一箱。以使者也。

先是正月林大學頭選名取書經。一人有慶。兆民頼之。其寧其永。

二月廿六日。前田齊泰、會津侯松平容敬夫人等を招請す。

〔諸事要用雜記〕

二月廿六日

一、方々様今日御招請に付、六時前出席、相揃被爲召。服のし・麻。

一、和田倉・池之端より御出、御戻り之節例之通御白洲へ罷出。

一、今日御招請、年頭并今度御目見等被爲濟候御祝儀に付、毎も之年頭而已之御招請に而は相濟不申、御能も被仰付候。御饗應方も御三献に而御盃、夕二汁五菜御小漬也。

一、今日備後守様被仰進則被爲入、船辨慶被成候。御前様・壽正院様六時過被爲入候事。

但、前田大和守殿豫而御願に付今日被仰遣、御出被成候。坊主も五七人拜見之事。

一、御用人衆等子息方拜見被相願、則被罷出候。御先例も有之に付、御菓子一臺御在合に被遣候儀伺、被仰出、久留殿へ相渡候事に御用人へ申談る。

一、御能相濟、御小漬被進、相濟、御締可引渡旨に而、夫々主付等同じ御締引受候。夜四時過和田倉様等夫々御立に付、例之通御白洲へ罷出、同半時過致退出候事。

二月晦日。前田慶寧の叙任口宣受領の爲使者を江戸より發せしむ。

〔諸事要用雜記〕

和田倉は會津侯松平容敬夫人
池之端は大利平夫人

備後守は大和守前田利平
大和守は七日市侯前田利平

是月は大盡なり

一、御奉書左之通并御姓名も寫置。
松平筑前守事、正四位下少將被仰付候。口宣等之儀相調候様、議奏衆迄可被申入候、恐々謹言。

天保十三寅二月廿二日

真田信濃守幸貫

堀田備中守正篤

土井大炊頭利從

水野越前守忠邦

牧野備前守殿

御姓名書

折掛包 正四位下左近衛權少將 松平筑前守菅原慶寧

姓名書 檀紙折紙

〔諸事要用雜記〕

二月廿九日

一、廿六日口宣御奉書相渡候付、京都之御使大嶋三郎左衛門、明晦日發足に付、左之通今日山城守に御渡之事。

口宣御奉書 木地箱入 御直封

御姓名書 一包

三月四日。金澤に於いて前田慶寧の元服を披露す。

〔官私隨筆〕

三月四日

一、筑前守様御元服之御弘有之に付、のしめ・上下に而五時過登城。

三月十一日。大聖寺侯前田利平の用人來り、その十萬石待遇を舊に復して減せんことを希望すとの意を告ぐ。

〔官私隨筆〕

三月十一日

一、今朝小隼人罷越候節、大聖寺近代御高直り之儀、備後守様殊之外御心配之躰に而、毎度仰も有之候。先達而出府之節、自分方へ罷越候て可申達と存居候へども、當病に而逢不申候故不申達候。何卒御本家様之御威光を以、本成に被成度思召に候間、宜考候様仕度旨、何とやらん御内意之様に申聞也。宜程に答置。

大聖寺用人
笠間小隼人

三月十三日。前田齊泰就封の暇を受く。

〔諸事要用雜記〕

三月十三日

一、御本丸并西丸より御小人目付を以、上使土井殿、西は間部殿御出候旨申來。

一、八つ一分御城下御付人に而、御兩殿様共御出向被遊、筑前守様には御前より外にて少し御後へ被爲入、御大書院の御通り、上意御拜聴、御拜領物御頂戴。夫より御小書院の御通り、御相伴に而御料理・御盃事有之、御持參もの御作法之通之内、今度は御濃茶筑前守様御持參被遊、夫々相濟、御請前筑前守様御先の御式臺へ御出、御廣間折廻り之邊へ御先立被遊候時分、御先の御門外の御出御送り被遊、御前も御送り、夫々御作法通り御都合能相濟候。

一、右御料理中、西丸上使御城下り等追々參り候に付、聞番より出役を以御見合之儀申上、本郷三丁目邊に御見合之由。土井殿御退出之上、御廣間御縁頼に御扣之内、三丁目御付人參り、御出向等夫々御作法之通り相濟、御退被成候事。

三月十四日。今明兩日前田慶寧叙任せられしを以て金澤に益正月を行ふ。

〔上貨屋日家榮帳〕

二月若御殿様御元服、御墨付・御腰物御拜領。益正月に三月十四日・五日休に御座候。誠に諸

人悦入奉存候。目出度。

三月十五日。前田齊泰登營して就封の辭見す。

〔成瀬正教日記〕

三月廿五日

一、左之通御口上書到來、御日柄宜時分可相勤旨。

真龍院様の

去十三日以上使土井大炊頭殿御國許の之御暇被仰出、白銀・御卷物御拜領。從右大將様茂上使間部下總守殿を以、御拜領物被成。從一位様御使井關縫殿頭殿を以御拜受物被成。同十四日御老中方御連名之依御奉書、翌十五日御登城、於御座間御暇之御禮被仰上、御懇之被爲蒙上意、御手自御鬘斗蛇御頂戴、御鷹・御馬御拜領。且山城守・將監御目見、拜領物も被仰付、重疊難有御仕合思召候。右御吹聴被仰上候段、御口上宜申述候。

三月

御使 成瀬主税等内

〔續徳川實紀〕

三月十五日、松平加賀守御鷹・馬下され、就封のいとま賜ふ。

三月十八日。前田齊泰江戸を發して就封の途に上る。

〔諸事要用雜記〕

三月十八日

一、今朝五時不遲之御揃に御供揃に而、拙者共相揃罷出、御前の出恐悅申上る。四半時益御機嫌能御發駕被遊、六時過上尾御着被遊候事。

一、四時過御上下に而筑前守様御同道御表の御出、備後守様於御居間書院御對顔被遊、夫より御小書院溜并御勝手座敷御客衆・御用人衆久留殿等御逢被遊候事。

但、真龍院様御使者御直答。山城守等被爲召候儀も此時に候得共、此度は御旅裝束之上被爲召候。初めより此御都合少不行届、ケ様に成候事。

一、筑前守様御發駕前御出、於御居間御對顔、御のし三方指上候。且御表御出、相濟直に御退出、夫より御下屋敷へ被爲入候。

一、喬松丸殿にも御下屋敷へ被爲入候。且御のし三方御一集に御小將上る。

一、御下屋敷に而、雨も降候付御庭へ御出も不被遊候。御發駕之節鏡板迄御二方様とも御送り被遊候。敷付敷無之故板之間也。

但、御先例者御見立者表御式臺敷付迄被爲入候筈。此度は右之通也。

一、明曉七時之御供揃に而當驛御發駕、鴻巢・吹上・かこ原・深谷御小休可被遊旨仰出候段廻

狀有之。

三月十九日

一、今曉七時過御發駕被遊、昨日被仰出候通所々御小休等被遊、七時本庄御着被遊候事。

一、明曉七時之御供揃に而左之通御小休。

落合新町 板鼻 御書 八本木 松井田

三月廿日

一、今朝七時御供揃に而、同刻過本庄驛御發駕被遊、所々御小休等被遊、夕七時過坂本御着被遊候事。

一、今日板鼻御中休より八本木迄御馬上被遊候事。

三月廿一日

一、今朝五時御供揃に而、夜明無程板本驛御發駕被遊、所々御小休等被遊、八つ七分小諸御着被遊候事。

一、今日碓氷峠難所御滯なく御越被遊候事。

三月廿二日

一、今朝六半時不遲之御供揃、御旅館前に而御提灯引け、小諸御發駕被遊、所々御小休等有

之、七時過矢代御泊に御着被遊候事。

一、今日之處兩川共御差支無之候得共、夕景より之降に付犀川御指支之有無、今晚御歩横目、御横目足輕指遣、明朝御供揃刻限迄に注進有之筈与申上候事。

三月廿三日

一、今朝六半時過矢代驛御發駕、兩川御差支も無之に付被爲入、千曲川御渡船被遊候上、夜前犀川見分之御横目足輕戻り御差支無之旨。然處無程犀川々方御役人より紙而御道中奉行より申上、追々増水之由申來。南原村に被爲入候處、益々増水之御注進に而、御旅館取次并御使番中見分之趣も申上、只今之處御差支之由。併先丹波島迄可被爲入旨に而、則同驛へ被爲入候處、定水に三尺餘も相増、川方御役人も御本陣に參り、段々御道中奉行懸合之處、何分今日之處御差支之由申聞。尙又今一篇可致僉議旨に而、則御引戻りも可被遊哉之御僉議區々之處、此躰に而者千曲川もいかゞ可有之と御旅館取次見分被遊候。然處重而犀川々方御役人罷越、少し引水に向候間、此上は追々減水可致、何分烈風に而減水致兼候由。明朝之處は此躰に而者必御差支有之間敷、矢代に御引戻り之儀も恐入候間、當宿に御見合之方可然哉。米・味噌迄之儀は聊御差支無之、夜具御差支候由に付、前々御泊も無之ヶ所之事。依而宿札は不打、渡支度所何方々々と相極候事に成、彌當所に御見合之事に詮議治定之内、千曲川見分之

加須屋罷歸り、追々増水、追付舟揚之由言上有之候。依而當所に御見合より外詮議方無之、御見合之儀に被仰出候事。

一、右之趣御道中奉行より相觸、何茂支度所へ引取候。米・味噌迄等之儀も觸有之候。宿料は御本陣拂、旅籠代並之通に取極有之候。拙者宿に坂井氏・有澤氏・杉浦氏四人打込候宿之事。

三月廿四日

一、今朝犀川々明に付、御供揃呼立、五半時過丹波嶋御發駕被遊、善光寺御晝等夫々御休被遊、七時過柏原驛御着御泊被遊候事。

三月廿五日

一、今朝六半時頃柏原御發駕被遊、宿端に而御提灯引け、所々御小休等被遊、七時過高田に御着被遊候事。

三月廿六日

一、今朝六半時御供揃に而、同刻過御提灯引け、高田御發駕被遊、所々御小休等被遊、八半鎌能生驛御着被遊候事。

三月廿七日

一、今曉七時御供揃に而、同刻過能生驛御發駕被遊、所々御小休等被遊、七時泊驛御着被遊候事。

一、南風は一向波に障り無之、不覺靜成山之下に候。姫川は夜前より之暖氣に而少水高く候へ共、尤御滯なく、無類之御都合に候事。

三月廿八日

一、今朝六時御供揃に而、同刻過泊驛御發駕被遊、所々御小休等被遊、八つ鎌下魚津御泊の御着被遊候事。

一、浦山御立、御歩行に而十二貫野道へ被爲入、新開所御巡覽被遊、布施川此方邑へ田井新御出、矢張御歩行、魚津寄に而御馬に而被爲入候事。

一、於魚津引綱被仰付、見物被仰付候事。

三月廿九日

一、今曉七時過魚津御發駕被遊、滑川に而御小休、御發駕之上御提灯引け、所々御小休被遊、川場に而御□居候。八時過高岡御着被遊候事。

一、御着之上追付之御供揃に而、瑞龍寺御參詣被遊、七時過御戻り被遊候事。

四月朔日

一、今曉八時前高岡御發駕被遊、今石動に而御提灯引け、所々御小休、八時御着城被遊候事。

〔成瀬正敦日記〕

三月廿六日

一、本庄驛より傳封御用狀

相公様益御機嫌能、今日十八日也五時不遲之御供揃に而、四半時過江戸表御發駕、御下屋敷に御立寄、筑前守様・喬松丸殿御先を同所に被爲入被成御座、則御對顔、御庭にも御出、追付御立、今晚六時過上尾御宿に御着被遊、恐悅之至御同然奉存候旨、江戸表より之中飛脚步足輕、當所より早飛脚申渡候旨等申來る。

三月。家中の士にして前田慶寧の名に觸るゝものを改めしむ。

〔留書〕

筑前守様御名乗御一字御頂戴。慶寧様コレヤス与奉稱候。御家中之人々、實名同字有之候は、相改可申候。文字は違ひ而茂唱同事に候は、唱替可申事。

壬寅三月

三月。定火消の職務執行に關する心得方を定む。

〔御定火消心得方留帳〕

三月

一、町續在郷火事之節防ぎ可申ケ所左之通。

寶幢寺村 非人小屋 七つ屋 堀川 廣岡村 長田村 野田村 土屋村 田井村 小立野
新村 上下笠舞村 泉村 地黃煎村 石坂村 中村 増泉村 大豆田村 上下安江村 淺野
村 大衆免村 談議所村 卯辰村

右手懸け申候事。

一、非人小屋出火之節、裁許与力より申聞次第罷越防ぎ可申筈に候事。

一、割場 一、御作事 一、かべ小屋 一、御普請會所 一、御算用場

一、町會所 一、御厩 一、木藏 一、公事場 一、下御臺所

右請取火消無之、早速人數入防ぎ可申候事。

一、兩末寺柵之内出火之節、末寺之役人に斷纏入可申事。

但、門前に而も末寺之家有之候間、其心得可有之候事。

一、宮腰出火之節火も見え申程に候はゞ、當番之面々金澤町端の罷越見合可申候。大火に而
町奉行より案内有之候者、罷越防ぎ可申事。

但、非番之人々案内有之次第、火之見所披き、當番同事に可相心得候。當番人罷越候旨案

内有之事。

一、野田桃雲寺邊出火之節は、當番人罷越防ぎ可申候。非番之人々當番同事に可相働候。罷
歸り候上案内有之事。

右者兩所共罷歸り候上、御用番に可及案内候事。

一、御臺所町 一、御手木町

右兩所共通拔不相成候。若廓之内火事之節は纏入防ぎ可申事。

但、木戸之内の入れ不申候得者其通りに候事。

一、大組 一、中組 右同斷。

一、武士屋敷 一、下屋敷 右同斷。

一、消家等名前隨分入念承合可申候。纏附足輕馳廻り承り可申事。

一、梯子の御横目中上げ可申事。

但、御横目合紋水玉に半月。御徒横目合紋烏井襟水玉、且足輕横目彼是指圖申懸け候而も
聞上げ申間敷、併其時之様子次第に候。

一、梯子者別而大事に付、隨分奉行并裁許之者心を付け可申候。當時御仲間多く被仰談有之
故、御仲間來与名乗候者下々迄も無構梯子の上げ可申事。

一、侍屋敷出火之節、燒居候而も斷無之候は、手懸け不申筈に候。且少し之儀は、火事に而無之由申聞候者、其分に而人數引取可申事。

但、侍屋敷塀等々梯子指し懸見分無用之事。

一、既に火におはれ候時、自然侍屋敷を越し申扱難成節は、役人等々及斷、聞届之上越し可申事。

一、侍に而茂町家に居住之方見分、梯子懸け申儀不苦候。

一、火之見所より鳴子引申候而見分に上り、見届指圖に可任候。尤見分人揚り候内裝束可致候事。

一、兩末寺兩隣々見分梯子掛揚申儀、堅く無用之定に候。

但、兩末寺は木戸入口小路より末之小路迄、東末寺は表具屋小路より末之橋迄、梯子懸け申儀堅く無用。是は諸役人下々迄得与心得可申事。是非寺内々入り不申而不叶時は、末寺之役人等々申斷、指圖次第入り可申事。

一、御臺所町常々者往來成候得ども、火事之節は行ぬけ不相成候。是者御道具等有之故歟、下之心得違に而無理に行拔候得ば主人越度候事。

一、御城内々入申儀有之節は、高提灯通し申儀堅く無用。自分立込申儀有之候は、馬脇朱

紋之提灯、平生柄をぬき提げ申様に拵置用立可申候。尤其節は何役人に不限、主人に指添入可申候事。

一、町人者隨分引上げ可申候。其上宜き消留在之時者、其町々褒美心付之事。

但、役人心得居可申候事。

一、惣體於火事場取捌、頭立候役人心得居可申事。

一、火消申家々隨分纏奉行上り、纏持等々顔合せ可申事。

一、火之見所々障申木爲切候節、役人より附届可申候。重き方々々は、主人より直紙而遣し申儀有之事。

一、纏附足輕等者、纏奉行支配いたし候所も有之候。是は大概頭役纏奉行相勤候得者、彼是身分之儀申渡候。尤相願候之所も勝手方役人類役迄可相願候。纏持杯よりは奉行まで願之筋有之候。其時は程能取捌可申候事。

一、新出來之纏式臺に掛け候。右道具隨分大事に可致候之様足輕纏持等に申渡、依而少宛酒代被下候段申入相渡候事。

但、御修覆にても同事。

一、消留めに相成、最早氣遣敷無之下火に相成候儀、纏附足輕暨纏持等に承合、纏引可申儀

に候。且御小將横目之内彼場に有合ざれば、其方より参り奉行逢候而、最早消留候間纏引候段可相達候。右之趣達捨に而引可申候。御横目中不被有合候者、尋出し達に者及不申候。能下火に相成候者引可申事。

一、前段に相記候侍屋敷出火之節、少々之事に而相濟候得者、其主人歟又家來歟罷出、火事に而無之由、纏入申問敷与申時、奉行罷出右主人歟家來に達、再三相尋、決而火事に而無之段申問候へ者、引取申格に候。其節雜兵不辨無理に押込、門等打破り申儀も在之候へば、主人越度相成候間、何役人成共随分可致承知候。小身方も侍同事に候。火事に而無之段申斷、右主人罷出候者、格之通引可申候。侍之申儀疑申問敷候。其上大事に相手に相成手に合不申時は、またく其時之事に候。

一、出火与見受人數出し、外より人數出候上火事与申儀は先は無之事。御仲間被仰談与申儀は、先達而纏持并纏附足輕参り、阿方申談之上、其後纏奉行罷越如何与申時、申談之足輕等答候へば、其通に可相心得候事。

一、組屋敷并下屋敷杯は木戸打申候間、右之内少々燃候様子見受候共、あなたより指圖無之内手懸け申問敷候事。

但、御臺所町出火之節、火消人數入候儀不相成趣に付、左様有之候而は指支之儀有之、御

同役被仰談、出火之節は町屋同事に致度段、戊七月朔日出御城代前田修理殿・本多右門殿等より、御用番長九郎左衛門殿へ御達被成候所、同十五日御用番より前田修理殿へ、先達而被申問候趣、則柴山左兵衛より手前致僉議候之處、左候は、町家同事に人數入込防ぎ可申、併外火事之節は往來不相成趣被仰渡有之候。且又組屋敷も同様也。

一、町奉行・御使番・御横目梯子の上り候儀、何茂御用に候間、其節念を入名承り上げ可申事。

一、焼居申家より五軒こなた家こわし候而も不苦、六軒目こわし候へば越度に相成候事。

一、纏奉行参り様心得之事。

一、消留め家等、主人出馬に候はば、火事之有無様子可相達候。跡より御横目罷出候得者、主人の上馬に而相尋候。主人答申落し有之候ば、其時纏奉行進み出、御横目中より委細可申述候之事。

一、中見之節揚候町名家名可承候事。

一、家老押之事。

一、家老鍵・若黨・草履取召連可申候。自分紋附脇指丸子、齋口に指し可申事。

一、火之見所開候節、纏奉行より纏持の心添之事。

- 一、火事之節當番・非番罷出候之事。
- 一、御藏所は十一屋・土清水、是へは可罷越候事。
- 一、火事に而無之段申聞候共、能相改、立具等・柱も燃え上り候へば火事に候。下切に相濟候へば、下は猥になり居候而も火事に無之候事。
- 一、火事之節御城中の鳶口持參指支不申候。大火之節は高提灯も指支不申事。
- 一、消口は家焼候所半分に而消留め候を云也。
- 一、消留は家焼候をもみつぶし候を云也。
- 一、防留は隣家へ付懸り候を防を云也。
- 一、消口は柱等建具之形残り候を云也。
- 一、消留は隣迄焼來り候所を消留。
- 一、防留は小路等有之或は飛火多來り候所防留と云也。
- 右三ヶ條は、文化十二年四月十二日御同役被仰談、御達方之ヶ條也。
- 一、旅籠屋七軒有之候。若七軒之屋根の上り候様成儀有之節者、内へ入り、宮様家等之旅人有之哉之旨相尋、無之段申聞候者上り可申事。
- 但、相尋候者、若宮様方等御會符有之候得者、邪魔に候之間相尋可申事。

- 一、場所に而纏損じ候節、御横目へ申達、早速取に遣し、纏取替可申事。
- 但、損じ候纏者、引上候節行列之跡より爲持候事。
- 一、御城近火事之節、御曲輪之内番小屋に而も火之粉燃付候節、御門番へ致付届火を防可申。其刻御城代或は御年寄衆・御目附衆へ案内申達、指圖有之候者名前、無指圖候者無遠慮火を防ぎ可申事。
- 一、火事場より歸り候節、御横目等火事之様子被尋候はゞ、何町に而鎮候段可申達候。且虚説等之節は、火之見所より見請罷出候所、何町に而中見爲致、在火之様子に付纏引上候段答候事。
- 一、火事場より歸り候節、行列之内御横目・御使番馬上に而通可申段被申聞候者、交名承り、御用之方に候問聲を懸、行列爲切可申事。
- 一、野田桃雲寺邊火事之節、當番之人々御越、其段途中より足輕使に而非番之御筆頭へ申遣候得ば、火之見所御當番同事、尤御筆頭より夫々御案内次第、右櫓見張り申事前後案内之事。
- 一、宮腰同事に候へ共、非番之御方町端に而被詰候事も有之、兎角町奉行請而之事也。
- 一、火事場に而纏をれ候歟燒候はゞ、纏付之内一人代り取に遣候事。

- 一、火事之節纏持不在合候者持參之事。
- 一、右損候纏行列押足輕之上爲持候事。
- 一、侍屋敷火事之節、外長屋の者無構梯子を懸け申候。併門開き候へば、外より梯子懸け候而も不苦候事。
- 一、當番之節近邊御鷹野等御出之節、先達而其近邊町家より案内いたし候様申渡置、案内次第櫓戸をしめ下り候事。
- 但、火消方御定帳には、戸は其儘明置可申旨也。
- 一、小立野筋出火に而纏等指出候節、若御寺御參詣に而御出合申候者、暫蹲踞いたし罷越、併脇道有之候者其向寄り可參候事。
- 但、右之節警固足輕指留申候。脇道も無之候者、能所に而蹲踞いたし候間、罷通り候由申達候。戻り之節は可致踞蹲、御通り後引上可申事。

四月朔日。前田齊泰金澤城に着す。

〔成瀬正教日記〕

三月廿九日

- 一、明日高岡より御着城に付、表向御殿揃刻限四つ半時揃之由。

一、明朝日高岡より御着城之筈に候間、御着之御様子承合、登城御機嫌可相伺候。幼少・病氣等之人々は、御用番御宅へ使者を以可申上旨、且朔日月並相止候旨、御用番將之佐殿より御廻文到來之事。

四月朔日

- 一、今日高岡より御着城に付、表向御殿揃刻限四つ半時に候得共、御次内は人々心得に而五つ時過より追々罷出候。今日より奥之口往來いたし候事。
- 一、津幡御附人九つ半時頃來る。夫より九つ半餘程過前ハッ森下御附人案内有之、何れも御式臺へ相廻る。御子様方も御出、御先立御廣式頭等追付大樋御附人も來る。八つ時益御機嫌御着城被遊候。敷附御左へ善右衛門・肴次郎、御右に配膳役改田久米之助・御近習頭山森罷出、階下御右へ御城代美作守、御左へ御家老・若年寄罷出、御子様方は最初御式臺御疊之處に御着座、御先拂御見懸階下御右へ御出、御後に頭・御抱守一人扣罷在。御刀持は階上出入之後へ扣罷在、御通之節刀御ふせ候事。御先立若年寄式部。夫より御作法書之通被爲入、御居間書院より御先立主税、御支關前御見受相廻る被爲入、御居間御上段に御着座、御鬘斗配膳役上之。相濟、主税・善右衛門罷出、益御機嫌克御着城被遊、恐悦奉存候旨申上候所、何れも無事と御意に、御意を蒙り難有仕合奉存候旨御請申上。夫より御近習頭并隠居二切に罷出る。

四月三日。奥村丹後守御勝手方御用の職を辭せんと請ふ。次いでその意を果さず。

〔官私隨筆〕

三月廿九日

一、今日左之紙面御用番へ可達と相調致持參、先内膳殿へ及示談候處、各へも物語有之由にて、今暫見合候様仕度由被申候旨に付、今日は不達之。

朱書

此紙面月附を四月にいたし、三日に内膳殿へ逢、何卒達度、内膳殿へ可相渡哉と申入候處、御用番より此紙面差出候様にと昨日分にも申談は無之候哉、昨日其示談之由被申聞。何等之談も無之旨申入、内膳殿より被達候様仕度旨申入之、相達す。

私儀去々年御勝手方御用被仰付、前廉内存之趣をも申上候へども、段々被仰出に付及御請、其後月々之主付も一人に而相動候様被仰付候付、其砌今一、兩人も主付之者被仰付候様仕度旨申上候へども、御聞届無御座、相動來申候。然處右時々申上候通、元來御財用向之儀は不案内至極に罷在、其上御算用場奉行之内も、打はまり相動候様には不被存人々も有之、且場内御役人全く和熟仕候様にも不相見、其以來之御不足高御理合之僉議も爾々出來不申、増而

此末之御手繰等、根元へ付候品を僉議候所へは參り不申候。先達而以來不及ながら愚意申談候趣も御座候へども、其詮も無御座、御勝手向之御様子は段々之御物入共打重り、御不足高も過分に相成り、益御逼迫に付而は、御役人彌和熟出情不仕候而は難叶儀と奉存候所、右様之族に而御趣意通之所へは參りがたく、且又惣躰御省略之筋も何となく忽せに相成候様に有之、彼是申談方不行届故と迷惑至極奉存候。去々年以來聊御國益之筋も出來不申、御費用は過分に相成、此儘に而は御勝手御成立之詮も一圓相見え不申、次第に御行詰りに相成可申段大切至極奉恐入儀に御座候處、此上何と存辨候儀も無御座候間、月々主付之儀餘人へ被仰付、私儀は御勝手方御用御免被仰付被下候様奉願度奉存候。依而先及御内談申候。猶口上にて御達申候通候間、宜御相談可被下候、以上。

四月三日

奥村丹後守

村井靱負様

〔官私隨筆〕

四月廿六日

一、御勝手方御用之儀に付、先達而内談紙面指出置候處、則御用番被指上置候由。然處今日御用番被爲召、無泥相動候様可申談旨御意之由播州演述に付、被仰出候趣奉畏、先以御用に

も相立不申候處、加様に被仰出難有仕合奉存候。乍去何相辨候儀も無御座、當惑仕候間、猶又相考御自分様迄申上候儀も可有御座、先宜様御申上可被下旨申演之。

四月四日。前田齊泰、石川郡北安田にて捕獲せる白雁を觀る。

〔官私隨筆〕

二月廿四日

一、成瀬主税參出、石川郡北安田村に而此頃白鴈をとらへ候由に候。御用番より若年寄へ御用も有之間敷哉之段申達有之旨。もし御用無之候はゞ御子様方御覽も被成間敷哉之旨、御用番申聞に候。御廣式頭へ被達候序有之由候間、序に被承間敷哉と尋候處、可承由口上。

二月廿五日

一、白雁之儀御子様方御覽被成度旨に付、御表御用無之候はゞ、御鳥部屋へ渡り候様にと御用番へ申入候由、主税口上。

〔成瀬正教日記〕

四月四日

一、先達而御留守中河北郡捕之白き雁、御鷹部屋へ留置候様若年寄方へ被仰出置候分、今日御覽可被遊旨被仰出、若年寄方へ爲承知申達、今日直に御鷹匠小頭へ申談、取揚與取次へ引

河北郡とす
るは誤なる
べし

渡入御覽。御留に相成候旨に付、御鷹匠取次へ申談、若年寄方へ爲御承知申達置候事。

四月十三日。幕府、前田齊泰夫人の献上品を簡易にしその費を省くべき

ことを告ぐ。

〔成瀬正教日記〕

四月廿六日

一、左之書取、此間津田判太夫より申上る。

御守殿御住居向表方御入用多、可爲御難澁趣御心痛被思召候付、今度格別に御守殿を初御儉約被仰出候。就而は是迄兩御丸へ御上げ之御品等、於先様萬端被敬御品等、御入念御吟味御指上等に相成候得共、畢竟右等之御廉々に而御入用も相嵩申儀に可有御座候。依之以後之處、是迄之御仕來、暨先様御家格等に御拘り御欠き難被成御儀たり共、於先様右様之儀都而御食着無之、御上げ品等に而も、誠に御食抹成御取調理に相成候様に与之御趣意に候間、此御住居表方御入用圖り、去年四月より當三月迄之分取調理減を付、御用人衆より水野越前守殿御手元迄可被相達旨、今度御取締御懸り石河美濃守殿等、當十三日於御城被仰談候旨、久留孫太夫殿御申聞候事。

四 月

四月十四日。前田齊泰就封の後初めて學校に臨む。

〔成瀬正敦日記〕

四月十二日

一、御歸國後明倫堂初而御出之節は、御上下に而御出、督學へ大學三綱領之講釋被仰付御聽聞、御上段より御出被遊候。其節教官之人々并入學生聽聞被仰付候事に相成居候旨。依廻狀等、餘程數多事相成儀に候間、二・三日被仰出御座候様仕度旨、此間大田又助申聞之趣も有之に付、其段申上置候事。

四月十四日

一、今日九ツ半時之御供揃に而、御上下被爲召、八ツ時前學校より御案内申上、追付御出、明倫堂御上段へ直に御上り。但御上段御右之方横迄若年寄式部御先立、夫より主税御先立仕、御上段へは裏より御上り。無程講書宜旨申上り、御澳明之、廣間無目敷居之外に御罷敷有之所へ御着。其間織人御先立、御見臺表小將上之。無程講書相初、教授廣瀬順九郎大學三綱領講之。相濟、御見臺引立、御上段へ御上り、御先立主税、但下へ御出中に伺れし無目敷居之内に罷在る。講師順九郎御正面へ罷出御禮、大儀与御意、御取合内膳殿被申上、御澳建之。無程經武館不時的御覽宜旨申上り、御先立大野、裏之方へ式部相向、夫より射場迄御先立。吉田權平方不時的四座宛三

返御覽。但一篇三度宛也。五度宛之善之所御好に而三度に相成。相濟、直に御戻り被遊候。八ツ半過也。

四月廿二日。前田齊泰・利義・利行共に能を演ず。

〔官私隨筆〕

四月廿二日

- 一、今日御能に付上下着用五時登城。
- 一、御能五時過始る。
- 一、今日御能之内、竹生嶋御シテ基五郎殿御ツレ豊之丞殿、八嶋・藤戸・須磨源氏相公様被遊。又道成寺あり、波吉甚次郎へ被仰付。
- 一、御到來之御肴御下被下候由、御膳奉行演述之旨御用番被申談。
- 一、是界御能之間に右御吸物・御酒・取肴する被下候。畢而以御膳奉行御禮申上候。
- 一、御能六時過濟、松之間二之間に而各一列以牽次郎御禮申上。且又豊之丞殿御能初而拜見之御禮も申上、丹後守・山城守は居残り、せがれ共御能拜見且頂戴物被仰付候御禮同人へ申述候。

四月廿四日。前田齊泰の生母榮操院病癒え床拂を行ふ。

〔諸事要用雜記〕

四月十八日

一、左之通窺被仰出候事。榮操院様昨年春以來御滯之處、御快被爲在候に付、當廿四日御床被爲拂候段、無急度御用番年寄中相達可申候。

- 一、於御奥御祝方可有御座候。
 - 一、御廣式向御歩並以上布上下着用之事。
 - 一、御廣式男女一統御吸物・御酒可被下事。
- 但、足輕以下者御酒・するめ可被下事。

四月廿四日

一、今日榮操院様御床拂に付、夕景罷出候様申來、七時過出御同所様へ御目見。其節献上物披露有之、御床拂御祝付御目六被下。畢而御側罷出、御廣蓋居之御品被下候。御禮申上、老女を以て申述、御三之間引、御膳祝等致頂戴。相濟御側へ被爲召、眞龍院様御初も被爲入、御目見、御酒等致頂戴。夜九時引御禮御附頭并老女へも申述、致退出候事。

四月廿七日。前田齊泰能を演ず。

〔官私隨筆〕

四月廿六日

一、明日御能被遊候付丹後守・播磨守拜見被仰付候。其外之面々は望次第拜見被仰付由、以甚兵衛被仰出候由、御用番演述。

四月廿七日

一、今朝五時過罷出。

西王母、御	簾	權作	楊貴妃	御
百 萬	甚次郎	草 薙	甚五郎殿	安 宅
枕慈童	甚次郎	祝言養老	六兵衛	

四月廿七日。物價方役所を廢止することを告ぐ。

〔官私隨筆〕

四月十七日

- 一、物價高貴等に付可被仰出趣御下物兩通拜見被仰付、一兩日中及御請可申旨申上候。
- 一、右に付物價方御差止之儀、取仕切僉議仕様可申談旨御意。

〔郡方御觸〕

天保八年以來物價方役所被建置候得共、今般被指止候。是迄右役所に而取捌候產物方御用之

儀者、御勝手方役所にて打込相勤候様被仰付候段、御用番年寄中被申聞候條可被得其意候、以上。

四月廿七日

御算用場

林源多郎殿

吉田藤馬殿

服部貞右衛門殿

右寫之通申來候條、得其意、夫々可申渡候。先々早速相廻、落着より可相返候、以上。

四月廿七日

服部貞右衛門

加州三郡十村中

五月六日。前田齊泰、石川郡弓取川筋に放鷹す。

〔諸事要用雜記〕

五月六日

一、九時過御出、七つ屋口町端より被爲入、弓取川筋鶴御鷹野被遊。此間村新左衛門方等に而御小休被遊、夫より同村領御放鷹被遊、暮前御歸殿被遊候事。

御獲柄左之通

鶴十六 内九つ御拳

鶴一つ打留

五月十一日。成瀬主税、御次向及び兩御廣式御儉約主付を命ぜらる。

〔諸事要用雜記〕

五月十一日

一、左之通今日御用番美作守殿被仰渡候旨演述有之候事。

但、高田善右衛門にも右御用被仰付、出勤候上申渡候筈之旨被仰聞候由事。

成瀬主税

御勝手向御難澁彌増に付、今一篇格別之御儉約可被仰付候。當時公邊萬事御改革、質素儉約茂嚴敷御僉議方之御様子。將又姫君様方、御守殿御住居とも諸事御嵩高に付、今度御改正可有之、御取締掛り之御人々茂被仰付候。右に付而茂御省略方格別之御僉議方も可有之候。依而御次向暨兩御廣式御儉約方主付、御手前被仰付候。此段可申渡旨被仰出候事。

五月十一日。大聖寺侯前田利平歸邑の途金澤城に登る。

〔成瀬正敦日記〕

五月九日

加賀藩史料 第十五編 天保十三年

一、備後守様前月廿六日江戸表御發途、川支に而御逗留有之、今日此表へ御着之由。右に付御見廻御進物有之、明後十一日御近習頭御使を以被仰進に付、荒木津大夫相勤答。

五月十一日

一、五ツ半時過、夫々御都合宜旨に付、御登城御指支無御座旨、杉浦等より以紙面御旅館迄御案内申上候事。

一、四ツ時備後守様御登城、御家老本多大學を以御口上被仰上、御近習頭より申上、御通被成候之様被仰出、御家老大學申上、御居間書院へ御通之旨申上る。但御通明、當席被召候旨御奏者番等御尋に付、申聞、大野罷出候所、今日之御手續夫々申上る。追付御出。御先立坂井御對顔、御持參之御太刀御奏者番前田内藏助披露。長引之、御熨斗、御多葉粉、御茶出之。終而御料理之御挨拶被仰入、御屏風之此方迄御入、御多葉粉盆引之、御料理上之、御引菜御持參。相濟、一と先被爲入、御盃事宜申上り、追付御出。御先立坂井御盃備後守様へ出候所に而御出、御盃事有之。被進候御刀、御家老今枝内記上之。備後守様御受取、三之間御縁側へ御退、御帶し被成、二疊目位へ御出御禮被仰上。右御縁側へ御退、御指替、右御刀表小將へ御渡。右御盃事相濟、一と先被爲入、御料理相濟候旨申上り、御奥御宜旨に付、御奥へ御通被成候様被仰進候付、主稅下之口より罷出、御三之間に而御禮仕、御敷居際迄相進、御奥へ御通被成候様申上、直に中座仕、上之口之際迄相進、直に御先立仕候。御三

之間へ小左衛門無刀に而罷出、夫より御先立替合、上之御鈴之手前御前御出迎之所迄御先立仕、夫より御誘引に而御奥へ御入之事。但御刀は御三之間迄表小將、夫より配膳役持之、御先立落候所に而、奥取次受取若年寄へ相渡候事。

一、九ツ半頃追付御退出之御様子之旨、御奥より申出候付、御表夫々相向候上、何れも夫々御鈴等へ相向罷在候所、追付御前御誘引に而御出、如例小左衛門御先立、御三之間より織人御先立仕。御居間書院上之口より御着座之間へ入、御居間書院御着座之上、御前御出左衛門御挨拶被遊、御退出に付直に如例農人之御杉戸邊迄御送被遊、被爲入候事。

一、芙蓉之間へ御着座之上、年寄中御人拂に而被爲召、被仰入候儀有之候由。夫より御退出、雁木坂邊より御立戻、芙蓉之間へ御着座、御家老へ御口上被仰上候付申上り、御對顔は不被遊候旨に而御返答被仰出、九ツ半過相濟御退出之由。

五月十四日。金澤鍛冶町より火を失す。

〔毎日帳書抜〕

五月十四日

一、鍛冶町与荒町之間横小路之内より出火之躰。及大火に付、奉書火消申渡候事。

〔御留守江戸詰中御用諸事留〕

六月八日

一、前月十四日御國に而鍛冶町・象眼町焼失家數、町奉行より達候由。
六十五軒

内一軒 火元 十一軒 支配違

外に二軒 毀家 一軒 半毀 一つ土藏

三六六

五月十五日。宮芝居を許可すべきことを議す。

〔官私隨筆〕

五月十五日

一、宮芝居之儀、一向堅く止め候も又人氣之爲如何候間、春秋兩度祭之節迄聞届有之可然、たとひ三日が十日に成候とも、常住不斷に成不申様与示談之旨也。

但、三絃は相止め可然、芝居は躍と違三絃は無之もの、様に承候旨也。近來は專有之候へども以前は無之様に承候旨。

五月十九日。前田齊泰、その子慶寧以下の費用を節減すべきことを告ぐ。

〔諸事要用雜記〕

五月十九日

一、例刻出席、相揃候上被爲召。

諸事御省略之儀毎度被仰出置、諸向共有油斷間敷候得共、打續御物入多、御勝手向御難澁彌増に付、今一篇御儉約可被仰付、當時公邊萬事御改革、質素儉約之儀茂嚴敷御僉議方之御様子。將又姫君様方・御守殿御住居共諸事御嵩高に付、今度御改正可有御座御取締御懸りも被仰付候旨。右に付而茂筑前守様御入用方も、是迄之仕來に不拘格別相減候様可遂僉議、いまだ御幼年之儀にも候得者、萬事御質素被爲在候儀、御成立之ためにも宜被思召候間、萬端御事輕相成、御儉約之筋相立候様、無油斷可遂僉議旨仰出候事。

五月

右市三郎等被仰出候事。

諸事御省略之儀——可遂詮議旨、竹田市三郎等被仰出候。就而は喬松丸殿御事は、猶又諸事御手輕御質素之儀に相心得、前文之御趣意奉伺其意、御儉約向精誠及僉議、成丈御入用相減候様可申談旨被仰出候。

五月

右永原貢等被仰出、於此表森七郎左衛門被相渡。

加賀藩史料 第十五編 天保十三年

三六七

諸事御省略之儀 御取締懸りも被仰付候旨。就而者筑前守様御附方、并御本宅向等之儀者、猶以御儉約可有御座候故、追々被仰出候品も可有之候。御奥口とも聊無油斷相心得、御省略之筋相立候様可遂僉議段、向々被仰出候間、和田倉池之端御奥向之儀も諸事御手輕、成丈御入用相減候様、年寄女中等なも篤与申談可致僉議旨被仰出候條、被得其意、夫々可被申談候事。

五月廿一日。前田齊廣夫人、自今家族相互の贈答を廢すべきことを告ぐ。

〔成瀬正敦日記〕

五月廿一日

一、左之通飯尾吉太夫を以、眞龍院様より被仰進。御勝手向御難澁彌増候付、今一返格別之御儉約被仰付候段被爲聞。依之御進物之儀一切御斷被成度候。就而は此方様よりも被進物御指止被成度思召候。今般公邊向萬事御改革、質素儉約之儀嚴敷御詮議方之御様子も御聞被成候間、姫君様御初江戸表方々様なも、御双方御進物御斷被成度思召候間、御住居向なは御引取被仰進に而可有御座哉、此段宜取計被申上候様可相達旨被仰付候事。

五月 月

御住居は前田齊泰夫人の居所

一、左之通被仰出、御廣式頭村田定之助呼立相達す。尤方々様へ被仰進候旨申述。

今一返御儉約被仰付に付而は、御内輪向御進物之儀、乍御心外御互に當分御差止可被成候。年頭其外臨時御祝儀之節御進物之儀も、御事輕之儀可被仰付候條、此段可申上旨被仰出候。

五月廿一日。前田齊泰夫人江戸城西丸に登る。

〔江戸詰御用諸事留〕

五月廿一日

一、六半之廻り來に付直に御住居へすぐに罷出、埋御門より入、裏御門より中口な上り溜へ參候。席坊主一人出居、先立致し、五時過御色めき之段御附御用人澤田等相達、追付中ノ口より出、表御式臺御堺二枚開より御玄關前繪圖之所な出候。暫有て御出、御輿先に御供致し、御往來毎之御道御丸ノ内御縮りに而御指支に付、五町許御廻に而西丸な御上り之事。

一、西丸な御入之上、御上り之御式臺より上り、溜二階に有之參り候事。但、聞番方使役案内等致候事。

一、追付御住居御用人村源五右衛門罷越、右大將様より縹紗三卷。御簾中様より紗綾二卷、木具据に而持參、拜領被仰付候段、御留守衆御渡之筈に候得共、御用多に付私より御演述仕候様御申聞之由に相達候事。

一、右相濟、追付塗御木具据御干菓子、姫君様御膳下と申事、御膳御汁等三品許りに而出。右の前に豆飯黄白色分御盆に盛、御口取等付出る。暫有て朱椀之御賄二汁七菜許、龜末之御料理出る。右之後暫有て、姫君様本御膳之御下、蒔繪之御椀之分一汁五菜許之分出る。晝後御吸物向に海老等二品付候分、御筒・御盃添出る。又御生菓子類御盆に盛上出る。夕景七時過位に御湯漬と云歟、をしきに朱の御椀一つ伏、御猪口之内に何か入候分出る。

一、拜領物之御目六、澤田主馬より相達候に付、聞番の相渡、同人より明日相返候様申入置。

一、夜中五時餘程過御色めき之由也。追付御玄關前に出る。歸御九時前也。御住居に而中ノ口より上り、席坊主先立溜りへ参り、御用人逢、御登城之恐悦等申上度旨申入候所、御用人衆の相達候處、只今御奥入に付暫待可申旨。追付何時に而も宜旨に付、御用人衆の被誘引、今日御登城之恐悦、且御機嫌も相伺、於西丸拜領物御料理等頂戴之御禮も申上候處、申上ぐべき旨被申聞。其席次之御間に而御小ぶた据に御目六相添、白銀二枚從姫君様拜領被仰付旨被申述、其座に而御禮申上退去。右御品物は御住居之坊主入口に居り、溜り持參候事。

一、御附御用人澤田主馬溜り相招、姫君様御歸殿後之御機嫌相伺候處、益御機嫌能被成御座候旨申聞候事。

五月廿二日。前田齊泰金谷御廣式に臨む。

〔官私隨筆〕

五月廿二日

一、九半時頃金谷へ相公様被爲入候由也。

一、播磨守今日も斷に而金谷へ難罷出由故、飯尾吉太夫罷出候節申入候。

一、八時過金谷へ罷出、以林武左衛門御機嫌相伺、今日被召候御禮も申上候。

一、追付奥へ参る。

一、無程御居間へ被召、相公様も被爲御座、御菓子頂戴、葛餅也。向は香物・結のし。

一、喬松丸様御書拜見。

一、無程御庭へ御出、丹後やしきへも御出、御供仕罷越。

御鎮守稻荷堂も拜見、御戸帳開拜見被仰付。左右七面觀音等之由。

一、右より御小間へ御入、圍茶式被遊、御相伴仕る。

主人 長谷川學方 錄事 御右筆某歟

御上客は眞龍院様、其次相公様、其次丹後守、其次老女花山等也。

御茶四品 清風 名月 閑雲 野鶴無試

- 一、右以後御對面所へ被爲入、御酒等被召上、頂戴。
- 一、濱御殿へ日野殿御出之節之御歌等調候品拜見被仰付。
- 一、六時頃相濟、退座、御奥に而老女へ御禮申上、御次へ參り以金子五郎太夫御禮申上候。

五月廿四日。前田齊泰の子利義・利行初めて劍術を學ぶ。

〔官私隨筆〕

五月廿五日

- 一、村田定之助登城、昨廿四日基五郎殿・豐之丞殿御劍術初、以來毎月三八御馬は二七也御定日に相成候由斷。

五月廿八日。衣食住に關し侍以下の心得を諭す。

〔官私隨筆〕

五月廿九日

- 一、昨廿八日今度風俗之儀に付被仰出之趣御用番より一統へ被申渡自分へも觸狀被相渡。文政三年之振と申事故、今日組之筆頭津田乙三郎呼寄寫渡之、相組中傳達候様申談候。

〔御觸留〕

覺

一、衣服之儀、前々被仰出候通、絹・紬・木綿勝手次第着用可仕候。袴・羽織等も準じ候而匱品を用、御徒並以下猶以其心得可仕候。勿論絹・紬より宜敷品は堅く無用之事。

一、女向衣類の儀、是迄度々被仰出候所、追々相緩、近來別て美麗の段、父・夫等不覺悟の儀に候。絹・紬より宜敷品堅く着用爲致問敷候。禮服の儀格別に候へ共、是以後應分限に、成丈匱品相用可申事。

附り、花美成染色、手こもりたる模様等、一切可爲無用候。并銀筭の類、且又たいまいを以拵候高料の櫛等、彌以可爲無用候。

一、饗應の菜數、雖爲歴々之面々、押立候振舞は一汁三菜、吸物一つ・肴一色、尤魚鳥等輕き品用可申候。勿論濃茶後段は出申間敷候。其餘は一汁二菜、或は御用に付寄合候節又は稽古杯に而參會之節は湯漬飯出し、或は焼飯持參尤之事。

一、家作之儀彌増輕く可相心得候。新宅等頭・支配人其様子委曲承届、品に寄其宅へ罷越可遂見分事。

附、表向匱相に致し、内證に而は色々物數寄等仕族、不心得之事に候條、内外なく輕く可仕候。將又輕き人々之内には、近來別て不相應之家作在之躰、不埒成儀候條、追々爲相改可申事。

一、一通之音信贈答可爲無用候。祝儀物等取遣り不仕候而不叶節は、輕き干看之類相用可申事。

但し、身近き親類縁者は、樹木或は殺生之品杯は格別之事。

一、當時押立候婚禮等無之候得共、内證にて無用之費等多き躰に候條、彌事輕可仕事。

附、拵料或普請料杯と名付、銀子取遣し候儀、且養子致候節持參銀杯之儀も今以在之躰。

此儀は前々被仰出在之處、心得違之儀候條、彌以右様之族在之間敷事。

一、群集の邊其外爲遊興寺社方・町屋等を借り罷越候儀儀、堅く無用の旨前々被仰出在之處、忍て罷越候者も在之躰、不埒の事に候條、彌堅く相守可申事。

一、惣て殺生に付而近年別て無用の費多躰に候條、不心得之儀に候。急度相改可申候。將又前々御法度に相背候仕形在之間敷事。

一、町人の儀分限を取失、甚奢侈在之、衣食等別て結構に相聞候に付、心得方の儀前々被仰出候通に候。然處文政三年に、町家の儀は武士とは品違候間、惡敷風俗にて無之候へば、着服の儀御定の外は如何様共應分限可爲勝手次第之旨被仰出候に付、其以來は前々よりの御定を相守り候にも不及様に心得違の者も在之躰に候。右は其節侍中衣食等の儀格別嚴重被仰出候に付、町人之儀をも分て被仰出候御事に而、御定を御改杯の儀は無之候所、心得違成事

に候。向後御定の趣彌相心得、分限を守、奢侈榮耀の儀無之様改て嚴重可申渡事。

一、百姓の儀是又分限を取失、衣食等不相應之躰、婚禮・葬式等の節杯以の外僭上の族も相聞え候之條、奉行・支配人申談、改て嚴重可申渡事、以上。

天保十三年寅年五月

〔坂井留記〕

御家中之人々儉約之儀、前々より毎度被仰出之處、兎角心得違之人々も有之躰に候。惣じて前々より御定等有之品も、何となく令違失、人氣次第輕薄相成、衣食住を初又々漸花美に押移候段、等閑故之事に候。當時不融通に而何茂難澁之所、ケ様に成行候而者困窮彌増、御國躰に茂拘り不容易次第に候。以後急度遂儉約可申候。依之前々之趣大綱別紙之通被仰出候條、此旨相守、萬端是に准じ可致儉約候。尤舊臘申渡置候從公儀被仰渡候趣、嚴重相心得可申候。此段可申渡旨被仰出事。

右之趣被得其意、同役中傳達、組・支配不相洩様可被申渡候、以上。

寅 五 月

前田美作守

五月廿九日。前田齊泰數日前より脚氣を患ふ。

〔成瀬正敦日記〕

五月二十九日

一、御前兩三日前より少々御足部御肉張之御氣味被爲在、先日より除濕湯被召上候所、今日より葛根加蒼朮湯指上候旨等、探元申聞候事。實は越脾湯加朮等に候得共、御指合に付先如此相唱指上候旨之事。

〔官私隨筆〕

六月朔日

一、相公様此頃少々御不例之御様子に付、成瀬主税に御様子承候處、爲指御儀に而も無之候故、御表杯へも御出被成候。元來御時氣中に而、最初除濕湯立之御藥召上り候處、頃日御肉腫と申程には不被成御座候へども、少々御むくみ茂被成御座候付、御發汗被爲在可然旨に而、葛根湯類差上之、召上り方等曾而御替不被爲在旨口上。

五月。御歩並以上の子弟にして十四歳に達したる者等の學校へ届出を怠るべからざることを告ぐ。

〔留書〕

一、御歩並以上子弟十四歳に相成候人々、毎歳十月中届之儀、以來有無共届。

一、人持・頭分・平士より御歩並、都而定役・轉役・退役之儀届。

但、相續・組替等之節、武藝得方之儀届。且其節是迄届有之候得共、改而年附届。

一、御歩並以上、他國詰并遠所は罷越候節、歸着共届。子弟致同道候は、其段も届。

但、御供に而發足・歸着右同斷。

一、御咎并御免之節届。

一、相續或は組替并御加増等被下候届。

一、養子願・嫡子願之節届。

一、有祿・無息共、都而改名并病死之節届。

但、厄介人之分茂右同様届。

一、陪臣暇遣候節届。

右、届方區々相成、洩等多御座候に付、今度改而右箇條書之通、私共役所は頭分以上は直に相届、平士以下御歩並以上は都而頭・支配人より相届、且陪臣之分は相續等之箇條以下之儀主人々々より相届、將又足輕之儀は都而師範人より相届候儀に被仰渡御座様仕度奉存候、以上。

寅 五月

學校御横目

五月。商人の高利を貪ることを戒む。

〔郡方御觸〕

近年御領國諸物直段次第高價に相成、就中去年以來追々引揚候躰。元來御領國者古來より米價下直に候處、近年甚高直に相成、隨而諸品も都而高貴之所、其後米價者漸引下候得共、諸物者今以高貴に而費之儀不少、一統及難儀候躰。町方并御郡方支配之人々者、百姓・町人潤候儀を心懸候様之儀も可有之候得共、御領國出來之品、暨他國より來品共直段引揚賣出、高利を取候儀を潤与相心得候而者相違之事に候。且又諸品他國の遣候得者高利を得候故、御制禁之品等をも密に差遣候儀も有之躰に而、御領内拂底に相成、自高直に相成品も可有之。是等之處急度可遂吟味處、油斷いたし居候に而者無之哉。將又近年菜種杯も相應之出來に有之躰。然所拂底之旨に而油直段も引揚候族。紙并炭薪迄も拂底之趣申觸し、御家中初指支に相成候旨。是等も直揚いたし候爲之巧も可有之哉。惣而町家共身分を忘、己之産業を怠ながら得高利候事而已心懸候風俗致增長候躰、不届至極沙汰之限りに候。右様之族者急度可被及御沙汰候。得与遂吟味委曲可達御聽候。元來自己之産業情に入相働、相應之利潤を以可致渡世筈之處、己之産業者怠り、諸物之高利を取候儀を渡世与相心得、時々色々工夫いたし、世上指支杯茂不顧族者、誠以人道において有之間敷筋に候。魚類杯も品に寄、近年御當地の指出方以前与者甚薄き様子。夫ゆる自直段も高直に相成候様子に候。漁獵者さして替りたる儀も無之躰に候得共、畢竟當町之者共風俗不宜故、御郡方においても夫を厭ひ、他所の賣遣候類も有

之哉。於海上他國之者の賣渡候族も相聞候。御當地に而者、御用之分さへ調兼候様之儀も有之旨。是等奉行人不沙汰故如斯之場に至り候哉。是等之儀に付而は、松雲院様御代中段々委曲被仰出置候趣も有之處、年古き儀に而いつとなく致忘失候躰に候。今度物價方被指止儀にも候間、所々奉行人尙又急度相心得、綿密に遂詮議、諸品下直に相成候様厚可致穿鑿。先年より段々被仰出候趣有之處、奉行人不行届故歟、下役之者杯依怙賄賂之筋を以、詮議方柔弱之趣茂有之、支配之者共仕度儘之様に茂相聞候。自今萬端正路に相心得候様、急度可致支配候。且又所々奉行、其支配迄之儀与不存、互に申談、不指支様可心懸候。若此上差支之品も有之候は、急度御詮議可被仰付候事。

五月

六月五日。金谷御廣敷の經費を減ずべきことを告ぐ。

〔諸事要用雜記〕

六月五日

一、御儉約方に付左之通同被仰出、金谷頭へ申談る。

金谷御廣式向御入用多分之儀に候所、御口向暨御膳所御買上物直段甚高價に而、外々とは格

別御入用相嵩候躰に候。今般格別御儉約被仰出候儀、於各手前幾重に茂嚴重被遂僉議、下々之者迄も心得方不宜者は勿論、今度御省略之筋不會得之者有之候者、無泥被指省、割場并御臺所より人撰之上被請取、指替可被申候。此度之儀は彼是御趣意も有之、格別被仰出有之候條、いづれにも聊無油斷嚴重穿鑿可有之候。此段達御聽申談候事。

六月

六月十二日。前田齊泰の病氣平癒祈禱を白山宮及び金澤觀音院に命ぜしむ。

〔成瀬正敦日記〕

六月十二日

一、御快然御祈禱之儀相伺、左之通寺社奉行呼立申談。

御祈禱料

一、白銀五枚宛

白山・觀音院

右相公様御不例に付、御快然之御祈禱被仰付候條、早速執行、御札・守差上候様可有御申渡候事。

六月十二日。足輕・坊主・小者の生活に關して諭す。

右申渡は五月廿八日のものをいふ

〔毎日帳書抜〕

六月十二日

一、右申渡候に付、諸組足輕・坊主・小者近來次第に分限を取失、衣食住を初身分不相應之儀共相聞、別而妻子を初衣類等、先年与違絹類致着用候者共有之躰沙汰之限に付、向後急度相心得可申旨等申渡。

足輕小頭・坊主共之儀、袖は御免に候得共、御外邊御用之節は格別、御内輪に而者成限着用致間敷、刀・脇刺拵金銀相用候儀有之間敷、燒付たりとも金銀に似寄候品は相改可申分も申渡。

〔郡方御觸〕

今般御家中之人々儉約之儀、被仰出之趣有之、一統申渡候。就夫諸組足輕・坊主・小者暮方之儀、前々申渡置候趣有之處、近來次第に分限を取失ひ、衣食住を始身分不相應之儀共相聞え、別而妻子を初衣類等、先年与違絹類着用いたし候者共有之躰、沙汰之限りに候。向後萬端急度相心得、前々申渡置候趣相守、衣類之儀者妻子等に至迄、木綿・布之外堅着用致間敷候。家居之儀も新た之分者、奉行人承届相應に致させ可申候。在來候不相應之家居者、追々取毀等いたし相改可申候。且足輕小頭并坊主共之儀、袖者御免に候得共、御外邊御用之節者格別、

御内輪に而者成丈着用致間敷候。將又刀・脇刺拵に金銀相用候儀有之間敷候所、中に者心得違之者有之躰に候條、焼付たり共金銀に似寄候品者相改可申候。右之趣夫々不相洩様急度可被申渡候事。

寅 六 月

六月廿一日。前田齊泰の病氣平癒を能登一ノ宮及び俱利伽羅に祈願せしむ。

〔諸事要用雜記〕

六月廿一日

一、先達而白山・觀音院等において御祈禱被仰付、猶又一ノ宮・俱利伽羅等にも御祈禱被仰付、寺社奉行へ申達す。

六月廿五日。前田齊泰、京醫小林豊後守を召して病を診せしむ。

〔官私隨筆〕

六月廿一日

一、成瀬主税等罷越、昨夕又御惡心之御氣味被爲在、夜前御寢成兼被成、御心下も少御瘡、脛廻り等御水氣少々御減じ候様に被奉存、御内攻之御氣味と恐入候旨探元等申聞、今朝より沈香豁胸湯指上候由等演述。依之京都より小林豊後守殿追付下向之筈故、途中迄以飛脚早速

被罷越候様可申達旨、御用番より町奉行へ被申渡。且只今に而は蘭醫之申上候ジキターリス御用可然哉僉議候様申談す。

〔官私隨筆〕

六月廿五日

一、小林豊後守夜前夜半過到着、今朝登城之筈に付五半頃出席。
一、豊後守四時過頃歎上下に而登城之由。無程御奥書院横御廊下屏風圍に而、大庭探元・長谷川學方罷出御様子申述候節、屏風之外に而山城守相同じ潛に承之。高田善右衛門一人罷出有之也。

一、診濟又右之所へ退座之筈之所、是又此方より申入、御居間書院二之間に着座有之。其所へ成瀬等四人并探元・學方・江間篁齋罷出承之。其後へ丹後守・山城守・播磨守・内匠・大學罷出承之。

一、右之後瀧之間にて御料理出、相伴横井自伯之由。畢而重而通り再診相濟、御居間書院前段同斷。

一、主方は家方之由七味降氣湯、御兼用外臺甘草乾姜湯。且又御便秘之方に付見合候而蟻蚘菜湯差上可申由。

一、又瀧之間へ退座之上、丹後守等五人罷出及挨拶。
一、小左衛門より示談有之、同席等何も無別存に付、伺之上豊後守へ御療養御頼に成。
六月廿六日。諸士の明倫堂に出席を督促す。

〔觸留〕

各様文武稽古之儀、御修補以後被仰渡、其砌者相應に出座も有之候處、近頃は追々致減少候
躰。尤御父子等之内心掛宜、無懈怠御出座之御人々茂候得共、御懈怠之御人々茂有之由粗承
候。別而間遠成御番方之御面々茂有之候之處、右等之族御座候而は、於私共申譯無之次第に
候。此上等閑に心得被成、重而何と歎御察當有之候而は、不容易儀に付、先達而志村平之丞
殿に御呼立之節茂、譯而被仰談御承知之通に候間、以來無御油斷御出座可被成、猶私共より
も譯而申談候様入念被仰聞候。講書之儀廿二日若御指支之御人々は、廿七日朝御出座可被成
候事。

六月

別紙之通大田小又助殿被相達候條、此段承知被成、先々早速御廻、落着より御返可被成候、
以上。

六月廿六日

小島佐次兵衛

是月は小盡
なり

小木孝吉様

六月晦日。前田慶寧、森快安を遣はして齊泰の病を診せしむ。

〔諸事要用雜記〕

六月廿九日

一、當月十四日□□付、從筑前守様森快安被遣、今晚五時頃到着、直に奉診、今晚之處も
何等了簡不申上候。

〔官私隨筆〕

七月朔日

一、從筑前守様森快安被遣候。昨夕到着相診、今日も罷出診候由故、呼候而尋候處、御虚腫
に而急に御通利は被爲在間敷、其内に御疲れ出不申様仕度旨等申聞也。

六月。本年に限り諸士よりの借知を廢することを告ぐ。

〔留書〕

御勝手連々御難澁至極に付而は、御家中知行之内近年打續過分之御借上茂被仰付候處、御家
中之人々茂一統益難澁之躰に聞召、御氣之毒に被思召候。然處品々無御據御物入打續、御運
方必至与御指支に付、其以來茂年々知行之内御借上被成候。全躰御不足高過分之儀に付、此

末御運方等何分に茂御手段無之旨、御勝手方より申上候に付、乍御心外先當分之處去年之通御借知可被仰付候。御家中之人々茂可爲迷惑候得共、精誠相心得御奉公取續可申候。

一、是以後當分御借上方之儀、前文之通り候得共、當時一統別而難澁之様子被聞召候に付、格別之思召を以、御當用を茂打欠、御詮議被仰付、當年一作之處御借知全御用捨被成候。

右之通可申渡旨被仰出候條、被得其意、組・支配不相洩様可被申渡候、以上。

六月

前田内匠

〔留書〕

今般御家中一統御借知一作御用捨に付、給人收納米不殘町藏入に候條、藏宿并百姓に、人々より直に申渡候様可被相心得候。

一、御切米御扶持方被下候人々は、當暮渡り來春渡りを以御用捨之事。

一、來年より御借知村附帳、是迄之分相用候。若箇所替等致度人々は、來年四月中當場承合村附帳指出可申候。尤右兩様共、村方并藏宿に、承知方給人より可申遣儀に候。

一、去暮以後跡目相續等之人々は、村附帳來年四月中可指出候。

六月

六月。金澤の町年寄より町人の風俗に關する心得を諭す。

別紙は五月廿八日の令
限人之儀分
取失の條に
云々の條に
同じ

〔郡方御觸〕

衣食住之儀に付金澤町中へ被仰渡之寫

儉約等之儀、前々より毎度被仰出候所、兎角心得違之人々も有之、惣而前々より御定等有之品も、何与なく令違失、人氣次第に輕薄に相成、衣食住を初又々漸花美に押移候段、ケ様成行候而者困窮彌増、御國躰にも拘り、不容易次第に付、以後急度遂儉約可申旨、今般一統被仰渡、町方之儀も別紙之通被仰渡候。且舊臘申渡置候從公儀被仰渡候趣、嚴重相心得可申旨、御用番美作守殿被仰渡候事。

右之趣被得其意、町中へ不相洩様可被申渡候、以上。

六月

水原清五郎

吉田丹次郎殿

〔金澤町中法度書等〕

今般被仰出之趣に付、猶又心得方之儀申渡候。元來町人共之儀は、御國恩を存付、賣人は其商買、職人は其家職を専らにし、分限不取失之様渡世方大切に可致處、近年次第に僭上奢侈に押移、衣食住等結構相成、不心得至極に候。衣服之儀男女共、時之流行高料の品をも相用、

別而女向衣裳榮耀增長いたし、無益に手間懸り候花美なる染模様・縫模様などの品を相用、剩内證に而者婚禮之砌等、武家禮服に相用候品を致着用候儀も相聞、是等は僭上至極、甚以心得違之事に候。自今婚禮等押立候祝儀之時分たり共、紋付之外堅く着用致間敷候。於御定は絹・紬着用いたし候儀苦しからず候へ共、夫々貧福之分限に應じ、貧者は布・木綿類のみ致着用可然候。勿論下人下女たるもの布・木綿類に而事足候。是等も其主人々々より可申論候。食類近來大に奢に相成、品々手を盡したる料理、或は遠來之美味、又は時あらざる珍しき品など相用、榮耀至極之事に候。振舞等前々之御定も有之處、心得違之事に候。以來御定之趣堅く可相守候。家作之儀も品々花麗榮耀之事ども相聞候。是又御定等之儀心得違無之様、急度可相心得候。其外祝事は不及申、葬禮・佛事等至而軽く可致候。音信・贈答、身近親類等押立候祝事にて不指遣ば不叶分者、干看之類一種可致贈答、其外可爲無用候。諸商物尤花美高料之品取扱申間敷、前々より申渡置候商停止之品、彌嚴重可相守候。畢竟奢侈致增長候故、産業を怠り高利を貪り、或は種々姦曲なる取組などいたし、不埒之至りに候。向後急度心得方相改、萬端正路に可相心得候。惣而今度被仰出之御趣意を奉會得、是迄之心得違を改、前々被仰出御法度之品々を相守り、質素儉約にして古風にかへり候得者、其身安穩子孫繁榮之基たるべく、然らば人々手前々々の爲にて、誠に難有御仁恵に候條、是等之趣能々致勘辨、互

に申合、家内暨同居借家末々迄、家主等より念頃に申論し、常々不忘様する永く行届候儀肝要之事に候。右之趣に付、今般分而年寄衆より被仰渡之事共有之候間、夫々嚴重相心得可申候。簡様申渡候上、萬一心得違いたし、相背候者相聞においては、用捨の沙汰なく嚴重可申付事。

右者今般被仰渡之趣に付、尙又心得方之儀御奉行所御口達に而被仰渡候を承候拙者共より、口達を以夫々申渡候。右等之趣若承違も可有之哉と、猶更荒増書認各迄相達之置候。別而役人たる者御趣意得と致會得罷在、取締方無由斷可申談旨、御奉行所分而被仰渡之趣も有之候間、於各は聊無違失急度被相心得、いかにも榮耀奢侈之風俗改り、質素節儉を専らとして、永久忘失無之様可被相心得候、以上。

寅 六 月

龜 田 市次郎

香林坊 兵 助

原野屋 半 助

本町地子町肝煎衆中

七月七日。前田齊泰夫人の費用を減ずべきことを告ぐ。

〔御留守江戸詰御用諸事留〕

加賀藩史料 第十五編 天保十三年

七月七日

一、御住居附御用人・同御用達に左之通申渡候筈。

御住居向御入用方格別相嵩、一躰之思召とは相違に付、今度御留守居松平内匠守殿等右御取締懸り被仰付、御省略之御詮議有之候。御内輪向之儀先達而より度々御人減等も有之候得共、今般之御趣意も有之儀に候間、猶更格別に可相減品も可有之候條、諸役人何茂誠實を以遂詮議、御省略之筋相立候様綿密可被相心得候事。

寅 七月

七月八日。前田齊泰夫人使を遣はして山王社の祈禱札を上らしむ。

〔成瀬正敦日記〕

七月八日

一、前月廿五日出當朔日の相延候早飛脚、逗留今日着、姫君様より御書被進。

一、姫君様より以奉札、澤田山王社において御祈禱被仰付候旨に而、御札・守二臺御肴一折被進。御札等指上、御肴は御用之節可指上旨申上置候事。

七月廿八日。履物の制限を定む。

〔片岡孫作藏文書〕

天保十三年寅七月廿八日組合頭虎屋彌兵衛殿方へ呼立申渡す。

はき物商賣人心得方

- 一、男女雪駄是迄の通、併高價成分不相成事。
 - 一、草履下駄の緒、草・布・木綿不苦、絹・紬・糸真田、都而絹るゝ不相成事。
 - 一、女草履表黑白交織の分不苦事。
 - 一、こよりにて仕立候表、并櫻欄表不指支、併模様等織込高價の分不相成事。
 - 一、塗足駄・塗下駄等、たとへ魚抹の塗たりとも、都而色替り候分不相成事。
- 右之通被仰渡候條、小間物商賣・八百屋物商賣・足駄商賣人等迄嚴重可申渡、尤御受取立指出候事。

右今般被仰渡、奉得其意、爲其御請上之申候、以上。

南町小間物商賣 野々市屋

壬寅七月廿八日

忠右衛門

町御奉行所

七月晦日。郡方に嫁娶及び葬儀を簡易にすべきこと令す。

〔郡方御觸〕

是月は大盡
なり

取舞はとり
おきなるべし

近年御郡方之者共茂、次第に分限を取失ひ、衣食住を初、嫁娶并取葬等之節、以之外奢侈僭上之族有之躰相聞ひ、沙汰之限に候。今般都而被仰渡之趣も有之候間、前々より之御定通彌相守、少も榮耀之儀無之様嚴重可申渡置、猶委曲之儀者追而可申渡候事。

寅七月晦日

右之通得其意、一統不相洩様申渡、請書可差出候、以上。

津田少左衛門

林源多郎

吉田藤馬

石川・河北郡十村中・新田裁許中・

同列中・山廻中・同列中

七月。寺家・社家の風俗に關して諭す。

〔御觸留書〕

今般御家中初風俗方等之儀に付、一統心得方之儀被仰出之趣、先達而委曲申觸置候通に候。然所寺社家風俗方等之儀、跡々より被仰出之趣、是迄毎度申渡置候得とも、次第時俗に流情弱に押移、境涯不似合之族茂有之躰粗相聞え候。今般被仰出之儀は、公邊御趣意之筋も有之、

住職云々本の儘

僧侶に不限、諸國格別御僉議御含之品も有之候付、拙者ども僉議之上、猶又一統心得違無之嚴重申談候條、然上は前々被仰出置候御ケ條、暨拙者共先役より申渡候條々、違失無之嚴重に可被相心得。依之今般大綱ケ條書を以申談候趣、急度相改、以來萬端如法に可被相心得候事。一、寺庵之内親類たり共寺中に女指置間敷旨等、毎度申渡置候所、近年猥りに相成、中には洗濯雇人抔与名目を付、晝夜留置候族毎度聞前等有之所、右等之分を頭寺手前において、住職隠居願抔、取扱も慈愛与相心得罷在躰に候得共、前段之族情弱不如法不縮至極之譯柄、以來組合等迄も相互に遂吟味、無泥頭寺ひ及届可申。其儀無之、脇より聞前有之候上者、組合法眷迄も無用捨嚴重可申付、尤旦家たりとも寺役法用之外、夜中俗家ひ立入候儀は勿論、猥り之參會堅指止可申事。

但、宗旨により説法等之節參詣之男女を留置、酒宴を設け、時刻を移し、猥之振舞有之躰聞前之趣有之候。元來寺庵之儀は如何にも清淨第一に可致之所、右等之族却而戯場遊所に似寄、甚歎ケ敷次第。參詣之輩迄も相應に辨當等之支度無之而は參詣いたし兼候様にも押移、甚惡敷風俗不心得之至に候。兼々旦家等之教導も可致境涯に候所、右族參詣人迄も押移、沙汰之限りに候。以來右習俗嚴重相改、向後寺中に人集、酒宴ケ間敷儀堅可爲無用事。